

東北大学生の生活と意識 に関する調査

2021 年度前期・行動科学基礎実習報告書

目次

はじめに

(小川和孝) 1

「アルバイトが生活満足度に与える影響——

アルバイト収入の不安定性とアルバイトの動機に注目して」

(石野清香・佐藤晃季) 2

「大学生の職業観と居住地域選択に関する意識調査——人口偏在問題改善と

将来設計への影響、就業意欲に対する手がかりを求めて」

(飯田大海・庄子敬太・田西秀仁・美澤龍太) 21

「東北大生の学習に関する調査——学習への満足度と意欲」

(大倉瑠那・大沼あかり・生内絵梨香・山口侑平) 36

「東北大生の社会・政治関心——性的マイノリティへの人権意識と

SNS 上での政治関心」

(松村レオナルド大地・韓在賢・橋村和英) 66

「東北大生の生活・友人形成と SNS 利用の関係」

(遊佐真・小田涼平) 84

「東北大生の生活と鬱症状——

新型コロナウイルスによる対人関係の変化に着目して」

(岩間珠菜・塩本拓己・鈴木果奈・野口晴香) 97

調査票 113

基礎集計表 141

はじめに

小川和孝

本報告書は、2021 年度前期に東北大学文学部において開講された「行動科学基礎実習」の受講者による論文をまとめたものである。この授業では社会調査の企画、設計、実査、分析、報告までの一連のプロセスを学生が経験することで、社会調査を実施する知識・技能を習得することを目的としている。

今年度の調査では、東北大学の文学部、経済学部、工学部、理学部の 4 学部において開講された授業を対象に、授業担当の先生を通じて履修している学生への調査協力を依頼した。

今年度は引き続き新型コロナウイルスの世界的な流行により、多くの授業は全面的に、あるいは部分的にオンラインによって実施されることになった。そうした状況を踏まえて Google フォームを利用したウェブ調査という形で行った。多くの授業では Google Classroom によって授業の運営管理が行われており、それを通じて履修学生へ調査フォームの URL を転送していただくという形で依頼した。

調査項目は学生の立てたりサーチ・クエスチョンを反映したものになっている。詳しくは巻末の調査票を参照されたい。有効回答数は 236 件であった。こちらでも詳しくは巻末の基礎集計表を参照いただきたいが、回答者の属性では男性が約 61%、女性が約 36%であった。また学年では 2 年生と 3 年生が 9 割弱を占めている。

受講者には関心の近さによって、合計 6 つの班にわかれて報告書を執筆してもらった。それらは、進路・就職に関する意識、社会政治的な意識、SNS と人間関係、アルバイトと生活満足度、学習環境と満足度といったものである。コロナ禍におけるメンタルヘルスといったものである。いずれも貴重なデータを使用した、ユニークな視点が入り入れられた分析になっている。

調査に協力をいただいた学生の皆様と、対象授業の担当の先生方には心から御礼を申し上げたい。言うまでもなく、社会調査は調査対象やその関係者の善意による協力がなければ成り立たないものである。また、文学研究科博士課程の謝拓文さんにはティーチング・アシスタントとして、授業準備や学生の分析に関するアドバイスなどを担当していただいた。授業運営を大いにサポートしていただいたことに、記して感謝申し上げる。

アルバイトが生活満足度に与える影響

——アルバイト収入の不安定性とアルバイトの動機に注目して——

石野 清香・佐藤 晃季

1. 研究関心とリサーチクエスション

大学生の生活サイクルを占める代表的な要素の一つとしてアルバイトが挙げられる。街ではコンビニエンスストアや飲食店、学習塾など、多様な業種において学生アルバイトが求められている。また、日本学生支援機構による学生生活調査(2020)では、昼間4年制大学に通う大学生サンプルのうち、実に86.1%が直近1年間にアルバイトに従事していた。

しかし、昨今の新型コロナウイルス感染防止措置の影響により、学生の活動は大幅に制限されることとなった。2020年4月には緊急事態宣言が全国に適用され、本学においても講義のオンライン化、課外活動の制限などの措置がとられた。それから1年以上が経った2021年現在においても、外出自粛・感染防止の風潮は根強く、平時のような安定したアルバイト生活を送れていない学生も多いだろう。

さて、大学生のアルバイトは、その業務を通して人間的成長を促進する場としても機能していると考えられる。接客業務を行うことによって社会的にふさわしい振る舞いを身につけられることや、共同作業を伴うアルバイトに参加することで社会的責任を自覚できるなどの成長があるだろう。

一方で、アルバイトが生活習慣の乱れや人間関係のトラブルを引き起こす場合も存在する。山本ら(2018)では、授業中に眠くなる、というような問題がアルバイトを一因として引き起こされていることが示されている。アルバイトは必ずしも良い方向にのみ影響するのではないことに注意すべきである。

さらに昨今の新型コロナウイルス感染拡大状況下では、安定したアルバイト形態を築くことは困難になっていると考えられる。

本分析では、アルバイトは、学生自身の考える生活満足度にどのような影響を与えるのか、ということを明らかにすることを目的としている。特に、アルバイトがもたらす収入の不安定さ、アルバイトを始めた動機付けに注目し、生活満足度を損なわないアルバイト生活のあり方についても検討していきたい。

2. 先行研究と仮説

2.1 大学生活におけるアルバイトについて

近年、日本の大学生におけるアルバイト就労率は増加傾向にあるようである。日本私立大学連盟による『私立大学学生生活白書(2018)』では、2010年調査、2014年調査から続

けてアルバイトに従事している学生の割合が増加していることが示されている。これは、日本学生支援機構による『平成 30 年度学生生活調査結果（2020）』においても示されており、昼間部大学の学生においては実に 86.1%の学生がアルバイトに従事している。また、アルバイトを始めた動機付けとしては、「ほしいものを購入したり、遊び、旅行、趣味などにあてる」が最も多く、次いで「主に生活費、学費などにあてる」「社会勉強」などが挙げられていた（日本私立大学連盟 2018）。

また、渡辺（2015）においては、「学生生活の 3 領域」として挙げられている「学業」「サークル活動」「アルバイト」内で、「アルバイト」と「サークル活動」の間には統計的に有意な関連がみられ、アルバイトはサークル活動を抑制する効果が見られることが示されている。また、アルバイトに従事している学生においては、キャンパスに滞在している時間が、アルバイトに従事していない学生に比べ短くなる傾向があるものの、大まかな傾向は両者とも一致している。このことから、アルバイトをしている学生においては、学生生活の舞台が「キャンパス」「アルバイト先」「自宅」に大別され、アルバイトをしていない学生においては「キャンパス」「自宅」に大別されることが窺える。

しかし、昨今の社会状況を鑑みるに、2020 年以降学生のアルバイト形態は一変したように思われる。特に、オンライン講義の普及に伴い外出の機会が減り、アルバイトを始められない・辞めざるを得ない学生もいたことであろう。このような点で、先行研究との齟齬が生じる可能性には注意する必要がある。

2.2 アルバイトが学生生活に与える影響について

先行研究では、近年のアルバイト形態の多様化による学生のアルバイト負担の増加が示されているものが多かった。

木戸口（2013）では、「深夜 22:00 を過ぎても時給が上がらない」「仕事入りの時間に 1 分でも遅れたら、その 1 時間の時給は払わない」というような違法な状況に直面している学生の声が提示されている。近年の不況や小売店などの深夜業務のニーズ拡大が原因の一つと見られる雇用側からの学生の酷使、いわゆるブラック・バイトが問題とされている。ブラック・バイトの件に限らず、お金欲しさに無理なアルバイト生活を送ってしまう学生も少なからず存在するように思われる。このようなアルバイト生活に陥ってしまうと、学生たちは過度な負担に苛まれ、生活リズムの乱れや心身の健康状態の悪化というような問題が表出するのは想像に難くない。

一方で、アルバイトが学生に良い影響を与えることを示す論文も存在する。関口(2010)では、学生が従事するアルバイトが要する、スキルの多様性及び主体的な仕事内容の管理が、学生のキャリア形成の度合いとの間に直接的関係を持っており、また週あたりのアルバイト勤務時間とキャリア形成の度合いの間には、上に凸な曲線関係があることが示されている。また、キャリア形成の成熟の一定の度合いに必要な最適なアルバイト勤務時間

は、業務のスキル多様性や職務内容の自由度に依存していることも示されている。アルバイトが、単にお金を稼ぐだけの場であるのみならず、職務を通じて獲得した技術や協調性などを通して学生に自身の将来について考えさせる場ともなっているのだ。また、田村ら(2011)においては、アルバイト内での真剣な活動が人格的成長を促し、逆に言うと、人格的成長を促すためには、アルバイトに積極的・真剣に取り組む中で様々な経験を積むことが大切である、とされている。

さらに、アルバイトを通じて友人関係が伸張していくことは言うまでもない。結果的にアルバイトにおける人間関係がストレスになってしまうこともありうるが、基本的には新たな人間関係の創設の場としてアルバイトは重要な舞台となっているといえよう。

しかし、新型コロナウイルス感染拡大によるアルバイトへの影響も多大なものとなっていると考えられる。飯田ら(2021)では、新型コロナウイルス発生前後を比較すると、発生後の方が経済的に困っていると感じている学生が増加していることが示されている。この原因として、アルバイトは学生の経済状況の重要な支えとなる要素であるが、アルバイト実施者のうち約4割が勤務時間を減らされているという状況の影響の可能性が挙げられている。加えて、山根ら(2021)によると、コロナ禍における学生の不安の対象として、授業・講義に対する不安について二番目に高かったのが経済的な不安であった。新型コロナウイルス感染拡大によってアルバイトの機会が減った学生や解雇された学生はアルバイト実施者の3/4にのぼり、そうした学生は経済状況への不安が高い傾向がみられることがわかっている。

2.3 大学生生活と生活満足度について

「生活満足度」という概念は、ここでは「自身の今の生活にどの程度満足しているか」ということを表すこととする。

岩田(2015)では、大学生の生活満足度に対して、暮らし向きの余裕や人間関係の充実度などが正の、性別や将来への不安が負の効果を与えていることが示されている。特に人間関係が重要な規定要因となっているようである。

「国民性格選好度調査(2012)」においては、幸福感を判断する際に重視した事項(複数回答可)としては、「家計の状況」「健康状況」「家族関係」「精神的なゆとり」などが挙げられている。ただし、この調査は大学生以外の人々もサンプルに多数含まれていることに注意すべきである。

上述したように、大学生活は「学業」「サークル活動」「アルバイト」に大別される。アルバイトが経済状況に大きく影響を与えることや友人関係を伸張させること、また上記二つの調査と組み合わせて推測するに、アルバイトを思うようにできていない学生が多くなっている昨今では、「家計の状況」や「人間関係」が充実しておらず、満足度が低くなっている学生も多くなっているのではないだろうか。

本分析では、アルバイトに関する諸要因が生活満足度にどのような影響を与えるのかと

いうことに主眼を置いて分析を進めていきたい。

2.4 仮説

- ・仮説1「アルバイト収入額のばらつきが大きいほど、生活満足度は低くなる」

先行研究では、新型コロナウイルス感染拡大状況下でのアルバイト機会の減少による経済不安が高まっていることがわかっている。しかし、緊急事態宣言の度重なる発令や延長とその解除、飲食店の時短営業の要請など、非常に不安定な状況が続いている。これに伴い、学生のアルバイト機会も状況によって大きく異なっていることが予想される。

よって、今回の分析では、先行研究では触れられていなかったアルバイト収入額の不安定さに着目し、大学生の生活満足度にどのように影響しているのかを探っていく。また、学業、趣味、人間関係、将来設計の満足度についても分析する。収入は生活のあらゆる部分に影響する要素であり、生活満足度という総合的な尺度のみでは趣味や学業といった生活の細部への影響を捉えきれない可能性があるため、学業、趣味、人間関係、将来設計の満足度についても分析する意義があると考えられる。

- ・仮説2「アルバイトに熱心な学生ほど、生活満足度は高くなる」

上述の通り、アルバイトはキャリア形成に良い影響を与えること、将来への不安が生活満足度に対して負の影響を与えること、アルバイト業務のスキル多様性・自由度がキャリア形成に必要なアルバイト勤務時間を規定する要因になっていることが示されている。

今回の分析では、「アルバイトに熱心である」ということを、特にアルバイトを始めたきっかけ・アルバイトの業務内容が要する自発性に注目して分析していきたい。そして、先行研究と同じようにアルバイトが学生生活に対して作用しているのか否かを探していきたい。

3. 使用変数

3.1 使用変数の説明とその度数、記述統計量

- ・性別

Q1「あなたの性別をお答えください」という質問に対し、「男性」「女性」「その他(自由記述)」の3カテゴリで調査した。サンプルには「男性」「女性」を選択した回答を用い、その他のものはサンプルから除外した。分析では「男性」を基準カテゴリとする変数を用いた。今回のサンプルにおいては、男性の方が多い結果となった。

- ・学年

Q3「あなたは現在何年生ですか」という質問に対し、「学部1～4年」「大学院生」「研究生」「その他(自由記述)」の7カテゴリで調査した。サンプルには、「その他」を除外し、「大学院生」と「研究生」を統合したものと「学部1～4年」を用いた。ま

た、「学部1～4年」のみの変数も作成した。これを以下では「学部生」と呼ぶ。学部2年が最も多く約半分を占め、次いで学部3年が多い結果となった。

表 3.1 性別

	度数	%
男性	145	63.0
女性	85	37.0
合計	230	100

表 3.2 学年

	度数	%
学部1年	1	0.0
学部2年	120	50.8
学部3年	89	37.7
学部4年	19	8.1
大学院生・研究生	7	3.0
合計	236	99.6

・生活満足度

Q56「あなたは現在の生活に満足していますか」という質問に対し、「満足している」「まあまあ満足している」「どちらともいえない」「少し不満である」「大いに不満である」の5カテゴリで調査した。サンプルには「無回答」を除外した回答を用いた。「まあまあ満足している」が最も多く、その他のカテゴリはほぼ大差ない結果となった。

表 3.3 生活満足度

	度数	%
満足している	39	17.0
まあまあ満足している	99	43.0
どちらともいえない	33	14.3
少し不満である	45	19.6
大いに不満である	14	6.1
合計	230	100

・学業、趣味、人間関係、将来設計の満足度

Q57において、回答者自身の学業、趣味、人間関係、将来設計のそれぞれについて、満足しているかどうかを「満足している」「まあまあ満足している」「どちらともいえない」「少し不満である」「大いに不満である」の5カテゴリで調査した。サンプルには、それぞれの回答について「無回答」を除外した回答を用いた。どの回答も概ね傾向が一致しており、「まあまあ満足している」に回答が集中しているが、将来設計の満足度については、「どちらともいえない」「少し不満である」に回答が偏っている点が特徴的である。

また、これらの変数と総合的な生活満足度について、「大いに不満である」を0、「少し不満である」を1、「どちらともいえない」を2、「まあまあ満足している」を3、「満足している」を4とした数値変数を新たに作成し、その合計点（以下「満足度合計」とする）を分析に用いた。その際、Cronbach の α は 0.728 であった。

表 3.4 学業満足度

	度数	%
満足している	30	13.0
まあまあ満足している	108	46.8
どちらともいえない	39	16.9
少し不満である	44	19.0
大いに不満である	10	4.3
合計	231	100

表 3.5 趣味満足度

	度数	%
満足している	42	18.2
まあまあ満足している	105	45.5
どちらともいえない	31	13.4
少し不満である	37	16.0
大いに不満である	16	7.0
合計	231	100

表 3.6 人間関係満足度

	度数	%
満足している	29	12.6
まあまあ満足している	101	44.0
どちらともいえない	38	16.5
少し不満である	49	21.3
大いに不満である	13	5.7
合計	230	100

表 3.7 将来設計満足度

	度数	%
満足している	11	4.8
まあまあ満足している	44	19.0
どちらともいえない	64	27.7
少し不満である	80	34.6
大いに不満である	32	13.9
合計	231	100

表 1.8 学業、趣味、人間関係、将来設計満

足度の合計得点

点数	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	合計
度数	3	2	3	3	3	11	2	8	15	13	20	16	28	28	23	23	9	5	5	3	5	228
平均 : 11.44 標準偏差 : 4.12																						

・アルバイトの有無

本調査では、直接的にアルバイトをしているか、という設問は設定されなかったが、Q30「今年1月から5月の間の、月の平均アルバイト収入額はいくらですか。」という問いにおいて、「アルバイトをしていない」という選択肢が存在し、「アルバイトをしていない」を選択した回答者はそれ以降のアルバイトに関する設問をスキップするよう設計されている。そこで、「今年1月から5月の間の、月の平均アルバイト収入額はいくらですか。」に対して、「アルバイトをしていない」を選択した者を「アルバイトをしていない群」に、「1万円未満」「1万円以上3万円未満」「3万円以上5万円未満」「5万円以上7万円未満」「7万円以上9万円未満」「9万円以上」を選択した者を「アルバイトをしている群」に分割する変数を作成した。なお、「無回答」はサンプルから除外した。

今回のサンプルにおいては、約 7 割がアルバイトに従事していることがわかった。

・月の平均アルバイト収入額

Q30「今年 1 月から 5 月の間の、月の平均アルバイト収入額はいくらですか。」という質問に対し、「アルバイトをしていない」「1 万円未満」「1 万円以上 3 万円未満」「3 万円以上 5 万円未満」「5 万円以上 7 万円未満」「7 万円以上 9 万円未満」「9 万円以上」の 7 カテゴリーで調査した。軽く前述したが、アルバイトに関する設問で「アルバイトをしていない群」が回答できる設問は本問だけであるので、他のアルバイトに関する設問とは異なり本変数においては「アルバイトをしていない群」もサンプルに含めた。また、それぞれのカテゴリーの中央値をそのカテゴリーのサンプル値として扱う数値変数（それぞれ「0」「0.5」「2」「4」「6」「8」「10」）も作成した。その平均、標準偏差は表に掲載している通りである。また、「無回答」は次サンプルから除外した。

今回のサンプルにおいては、「アルバイトをしている群」において、7 万円未満の平均アルバイト収入額のサンプルが大多数を占めていた。

表 3.9 アルバイトの有無

	度数	%
アルバイトをしている	164	70.1
アルバイトをしていない	70	29.9
合計	234	100

表 3.10 月の平均アルバイト収入額

	度数	%
アルバイトをしていない	70	30.2
1万円以上3万円未満	19	8.2
3万円以上5万円未満	69	29.7
5万円以上7万円未満	52	22.4
7万円以上9万円未満	18	7.8
9万円以上	4	1.7
合計	232	100

平均 : 2.20 標準偏差 : 2.15

・アルバイト収入のばらつき

Q35「今年 1 月から 5 月のアルバイト収入額について、平均額を実際の収入額が 5,000 円以上、上回った月・下回った月はそれぞれ何回ありましたか。」という質問に対し、上回った月の回数、下回った月の回数をそれぞれ 0 回から 4 回の選択肢で調査した。

また、得られた回答のうち現実的にあり得ない回答や無回答を欠損値とした上で、上回った月の回数と下回った月の回数を足し合わせ、新たに「アルバイト収入額のばらつきの合計回数」の変数を作成した¹。合計 0 回が約 3 割を占め最も多いが、全体的に分布していることがわかった。

¹ 平均を上回った回数、下回った回数それぞれについても検討することを想定し、上回った月の回数と下回った月の回数を分けて調査したが、「収入の不安定さ」のみに着目することとしたため、今回は上回った月・下回った月の回数を足し合わせた変数のみを使用し

本分析では、この変数を「アルバイト収入額の不安定さ」を測定する尺度として用いる。

表 3.11 アルバイト収入のばらつき

ばらつきの回数合計	度数	%
0	43	30.3
1	14	9.9
2	19	13.4
3	19	13.4
4	24	16.9
5	23	16.2
合計	142	100

・アルバイト動機

Q32「あなたはどのような理由からアルバイトを始めましたか。以下の選択肢から、もっとも当てはまるものを選んでください。複数のアルバイトをしている方は、そのうち主なもの1つについてお答えください。」という質問に対し、「お小遣い(趣味)のため」

「社会勉強・自分の将来の役に立てるため」「学費・生活費のため」「保護者や友人に言われたため」「その他(自由記述)」の5カテゴリーで調査した。また「お小遣い(趣味)のため」「社会勉強・自分の将来の役に立てるため」を「積極的理由」、学費・生活費のため」「保護者や友人に言われたため」を「消極的理由」とし、「その他」のものは分析者の判断で「積極的理由」または「消極的理由」に分類した。また「無回答」はサンプルから除外した。

既存研究に示されていた通り、今回のサンプルにおいてもアルバイトの動機として最も多かったのは「お小遣い(趣味)のため」であり約半数を占めていた。「積極的理由」

「消極的理由」に分類したところ、「積極的理由」の方が大幅に上回った。

表 3.12 アルバイト動機

	度数	%
お小遣い(趣味)のため	79	48.2
社会勉強・将来のため	48	29.3
学費・生活費のため	28	17.1
保護者や友人の勧め	3	1.8
その他	6	3.7
合計	164	100

表 3.13 アルバイト動機（加工後）

	度数	%
積極的理由	132	80.5
消極的理由	32	19.5
合計	164	100

・アルバイト自発性

Q33「あなたのアルバイトは、自発性(率先して仕事をする事、勤務内容を自分で考えたり工夫したりすること)が必要なものですか。」という質問に対し、「あてはまる」「少しあてはまる」「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の5カテゴリで調査した。また、「無回答」はサンプルから除外した。その後、それぞれに1,2,3,4,5の値を割り振り、それぞれ6からその数値を引いたものをサンプル値とした。(例:「あてはまる」に回答した者のサンプル値は5である。)

今回のサンプルにおいては、4(「少しあてはまる」)、5(「あてはまる」)に該当するサンプルが7割強を占めていた。

・仕送り

Q22「今年4月の仕送り額はいくらですか。ただし家賃が含まれている場合は、差し引いて考えてください。」という質問に対し、「なし」「1万円未満」「1万円以上3万円未満」「3万円以上5万円未満」「5万円以上7万円未満」「7万円以上9万円未満」「9万円以上」の7カテゴリで調査した。また、それぞれのカテゴリの中央値をそのカテゴリのサンプル値として扱う数値変数(それぞれ「0」「0.5」「2」「4」「6」「8」「10」)も作成した。その平均、標準偏差は表に掲載している通りである。また、「無回答」はサンプルから除外した。

今回のサンプルにおいては、約3割も仕送りが無い学生が含まれていた。また仕送りのある学生については、1万円以上5万円未満の範囲に集中しているようであった。

表 3.14 アルバイト自発性

	度数	%
5	68	41.2
4	50	30.3
3	8	4.8
2	24	14.5
1	15	9.1
合計	165	100
平均: 3.80 標準偏差: 1.35		

表 3.15 仕送り額

	度数	%
なし	73	31.3
1万円未満	12	5.2
1万円以上3万円未満	49	21.0
3万円以上5万円未満	46	19.7
5万円以上7万円未満	38	16.3
7万円以上9万円未満	12	5.2
9万円以上	3	1.3
合計	233	100
平均: 2.76 標準偏差: 2.63		

・生活費以外の出費

Q25「今年5月における生活費以外の出費(交際費、サークル関連費、趣味にかかる費用など)はいくらでしたか。」という質問に対し、「なし」「5千円未満」「5千円以上1万円未満」「1万円以上2万円未満」「2万円以上3万円未満」「3万円以上」の6カテゴリで調査した。また、それぞれのカテゴリの中央値をそのカテゴリのサンプル値と

して扱う数値変数(それぞれ「0」「0.25」「0.75」「1.5」「2.5」「3.5」)も作成した。その平均値、標準偏差は表に掲載している通りである。なお、「無回答」はサンプルから除外した。

今回のサンプルにおいては、半数強が5千円以上2万円未満の範囲に生活費以外の出費が位置していた。

・居住形態

Q60「あなたの現在の居住形態を教えてください。」という質問に対し、「実家」「実家以外のアパートやマンションなど（一人暮らし）」「実家以外のアパートやマンションなど（複数人で生活）」「寮（ユニバーシティハウスを含む）」「その他」の5カテゴリで調査した。無回答は欠損値とし、「その他」の自由記述回答は、内容から「実家」に再カテゴリした。一人暮らしの学生が6割以上を占める結果となった。

表 3.16 生活費以外の出費

	度数	%
なし	23	9.9
5千円未満	42	18.0
5千円未満1万円以上	64	27.5
1万円以上2万円未満	62	26.6
2万円以上3万円未満	23	9.9
3万円以上	19	8.2
合計	233	100

平均：1.18 標準偏差：0.99

表 3.17 居住形態

	度数	%
実家	51	22.0
一人暮らし	152	65.5
共同生活	12	5.2
寮	17	7.3
合計	232	100.0

4.アルバイトをしている学生の傾向

仮説の検証に入る前に、そもそも「東北大学においては、どのような学生がアルバイトをしている傾向にあるのか」という問いについて考えていきたい。これについて考えるため、アルバイトの有無の変数を従属変数とした二項ロジスティック回帰分析を行なった。その結果、有意であったものの結果について以下に示す。有意な結果を得られたのは、独立変数を性別、生活費以外の出費額にした場合であった。

表 4.1 アルバイト有無に関する表

	モデル1		モデル2		モデル3	
	係数	標準誤差	係数	標準誤差	係数	標準誤差
切片	0.662***	0.176	0.266	0.225	-0.466	0.404
女性ダミー	0.568.	0.315			0.519	0.323
生活費以外			0.569**	0.177	0.363**	0.116
Nagelkerke	0.015		0.073		0.082	
N	228		231		225	

." p<0.1 "*" p<0.05 "***" p<0.01 "****" p<0.001

以上の結果から考察していく。性別に関しては、男性に比べ女性の方が、生活費以外の出費が増えるほどアルバイトをする傾向にあることが示されている。ただし、性別に関しては他の変数で統制したところ有意性が消えてしまった。ここから解釈すると、生活費以外の出費、すなわち趣味への投資のような出費が多い学生は、その趣味から得られる満足度を維持するために投資額の水準を保とうとし、その結果アルバイトをする傾向にある、と考えられる。

5. 分析の結果

5.1 仮説 1

仮説 1「アルバイト収入額のばらつきが大きいほど、生活満足度は低くなる」を検証するため、従属変数を生活満足度と学業、趣味、人間関係、将来設計の満足度の二つに設定し、それぞれについてアルバイト収入額のばらつきの大きさの変数を従属変数とし分析した。

まず、ばらつきの合計回数を独立変数、生活満足度を従属変数とした順序ロジスティック回帰分析(モデル 1)を行った。加えて、アルバイト収入額の平均や仕送り額が高く経済的に余裕のある状態ならば収入が不安定であっても生活満足度に影響を及ぼさない可能性や、経済状況に関係すると考えられる居住形態が満足度に影響を与える可能性を考慮し、統制変数として「アルバイト収入額の平均」、「仕送り額」、「居住形態」の変数を加えたモデル(モデル 2)を作成した。分析結果は次の表の通りである。

表 5.1.1 生活満足度に関する順序ロジスティック回帰分析

	モデル1		モデル2	
	係数	標準誤差	係数	標準誤差
閾値1	-2.897***	0.408	-2.502***	0.545
閾値2	-1.132***	0.268	-0.788 .	0.45
閾値3	-0.467***	0.255	-0.104	0.445
閾値4	1.523***	0.291	1.987***	0.486
ばらつきの合計回数	-0.019	0.082	-0.025	0.087
アルバイト収入額の平均			0.006	0.093
仕送り額			0.027	0.073
居住形態（実家暮らし） ref.				
居住形態（一人暮らし）			0.290	0.427
居住形態（共同生活）			1.920*	0.795
居住形態（寮）			0.581	0.669
Nagellkerke R2	0.0004		0.053	
N	139		139	

."p<0.1 "*"p<0.05 ***"p<0.01 ****"p<0.001

二つのモデルではともに、ばらつきの合計回数については有意な結果を得ることはできなかった。一方で、統制変数として加えた居住形態については、共同生活をしている人は実家暮らしの人に比べて5%水準で有意に生活満足度が高い結果となった。

次に、ばらつきの合計回数を独立変数、学業、趣味、人間関係、将来設計の満足度を従属変数とした順序ロジスティック回帰分析を行った。結果は、学業に関する満足度にのみ有意な結果が得られた。詳細について以下で記述する。

ばらつきの合計回数を独立変数、学業に対する満足度を従属変数とした順序ロジスティック回帰分析(モデル1)を行った。また、統制変数として「アルバイト収入額の平均」、「仕送り額」、「居住形態」の変数を加えたモデル(モデル2)を作成した。分析結果は次の表の通りである。

表 5.1.2 学業の満足度に関する順序ロジスティック回帰分析

	モデル1		モデル2	
	係数	標準誤差	係数	標準誤差
閾値1	-3.714***	0.506	-3.595***	0.634
閾値2	-1.877***	0.300	-1.726***	0.483
閾値3	-0.943***	0.264	-0.772**	0.458
閾値4	1.407***	0.288	1.695***	0.485
ばらつきの合計回数	-0.167*	0.085	-0.202*	0.092
アルバイト収入額の平均			0.086	0.094
仕送り額			0.114	0.077
居住形態(実家暮らし) ref.				
居住形態(一人暮らし)			-0.550	0.453
居住形態(共同生活)			1.580 .	0.832
居住形態(寮)			0.139	0.716
Nagellkerke R2	0.029		0.095	
N	141		141	

."p<0.1 "*"p<0.05 "***p<0.01 "****"p<0.001

ばらつきの合計回数が大きい人ほど、学業への満足度が 5%水準で有意に低いという結果が得られた。統制変数を加えた場合にも同様に、ばらつきの合計回数が大きい人ほど学業満足度が 5%水準で有意に低い。また、居住形態については、共同生活をしている人は実家暮らしの人に比べて 10%水準で有意に生活満足度が高い結果となった。

5.2 仮説 2

「アルバイトに熱心な学生ほど、生活満足度は高くなる」という仮説を検証するため、「生活満足度」を従属変数とした順序ロジスティック回帰分析、「満足度合計」を従属変数とした線形回帰分析、「学業、趣味、人間関係、将来設計個々の満足度」を従属変数とした順序ロジスティック回帰分析を行なった。その結果のうち有意であったものを中心に以下に示す。

・「生活満足度」に関する順序ロジスティック回帰分析

統制変数として想定していた変数のうち、「生活満足度」に関して有意な関係を持っていたものは、「学部生」「生活費以外」であった。

独立変数を「アルバイト動機」(モデル 1)、「アルバイト動機+学部生」(モデル 2)、「アルバイト動機+生活費以外」(モデル 3)、「アルバイト動機+学部生+生活費以外」(モデル 4)にした際に有意な結果が得られた。

表 5.2.1 生活満足度についてのアルバイト動機による順序ロジスティック回帰分析

	モデル1		モデル2		モデル3		モデル4	
	係数	標準誤差	係数	標準誤差	係数	標準誤差	係数	標準誤差
アルバイト動機	0.612.	0.362	0.569	0.367	0.439	0.373	0.400	0.378
学部生			0.421.	0.239			0.431 .	0.238
生活費以外					0.282.	0.149	0.272 .	0.150
閾値1	-2.357***	0.431	-1.326.	0.729	-2.147***	0.445	-1.096	0.738
閾値2	-0.650.	0.332	0.321	0.681	-0.416	0.354	0.571	0.693
閾値3	0.065	0.328	1.061	0.682	0.306	0.352	1.317 .	0.695
閾値4	2.187***	0.374	3.212***	0.729	2.431***	0.402	3.469 ***	0.745
Nagelkerke R2	0.019		0.037		0.043		0.058	
N	159		156		158		152	

". " p<0.1 "****" p<0.001

以上の結果から、「アルバイト動機」の影響が 10%水準で認められた。しかし、「学部生」「生活費以外」を変数として投入した場合、「アルバイト動機」による有意な影響が認められなかった。

また、独立変数を「アルバイト自発性」(モデル 1)、「アルバイト自発性+学部生」(モデル 2)、「アルバイト自発性+生活費以外」(モデル 3)、「アルバイト自発性+学部生+生活費以外」(モデル 4)にした際にも有意な結果が得られた。

表 5.2.2 生活満足度についてのアルバイト自発性による順序ロジスティック回帰分析

	モデル1		モデル2		モデル3		モデル4	
	係数	標準誤差	係数	標準誤差	係数	標準誤差	係数	標準誤差
アルバイト自発性	0.186.	0.112	0.187	0.115	0.170	0.114	0.174	0.117
学部生			0.455.	0.238			0.468*	0.237
生活費以外					0.316*	0.145	0.304*	0.146
閾値1	-2.127***	0.535	-0.977	0.816	-1.808**	0.558	-0.622	0.836
閾値2	-0.387	0.463	0.706	0.776	-0.037	0.495	1.091	0.803
閾値3	0.316	0.461	1.433.	0.778	0.677	0.496	1.828*	0.806
閾値4	2.428***	0.501	3.581***	0.826	2.801***	0.542	3.984***	0.859
Nagelkerke R2	0.018		0.040		0.049		0.068	
N	160		157		159		156	

". " p<0.1 "**" p<0.05 "***" p<0.01 "****" p<0.001

以上の結果から、「アルバイト自発性」の影響が 10%水準で認められた。しかし、「アルバイト動機」の結果と同じく他に変数を投入した場合には有意な影響が認められなかった。

・「満足度合計」に関する線形回帰分析

統制変数として想定していた変数のうち、「満足度合計」に関して有意な関係に近い関係を持っていたのは「学部生」「仕送り額」であった。

独立変数を「アルバイト動機」にした場合には有意な結果が得られたが、「アルバイト自発性」については有意な結果が得られなかった。これは統制変数を投入しても変わらなかった。

表 5.2.3 満足度合計についてのアルバイト動機・アルバイト自発性による線形回帰分析

	モデル1		モデル2		モデル3	
	係数	標準誤差	係数	標準誤差	係数	標準誤差
切片	9.813***	0.671	10.360***	0.939	8.962***	1.043
アルバイト動機	2.203**	0.751			2.099**	0.757
アルバイト自発性			0.309	0.231	0.243	0.228
調整済みR2	0.046		0.005		0.047	
N	158		159		158	

*** p<0.01 **** p<0.001

以上の結果から、「アルバイト動機」の影響が1%水準で認められた。また、統制変数を投入した場合の結果は以下の通りである。

表 5.2.4 満足度合計についてのアルバイト動機による線形回帰分析

	モデル1		モデル2		モデル3		モデル4	
	係数	標準誤差	係数	標準誤差	係数	標準誤差	係数	標準誤差
切片	9.813***	0.671	9.483***	0.697	7.409***	1.393	7.113***	1.404
アルバイト動機	2.203**	0.751	1.976**	0.756	2.081**	0.756	1.850*	0.760
仕送り額			0.190	0.119			0.198	0.119
学部生					0.991*	0.484	0.970*	0.481
調整済みR2	0.046		0.054		0.061		0.069	
N	158		157		155		154	

." p<0.1 "*" p<0.05 **** p<0.001

以上の結果から、「アルバイト動機」の影響が少なくとも5%水準で認められた。統制変数を投入した場合は、「アルバイト動機」の有意性は薄れる傾向があった。

・学業、趣味、人間関係、将来設計の満足度に関する順序ロジスティック回帰分析

いずれの満足度に対しても「アルバイト動機」は正の有意な関係を持っており、「アルバイト自発性」も「人間関係満足度」に対しては正の有意な関係が認められた。しかし、統制変数を投入したところ有意性が薄れるまたは消えてしまうものもあり、頑健な結果とは言えない結果となった。

「学業満足度」「趣味満足度」に対して有意な関係を持っていた統制変数は見られなかったが、「人間関係満足度」には「学部生」「仕送り」、「将来設計満足度」には「仕送り」がそれぞれ有意な関係を持っていた。

表 5.2.5 学業満足度についてのアルバイト動機・アルバイト自発性による順序ロジスティック回帰分析

	モデル1		モデル2		モデル3	
	係数	標準誤差	係数	標準誤差	係数	標準誤差
アルバイト動機	0.690.	0.358			0.674.	0.360
アルバイト自発性			0.079	0.108	0.045	0.109
閾値1	-2.743***	0.488	-2.961***	0.579	-2.586***	0.616
閾値2	-0.793*	0.330	-1.030*	0.448	-0.636	0.500
閾値3	0.127	0.323	-0.129	0.438	0.284	0.497
閾値4	2.420***	0.381	2.103***	0.477	2.580***	0.542
Nagelkerke R2	0.024		0.003		0.025	
N	161		162		161	

." p<0.1 "*" p<0.05 "***" p<0.001

表 5.2.6 趣味満足度についてのアルバイト動機・アルバイト自発性による順序ロジスティック回帰分析

	モデル1		モデル2		モデル3	
	係数	標準誤差	係数	標準誤差	係数	標準誤差
アルバイト動機	1.034**	0.371			1.037**	0.372
アルバイト自発性			0.001	0.108	-0.010	0.109
閾値1	-2.212***	0.441	-2.829***	0.539	-2.249***	0.594
閾値2	-0.520	0.340	-1.284**	0.455	-0.557	0.522
閾値3	0.280	0.337	-0.526	0.444	0.243	0.519
閾値4	2.392***	0.381	1.528***	0.463	2.355***	0.550
Nagelkerke R2	0.051		0.000		0.051	
N	161		162		161	

" p<0.01 *" p<0.001

表 5.2.7 人間関係満足度についてのアルバイト動機・アルバイト自発性による順序ロジスティック回帰分析

	モデル1		モデル2		モデル3		モデル4	
	係数	標準誤差	係数	標準誤差	係数	標準誤差	係数	標準誤差
アルバイト動機	0.729*	0.365			0.665.	0.369	0.604	0.382
アルバイト自発性			0.206.	0.111	0.190.	0.112	0.188	0.116
学部生							0.706**	0.244
仕送り							0.139*	0.061
閾値1	-2.284***	0.429	-2.074***	0.524	-1.638**	0.570	0.331	0.847
閾値2	-0.472	0.329	-0.273	0.447	0.186	0.509	2.203**	0.820
閾値3	0.118	0.328	0.336	0.446	0.783	0.512	2.850***	0.832
閾値4	2.679***	0.400	2.886***	0.510	3.376***	0.581	5.623***	0.935
Nagelkerke R2	0.026		0.023		0.045		0.126	
N	160		161		160		156	

." p<0.1 "*" p<0.05 "***" p<0.01 ****" p<0.001

表 5.2.8 将来設計満足度についてのアルバイト動機・アルバイト自発性による順序ロジスティック回帰分析

	モデル1		モデル2		モデル3		モデル4	
	係数	標準誤差	係数	標準誤差	係数	標準誤差	係数	標準誤差
アルバイト動機	0.626.	0.365			0.631.	0.366	0.527	0.372
アルバイト自発性			-0.072	0.106	-0.070	0.106	-0.099	0.106
仕送り							0.172**	0.057
閾値1	-1.307***	0.358	-2.078***	0.471	-1.573**	0.541	-1.392*	0.546
閾値2	0.321	0.337	-0.449	0.437	0.057	0.523	0.290	0.531
閾値3	1.728***	0.360	0.947*	0.439	1.469**	0.531	1.794**	0.546
閾値4	3.615***	0.496	2.829***	0.551	3.357***	0.630	3.705***	0.648
Nagelkerke R2	0.019		0.003		0.022		0.080	
N	161		162		161		160	

." p<0.1 "*" p<0.05 "***" p<0.01 "****" p<0.001

以上の結果から、「アルバイト動機」が個々の満足度に対して正の影響を与えていることが読み取れる。しかし、いずれの分析においても統制変数を投入すると有意性が薄れた。

6. 結論と考察

仮説 1 について、アルバイト収入額のばらつきの合計回数は生活満足度に有意な影響を与えないことがわかった。よって、「アルバイト収入額のばらつきが大きいほど、生活満足度は低くなる」という仮説は支持されなかったと言える。

その一方で、学業への満足度に対しては、有意に負の影響を与えることがわかった。また、アルバイト収入額の平均や仕送り額といった経済状況の基盤的な部分は学業満足度に対して有意な影響がなかったことから、収入の多寡ではなく、収入額が不安定であることそれ自体が学業満足度に負の影響を与えていると言える。これは、アルバイト収入額またはアルバイト時間が月ごとに不安定であることによって、学業に対する金銭的・時間的投資も不安定になることで、即時的な学びの機会を逃す可能性があることや、計画的な学びが難しくなる可能性があることによると考えられる。また、「居住形態」の変数のうち、共同生活を送っている人は実家暮らしの人に比べて生活満足度、学業への満足度の両者に正の影響がみられるが、これは立場の近い友人などとの共同生活をする中で、学業を含め生活上の様々なことについて相談できることなどによると考えられる。しかし、共同生活かつアルバイトをしていたのは 8 人のみであり、サンプルに含まれるケース数が少ないため、結果の信頼性に疑問がある。

これらのことから、アルバイト収入額が不安定であることは生活満足度全体には影響せず、生活の一側面である学業に関する満足度にのみ影響すると言える。しかし、学業は学生の本分であり、大学生活において大きな要素であるので、重要な問題であると考えられる。よって、より充実した大学生活を送るためにはアルバイト収入額を安定させることが良いと言える。現在は新型コロナウイルス感染拡大の影響でアルバイト状況が安定しない

状況を余儀なくされているが、学生が安定的な収入を得られるように雇用者側、ひいては国の支援が求められる。また、ワクチン接種などが進み感染拡大以前のような生活を送れるようになった際には、当人の無理のない範囲での、安定的なアルバイトを推奨する。

本分析では、先行研究では注目されていなかった「アルバイト収入額の不安定性」という点に注目し、大学生活における満足度に及ぼす影響を明らかにすることができた。大学生がより満足度の高い生活を送るために望ましいアルバイト就業形態について示唆できた点で意義があったと言える。

しかし、今回の調査の問題点として、ばらつきの回数をたずねる質問項目が複雑になってしまったことが挙げられる。現実的にあり得ない回答が複数存在したことから質問項目が不適切であった可能性があることや、そもそも時間的に幅のある事象についての調査はパネル調査が適切であることを踏まえ、よりわかりやすく、正確に測れる方法を考える必要がある。

仮説2について、「アルバイト動機」が種々の満足度に正の影響を与えていることから、ある程度「アルバイトに熱心な学生ほど、生活満足度が高くなる」という仮説は正しいように思われる。これは、アルバイトを自分の欲求解消のための資金調達として始め、その結果趣味をより高い水準で楽しめたり新たな人間関係が構築され生活満足度が増したりしたことや、自分の将来のためになる経験獲得を目的としてアルバイトを始め、その結果、その目的を達成できたり社会の一員としての参画意識を持つようになり生活満足度が増したことが考えられる。しかし一方で「アルバイト自発性」については、有意な関係は見出せたものの、生活満足度に対し決定的な影響を与えているのではないように考えられる。この点に関しては、アルバイトに要する自発性という客観的判断が難しい概念を捉えきれなかった点や、先行研究である関口(2010)で用いられていた“主体的ジョブデザイン行動”の一部である”自発性”を回答者から聞き出す形をとったため、他の”主体的ジョブデザイン行動”の要素を無視してしまっていた点などが問題として考えられる。

また、各分析において統制変数を投入したところ有意性が減少したことについても考える必要がある。これは、分析のモデルによってサンプル数が異なることや、因果関係が単純でなく、相互に影響を与え合っていることなどが考えられる。

引用文献

独立行政法人日本学生支援機構, 2020, 『平成30年度 学生生活調査結果』.

飯田昭人・水野君平・入江智也・西野貴之・川崎直樹・斉藤美香, 2021, 「新型コロナウイルス感染拡大が大学生に及ぼす影響(第一報)～北海道内の大学への調査から～」『北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要』12:147-158.

一般社団法人日本私立大学連盟, 2018, 『私立大学学生生活白書2018』.

- 岩田考, 2015, 「大学生の生活満足度の規定要因」『桃山学院大学総合研究所紀要』40(2):67-85.
- 木戸口正宏, 2013, 「学生とともに「働くこと」を学ぶ(教養科目「現代社会と教育」における試み) その1 -大学生のアルバイト経験に関する調査と大学教育・学生支援の課題」『釧路論集: 北海道教育大学釧路校研究紀要』45:75-84.
- 内閣府, 2012, 『国民生活選好度調査』.
- 関口倫紀, 2010, 「大学生のアルバイト経験とキャリア形成」『日本労働研究雑誌』602:67-85.
- 田村隆宏・木村信貴・三井理愛・松瀬誉幸, 2011, 「大学生の心理的 well-being に及ぼすアルバイト活動の影響」『鳴門教育大学研究紀要』26:43-52.
- 山本幸子・江口恵里・楊玉華・甲斐美智代・佐藤正昭・白蓋真弥・山崎学・吉村耕一・増田公香・人見英里, 2018, 「大学生のアルバイトが健康、学習、意識変容に及ぼす影響」『山口県立大学学術情報 第11号 [大学院論集 通巻第19号]』127-134.
- 山根真紀・大宮ともこ・石井智也・住田健, 2021, 「新型コロナウイルス感染拡大感染症(COVID-19)感染拡大における学生の健康および生活に関する調査報告書」『日本福祉大学スポーツ化学論集』4:65-73.
- 渡辺裕子, 2015, 「学生におけるアルバイトの実態と位置付け—駿河台大学学生生活基本調査から」『駿河台大学論叢』50:169-187.

大学生の職業観と居住地域選択に関する意識調査

——人口偏在問題改善と将来設計への影響、 就業意欲に対する手がかりを求めて——

飯田大海・庄子敬太・田西秀仁・美澤龍太

1. 問題設定

近年、学生の就職活動の早期化が進行している。2018年10月、経団連は「採用選考に関する指針（採用選考指針）」、いわゆる『就活ルール』の廃止を発表した。就活ルールが廃止されたことで大手企業が早期に内定を出す可能性が浮かび上がり、学生は早期からの就職活動への取り組みを余儀なくされている。

また、新型コロナウイルス感染拡大（以後”コロナ”と呼ぶ）の影響で他人との接触機会が大幅に減少し、就活情報の入手が困難となるほか企業による新卒採用人数の減少も予想される。したがって、就活にいち早く着手した人のアドバンテージが例年よりも大きくなり、就職活動の早期化を加速させている。

一方で、コロナの拡大に伴い、人々の働き方にも変化がみられるようになった。Zoom・Skype等の遠隔通信アプリケーションを用いたリモートワークが普及することで、居住地に左右されることなく行える仕事が増加し、勤労における「空間」という制約が緩和されつつある。そのほか、『新型コロナウイルスの影響で、東京の一極集中に変化の兆しが出ている。7月²の人口移動をみると、東京都から転出する人が転入する人を上回り2522人の「転出増加」となった。5月¹の1069人に続くもので、いまの方式で集計を始めた2013年7月以降では最大の数字だ。』（朝日新聞 2020/9/9 朝刊 26面「東京一極集中 変わる？」より）や、「人や企業を吸い込みブラックホールにも例えられる東京。その状況がコロナ禍で変わるかもしれない。東京都の人口は5月、7月と転出超過となった。在宅勤務が広がりオフィス縮小の動きがある。地方移住に関心を持つ若者らもめだつ。』（朝日新聞 2020/9/9 朝刊 6面「在宅勤務 脱都心の契機」より）のように過密化、東京一極集中の現状にも変化の兆しが見られる。

そこで私たちの調査では、就職を控え、かつ全国各地の出身者が含まれる東北大生において、就業意識や就業希望に関して分析することに意義があると考えられる「就職意識と居住希望地との関係」「居住希望地と賃金との関係」「家庭の経済状況が、学生の就職意識に与える影響」に焦点を当てた。人口偏在問題（過密過疎、或いはいわゆる「東京一極集中」）の改善策の模索、貧富の格差による将来の人生設計への影響の有無の検討、就業意欲の減退

² それぞれ「2020年7月」「2020年5月」を表す。（注釈：筆者らによる）

(or 喪失)に歯止めをかけるため成し得る対策は何か、という観点で調査・分析を行った。

2. 先行研究の検討

卒業した大学生の新規就職に伴う移動を調べた和泉・守屋(1979)では、「出身地・将来の居住希望地域には関連がある」ことが示されている。また、「就職先決定の際、その所在地域はあまり重要視されない」ことや「大卒者の地方定着を図るには、良質な雇用機会の創出が非常に重要であると考えられる」ことも重ねて示されている。しかし、これは今日から 40 年以上も前の研究であり、年月の経過に伴う世相の変遷を鑑みても、再検討の余地は存在するだろう。(例えば、この和泉・守屋の研究では、大都市を志向する要因として「都市ガス、水洗トイレが普及している」という点が挙げられているが、生活水準が向上した現代では、地方・都市部の明確な相違点とならない。また、昨今ではコロナの流行により、リモートワークの普及が加速化した。故に必ずしも地方で雇用機会を創出せずとも、リモートワークの活用により人口偏在問題の改善に一石を投じ得る可能性がある。この現状を考慮すれば、大学生の就職に際する居住地希望を改めて調査することにも、意義が見出される。)

また、生活圏の人口移動を金銭的・非金銭的要因に分けて実証分析を行った盆小原・佐藤(2009)は、「就職に関連する要因が居住地選択に強く影響している」ことを指摘する。このことから、就職と居住地選択には何らかの関係性が存在することが推測される。私たちの班ではそこに着眼し、人口偏在問題改善への手立ての模索を進めたいと考えている。

さらに、株式会社マイナビは毎年、就職を控える学生に対して就職意識調査を実施している。全国の 2022 年卒生³を対象とした調査では、企業選択・就職等に際して優先的したい志向を問うたところ、

「楽しく生きたい」 : 34.8%

「仕事と生活の両立」 : 23%

「お金を稼ぎたい」 : 4%

という結果が現れていた。過去 10 年間の推移に変動は存在するものの、その変動幅は±5%程度に留まっており就職観の優先順位や年代における普遍性が確認できる。この調査から私たちは、東北大学など（一般に）就職に有利と見做されがちな上位大学では就職に際し「お金を稼ぎたい」という志向が学生に強く働くのではないか、という発想を得た。そこで、大学生の多くが経済的には「自立」しておらず稼得が十分でないことや、親族の収入を回答してもらうことの信頼度・倫理上の懸念から、「奨学金の受給」「授業料の免除」といった経済支援利用に着目し、それらを学生（及びその家族）の現在の金銭的社会地位と見做すことで、関係性の存在を確かめられると予測した。

以上のことから、3つの仮説を立てた。

³ 各人の所属大学は明らかにされていない。

3. 仮説

3.1 出身地が大都市⁴か否かによって、将来の居住地選択において都市を居住するという考えに影響を与える。

3.2 将来の居住地に関して何らかの希望を抱いている人は、興味のある職種が存在する。

3.3 都市への居住を考える人は地方への居住を考える人より就職意識で「お金を稼ぎたい」と考える。このお金を稼ぎたい志向に、経済的に自立していない大学生には収入がないこと、また親の収入を問うことへの信頼性・倫理性の観点から奨学金の有無・授業料一部免除といった経済支援に着目し、これを現在の金銭的社会地位として関係性があるとした。

4. 変数の設定・及び基本統計量

本分析では、調査により得られたデータを用いて作成した新変数を用いた。以下、それらの変数の概要・作成方法・項目を記す。

表 4.1 本分析にて用いた変数・及びそれらの作成方法

データ元の質問	作成した新変数	新変数における項目	元データにおいて、該当するカテゴリー
質問27	学費免除利用の有無	免除制度を利用	「利用している」を選択
		免除制度を非利用	「利用していない」を選択
質問28	奨学金利用の有無	奨学金を利用	「利用している」を選択
		奨学金を非利用	「利用していない」を選択
質問47	出身地	都市部	「札幌市」～「熊本市」の21市のいずれかを選択
		地方	「その他の市町村」を選択
質問48	卒業後の希望居住地	都市部	「北海道」「宮城県」など、47都道府県のうち、質問47で挙げた主要な21都市（札幌市～熊本市）を内包する都道府県を選択
		地方	「青森県」「岩手県」など、47都道府県のうち、質問47で挙げた主要な21都市（札幌市～熊本市）を内包しない県を選択
質問48	居住地希望の有無	居住地の希望あり	47都道府県のいずれか、または「海外」を選択
		未定	「未定」を選択
質問49	興味のある職業の有無	興味のある職業がある	「はい」（＝興味のある職業がある）を選択
		興味のある職業が無い	「いいえ」（＝興味のある職業がない）を選択
質問50・51	就職観	お金をより稼ぎたい	質問50・51のいずれかにて、「たくさんお金を稼ぐこと」を選択
		その他	質問50・51の両方にて、「たくさんお金を稼ぐこと」以外を選択
質問53	リモートワーク等の下で希望する居住地（都市部・地方）	都市部	「都市部」を選択
		地方	「地方」を選択

⁴ ここで都市部としたものは総務省が発行する令和 2 年版地方財政白書の用語の説明で「地方政令都市」とされているもののことを示している。

表 4.2 本分析にて用いた各変数の記述統計量

新変数	有効度数 (人)	項目	内訳 (人)	割合 (%)
学費免除利用の有無	218	免除制度を利用	13	5.96
		免除制度を非利用	205	94.04
奨学金利用の有無	233	奨学金を利用	72	30.90
		奨学金を非利用	161	69.10
出身地	228	都市部	81	35.53
		地方	147	64.47
卒業後の希望居住地	122	都市部	93	76.23
		地方	29	23.77
居住地希望の有無	234	居住地の希望あり	131	55.98
		未定	103	44.02
興味のある職業の有無	232	興味のある職業がある	139	59.91
		興味のある職業が無い	93	40.09
就職観	236	お金をより稼ぎたい	58	24.58
		その他	178	75.42
リモートワーク等の下で希望する居住地（都市部・地方）	200	都市部	101	50.50
		地方	99	49.50

※変数ごとに有効度数が異なるのは、各々において欠損値の数が異なることに由来する。

5. 分析結果

5.1 仮説 1 の分析結果

仮説 1 では、出身地と居住希望地の間に関連はあるのか、また出身地とリモートワーク・賃金が保障された場合にどのような変化が起こりうるのかを考察する。そのため、分析には 2×2 クロス表とカイ二乗検定を用いた。

まず、居住希望地と出身地に関して 2×2 クロス表を作成し、カイ二乗検定を実施した。その結果を表 5.1.1 に示す。

表 5.1.1 出身地×居住希望地

	地方	都市部	計
地方出身	37.5%	62.5%	72
都市部出身	4.3%	95.7%	47
計	29	90	119
$\chi^2 = 17.052, p < 0.01, \text{Cramer's } V = 0.379$			

出身地と居住希望地の関連については、1%水準で有意に認められた。

次に『仕事のリモートワークになり、かつ十分な収入を確保できる』という状況に置か

れたとしたら、あなたは都市部と地方のどちらへの居住を希望しますか。」ということに関して、出身地との関連を調べたクロス表を作成し、カイ二乗検定を実施した。その結果を表 5.1.2 に示す。

表 5.1.2 出身地×リモートワークでの希望

	地方	都市部	計
地方出身	60.6%	39.4%	127
都市部出身	28.4%	71.6%	67
計	96	98	194

$\chi^2 = 18.274, p < 0.01, \text{Cramer's } V = 0.307$

出身地と、リモートワーク・賃金が保障された場合の居住希望地の関連についても、1%水準で有意に認められた。

ここで補足すると、表 5.1.1 の方が表 5.1.2 よりもケース数が 75 ほど少なくなっている。これは調査票において「現段階で、あなたが卒業後の就職先として希望する地域を、以下からお選びください。未定の方は『未定』を、すでに就職先が決まっている方は『すでに決まっている』を選んでください」という問い方をしているため、「未定」や「すでに決まっている」といった項目へ該当する回答者が省かれてしまったためだと考えられる。

まず表 5.1.1 に着目すると、クロス表の結果が 1%水準で有意に認められているので、出身地と居住希望地について関連があるということが言える。つまり、地方出身者の方が都市部出身者よりも居住希望地として地方を志望しており、都市部出身者の方が地方出身者よりも居住希望地として都市部を志望していると言えるだろう。

しかしその一方で、出身地がどちらの場合にせよ都市部への居住希望が圧倒的に多く、特に都市部出身者の地方への居住希望は 5%以下という状況になっている。

次に表 5.1.2 に着目する。この表では出身地と仕事がリモートワークになり、かつ十分な賃金が保障されている場合の居住希望地の関連について示したものである。このクロス表の結果においても 1%水準で有意に認められているので、出身地と仕事がリモートワークになり、かつ十分な賃金が保障されている場合の居住希望地の関連があると言える。つまり、地方出身者と都市部出身者のどちらの場合においても地方への居住希望者が増えたと言える。

5.2 仮説 2 の分析結果

2 つ目の仮説では、東北大生について、「居住地希望の有無」と「興味のある職業の有無」との間に関連がみられるか否かを検討する。また、学年を統制変数とすることで、前述した

2 つの変数間の関連が学年の影響を受けるか否かについても確認する。

この分析にて用いる変数は「居住地希望の有無」と「興味のある職業の有無」の2つである（各変数の詳細は、前掲の表 4.1 及び表 4.2 を参照されたい）。いずれも離散的な2値変数であることを考慮し、統計的検定の手法としてはカイ二乗検定を採用する。

データを「全学年」「4年生のみ」「3年生のみ」「2年生のみ」の4つの場合に分けて、クロス表・図を作成したり、カイ二乗検定を行ったりした。なお、1年生は有効回答者が1名のみでサンプルサイズが著しく不十分なため、分析対象から除外した。

次の表 5.2.1 は、2変数における回答者数の内訳を、回答者の学年ごとに2重クロス表で表したものである。各表の下部には、それぞれのカイ二乗検定結果の概要・クラマーのコンティンジェンシー係数も併せて示している。

表 5.2.1 居住地・職業への展望

	居住地希望の有無	興味のある職業の有無		N (人)
		興味のある職業がある	興味のある職業が無い	
全学年	居住地の希望あり	69.8%	30.2%	129
	未定	48.0%	52.0%	102
	合計	60.2%	39.8%	231
$\chi^2=11.221$, $p<0.001$, Cramer's $V=0.220$				
	居住地希望の有無	興味のある職業の有無		N (人)
		興味のある職業がある	興味のある職業が無い	
4年生	居住地の希望あり	80.0%	20.0%	10
	未定	42.9%	57.1%	7
	合計	64.7%	35.3%	17
$\chi^2=2.487$, $p=0.115$, Cramer's $V=0.383$				

	居住地希望の有無	興味のある職業の有無		N (人)
		興味のある職業がある	興味のある職業が無い	
3学年	居住地の希望あり	70.2%	29.8%	47
	未定	55.0%	45.0%	40
	合計	63.2%	36.8%	87

$\chi^2=2.151$, $p=0.143$, Cramer's $V=0.157$

	居住地希望の有無	興味のある職業の有無		N (人)
		興味のある職業がある	興味のある職業が無い	
2学年	居住地の希望あり	69.1%	30.9%	68
	未定	43.1%	56.9%	51
	合計	58.0%	42.0%	119

$\chi^2=8.074$, $p<0.01$, Cramer's $V=0.26$

また、以下の図 5.2.1 は、上で示した 4 つのクロス表(表 5.2.1)を図示したものである。

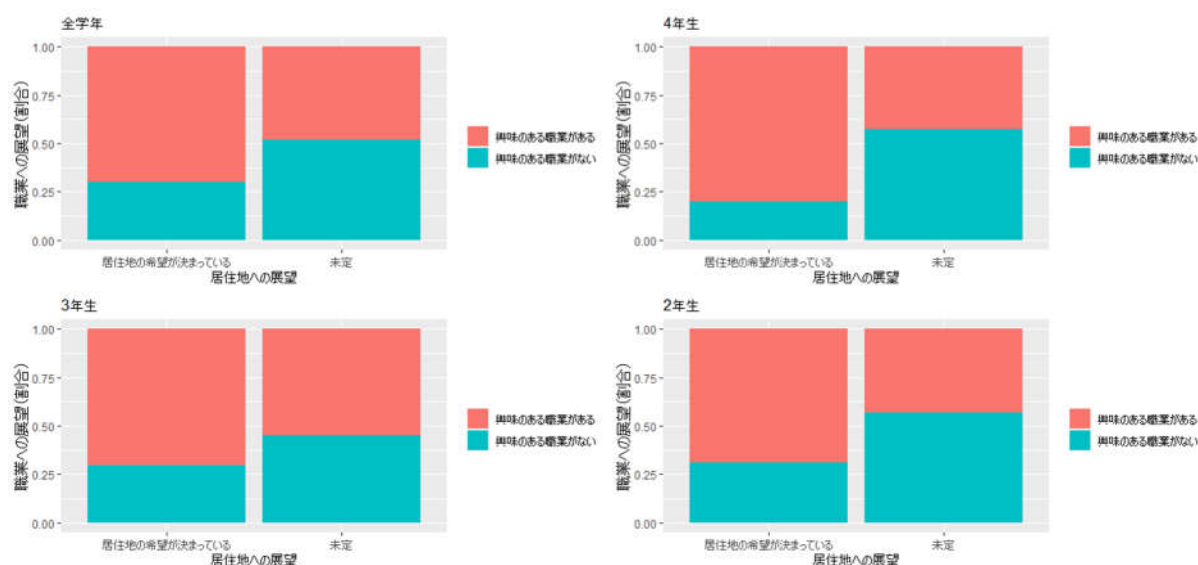


図 5.2.1 居住地・職業への展望

表 5.2.1・図 5.2.1 より、主となる分析結果として、以下の 2 点を読み取ることが出来る。

①割合に注目すると、いずれの学年においても、「居住地の希望がある人」の中では「興味のある職業が存在する人」の割合が大きくなった。逆に「未定(居住地の希望が無い人)」の中では「興味のある職業が存在しない人」の割合が他方を上回った。

②①より、「居住地の希望が存在する人ほど、興味のある職業も存在する」という傾向が

導出される。この傾向は、全学年・2年生のデータにおいて統計的有意性が確認されたものの、4年生・3年生においては有意性が確認されなかった。

5.3 仮説3の分析結果

3つ目の仮説として、将来居を構える場所として地方部より都市部を希望する人は、就職意識として「お金を稼ぎたい」と考える傾向にあり、この志向には就職を考えるにあたって奨学金の受領や学費免除など現在の金銭的社会地位が関係しているのではないかと考えた。

ここでは236人に「最も重視する項目」及び「二番目に重視する項目」を回答して頂き、これら2項目を統合したものを「就職をする際に重視するもの」と見做して用いた。この操作は、多数の回答項目から一つの選択肢を絞ることの困難性や先頭回答への偏りを防ぐことを意図している。下図は全回答数の分布である。

表 5.3.1 「就職観」に関する項目の回答数と割合

	回答者数	%
個人の生活と仕事の両立	131	29
福利厚生	35	8
労働時間	27	6
就業規則	6	1
企業のブランド力	6	1
社会貢献	29	7
人のためになること	35	8
楽しく生きること	93	21
たくさんお金を稼ぎたい	58	13
プライドを持って仕事をする	28	6
	448	100

ここではその他の自由記述として、「自分のやりたいこと」や「転勤がないこと」といった志向も挙がった。これらの回答選択肢は、先行研究である株式会社マイナビの就職意識調査を基に作成しており、結果も類似性のあるものとなっていた。この回答をもとに「お金を稼ぎたい」かその他の回答かで二分し、有意性の確認のため「経済支援の有無・回答・居住希望」の回答結果から、三重クロス表のカイ二乗分析を用いた。ここでは居住に際して経済条件等現実社会における制約が考えられるため、暫定的に完全にリモートワークが可能な場合についても扱い、潜在的な居住希望についても考えている。

まず最初に、授業料補助を受けているか否かで移住希望に関係があることを見た。以下二つの表1,2が回答の3重クロス表とカイ二乗検定の結果である。

表 5.3.1 授業料補助有り×移住希望×金銭志向の 3 重クロス表

	お金をより稼ぎたい	その他	計
地方居住希望	0%	100%	2
都市居住希望	50%	50%	4
計	2	4	6
$\chi^2 = 1.5, df = 1, p\text{-value} = 0.2207$			

表 5.3.2 授業料補助無し×移住希望×金銭志向の 3 重クロス表

	お金をより稼ぎたい	その他	計
地方居住希望	17%	83%	24
都市居住希望	29.6%	70.1%	81
計	28	77	105
$\chi^2 = 1.5909, df = 1, p\text{-value} = 0.2072$			

以上の二つの表のとおり、授業料の補助を受けているかどうかが移住希望選択や就職に際しての「お金を稼ぎたい」と志向することに対して与える影響には、有意性は確認されなかった。

次に、奨学金を受給しているということが居住希望と「お金を稼ぎたい」という志向に影響を与えるかを考える。以下二つの表 3、4 が三重クロス表とカイ二乗検定の結果である。

表 5.3.3 奨学金有り×移住希望×金銭志向の 3 重クロス表

	お金をより稼ぎたい	その他	計
地方居住希望	25%	75%	12
都市居住希望	37.5%	62.5%	24
計	12	24	36
$\chi^2 = 0.5625, df = 1, p\text{-value} = 0.4533$			

表 5.3.4 奨学金無し × 移住希望 × 金銭志向の 3 重クロス表

	お金をより稼ぎたい	その他	計
地方居住希望	5.8%	94.2%	17
都市居住希望	28.1%	71.9%	64
計	19	62	81
$\chi^2 = 3.5041, df = 1, p\text{-value} = 0.06122$			

こちらも授業料の補助と同様に棄却域 $p < .05$ での有意性は確認されなかった。しかし奨学金の需給がない場合、小規模サンプル下での棄却域 $p < .1$ での有意性が確認された。従ってこれについては奨学金の需給がない場合には都市移住希望者が「お金をより稼ぎたい」と志向する、という結果になる。

以下同様の手順で居住希望をする際にリモートで仕事が行えて出社する必要がない場合の環境下であった場合にはどのような変化がみられるかについても分析した。

表 5.3.5 授業料補助有り × リモート環境下の移住希望 × 金銭志向の 3 重クロス表

	お金をより稼ぎたい	その他	計
地方居住希望	14.2%	85.8%	7
都市居住希望	20.0%	80.0%	5
計	2	10	12
$\chi^2 = 0.0686, df = 1, p\text{-value} = 0.7934$			

表 5.3.6 授業料補助無し×リモート環境下の移住希望×金銭志向の 3 重クロス表

	お金をより稼ぎたい	その他	計
地方居住希望	24.1%	75.9%	83
都市居住希望	27.0%	73.0%	74
計	40	117	157
$\chi^2 = 1.9044, df = 1, p\text{-value} = 0.1676$			

表 5.3.7 奨学金有り×リモート環境下の移住希望×金銭志向の 3 重クロス表

	お金をより稼ぎたい	その他	計
地方居住希望	29.0%	31.0%	31
都市居住希望	34.5%	65.5%	29
計	19	41	60
$\chi^2 = 0.26256, df = 1, p\text{-value} = 0.6084$			

表 5.3.8 奨学金無し×リモート環境下の移住希望×金銭志向の 3 重クロス表

	お金をより稼ぎたい	その他	計
地方居住希望	20.0%	80.0%	60
都市居住希望	38.6%	61.3%	61
計	29	92	121
$\chi^2 = 1.7983, df = 1, p\text{-value} = 0.1799$			

リモート環境下の場合においては全分析で有意性が確認されなかった。

以上より大学進学における経済補助から見た金銭的社会位置は居住希望と就職においての「お金を稼ぎたい」という志向には関係ないという結果が見られる。

ここでそもそも現在の金銭的社会位置について問わず居住希望と就職意識における金銭希望は関係性があるのかということが疑問となったため、この二項においてカイ二乗検定

を行った。

表 5.3.9 居住希望×金銭志向のクロス表

	お金をより稼ぎたい	その他	計
地方居住希望	14.3%	85.7%	28
都市居住希望	29.0%	71.0%	86
計	29	85	114
$\chi^2 = 2.7087, df = 1, p\text{-value} = 0.0998$			

結果としてサンプルサイズに促して $p < .05$ の領域での有意性は確認されなかった。つまり居住希望と就職において「お金を稼ぎたい」という意識は関係ないということがわかる。

6. 結論と考察

【仮説 1 の考察】

まず都市部出身者に着目すると、地方への居住希望する人の割合が表 5.1.2 では表 5.1.1 の 7 倍弱となっている。次に地方出身者だけに着目すると、表 5.1.2 では居住希望地として地方を希望する割合が都市部を希望する割合よりも大きくなっているのである。

このことから若者が都会に求めるものとして、娯楽や就業環境、利便性など様々なものが挙げられるが、「都市部と同程度の収入を保障すること」が大きな影響を及ぼしているということが考えられる。

また表 5.1.1 と表 5.1.2 をそれぞれ見てみると、どちらの場合においても地方出身者の方が、地方への居住を希望しており、都市部出身者の方が都市部への居住を希望していると言える。しかし表 5.1.2 に着目し、地方から都市部への居住を希望する人の割合と都市部から地方への居住を希望する人の割合の差を考えると、「都市部と同程度の収入を保障すること」は過密化問題を解決する有効な手立ての 1 つになるのではないかと考えられる。

さらにコロナ禍においても東京への人口の流出が起きており、仮説 1 の内容とは反するよう見受けられる。しかしここで大切なことは「完全な」リモートワークであるということである。

【仮説 2 の考察】

焦点を当てるべきなのは、「居住地の希望が存在する人ほど、興味のある職業も存在する」という傾向が、見かけ上は存在するものの、統計的有意性を常に確認できるわけではない、という事実だ。

まず、上記の傾向の妥当性について検討する。

居住地の希望が存在する、即ち「私は将来はこの地域に住みたい」という何らかの意志を抱く要因としては、単なるその地域への憧憬ほか、他の事情（仕事・家族など）から間接的に影響されている可能性もある。興味のある職業についても同様に、単にその業界（職種）へ興味を抱いているケースのほか、就業にまつわる他の事情（世襲、就業能力上の都合など）の影響を間接的に受けてしまうケースもあり得る。これらを考慮すると、今回見出された傾向は「（何らかの理由で）将来居住を希望する地域がある→その居住地域に応じた職業に興味を抱く」という両者の関係性を反映したものであり、実際にあり得るものだ。

次に、この傾向の信頼性について検討する。

図 5.2.1 より、上記の傾向は視覚的にも十分確認でき、傾向の存在自体は認められる可能性が高い。4 年生及び 3 年生の回答データにて統計的有意性が確認されなかったことが争点となるが、これらは、データの偏りの影響により不完全な検定結果となった可能性があり得る。本分析に用いたデータでは、「居住地の希望が決まっており、かつ興味のある職業も存在する」という回答者に度数が偏っており、一部の分析にて統計的有意性が見受けられないことは、こうしたサンプルの偏り・欠陥に由来していると推測される。

なお、表 5.2.1 でも示したように、各分析で導出されたクラマーのコンティンジェンシー係数はいずれも、2 変数間の連関の存在を裏付けるには不十分なほど小さくなっている。Bohnstedt and Knoke (1988, pp247-250) が指摘するように、クラマーのコンティンジェンシー係数は PRE 測度でない（故に、連関の測度として完全なものではないため、ここではカイ二乗検定結果による信頼性を重視して扱うこととする。

【仮説 3 の考察】

「お金を稼ぎたい」という志向が働きにくい要因として、そもそも大学進学について考えなければならないように感じる。今回の研究ではお金を稼ぎたいという仮説に基づき他の回答は参考までとして行ったが、実際のデータ収集では想定していたデータと異なった。大学進学には金がかかるという話があり、大学進学をしている学生はある程度の経済的に余裕のある層が多いのではないだろうか。良い大学へ進学することによって収入の高い職に就きたいという学生は少数なのか。こういった事を考えるにあたって背景として奨学金や学習支援では推し量ることが不十分であったことも考えられる。またこの地域に住みたいという展望がある大学生も多くなく、就職に対して受動的な社会状況も考えられる。昨今は新型コロナウイルスの影響により就職への不安視等も関わってくるのではないかと、経済が平常時でも同じことが起きるのかという疑問も残った。

加えて先行研究と同様に、東北大でもこれが適応された。しかし順位自体は仕事両立と楽しくいきたいが逆転しているので、東北大学は偏差値がある程度高いという観点から東北

大生だけで見ると、本学生には現実的な視点があるのではないかと考えられる。⁵

【全体を通しての結論】

本分析にて得られた結果をもとに、東北大生の就職・居住地への意識によりもたらされ得る将来の動向について推測する。

仮説 1 の検証より、リモートワークのような「場所にとらわれない働き方」、及び生活に相応の報酬が保証されるという条件の下では、将来の居住地として都市部よりも地方を希望する人が増加することが判明した。仮説 3 の検証で確認された、都市部への居住希望者が必ずしも「(都市部で働くことによる) より多くの稼得」に依拠しているわけではないという事実は、就業・経済的側面等で地方への居住が可能となれば、都市部への居住に強く固執する理由は存在しなくなるということを示唆している。その点では、仮説 1 の検証から導出された結果の裏付けとなっているとも言える。

そして仮説 2 の検証より、居住希望地の存在する人ほど、何かしらの職業に興味をもつ傾向にあることがわかった。これは、多くの東北大生が将来の人生設計と向き合う際、「居住地と職業」を一括りにして模索する傾向にあることを意味している。したがって、東北大生のうち地方への居住を志す人は、将来その地で生計を立てることを目的として、その土地で求職・就職をしたり、自ら起業したりする可能性が高い。

以上を踏まえて、将来の展望を考える。

今後、リモートワークのような「場所にとらわれない働き方」、及び生活に相応の報酬が確保された社会が実現すれば、地方への居住を志す東北大生が増加する。その際彼らは「でも地方には、自分のやりたい仕事がない…」という理由で夢を簡単に断念してしまうのではなく、地方で生計を立てるべく、自分自身の理想に沿った職業をその地域内で見つけ出そうと尽力したり、或いは自ら起業することを計画したりする。そして卒業後はその地へ居住し、仕事をしながら生活を送る。

社会集団的特性として、東北大生は学力の高さや人材の優秀さ等が指摘されることがある。そうした彼らの多くが地方に居住して職に就けば、その地域の産業を継承する貴重な人材となったり、更なる地域振興に寄与したりすることが期待される。また、それにより長期スパンでみれば、若者の都市部への過度な集中を緩和し、地方の居住人口の増加・それに伴う過疎化の緩和も実現する。

結論として、人口偏在問題を職業の観点から捉える際、その改善のためには、

- ①場所の制約を受けない働き方
- ②生活が可能な程度の報酬（大金である必要はない）

⁵ しかし、東北大生でも多かった仕事と生活の両立や楽しく生きたいについては地方・都市選好の間でほとんど割合は変わらず、影響についての有意性は見られ無かったので就職する時に何を求めるかが「都市だから」、「地方だから」といった観点はあまり関係がないように思われる。

の 2 点が担保されるような環境・施策が求められる、というわけだ。

【今後の課題】

今後の課題として出身地と居住希望地の定義が統一されていなかったと言うことが挙げられる。今回の調査では出身地を「市」で尋ねたのに対して、居住希望地を都道府県で尋ね、それを都市部・地方という形で分類している。これは居住希望地を市で尋ねた場合に、都道府県で尋ねるよりも圧倒的にサンプルサイズが小さくなってしまうことを危惧したためにそのような尋ね方を行った。しかしより正確な調査を行うためにはこの部分を統一して調査を行う必要があるだろう。

また今回の調査において各学年の人数においてサンプルサイズが小さかったり、各学年の人数にばらつきがあったため、各学年の人数を均一にして調査することでより正確な分析結果につながられるだろう。

また仮説 1 に関してより条件を統制していくことによって、地方出身者が地方に戻りたい、また都市部出身者が地方に移住したいと考える条件が調べることができるかもしれないということを今後のテーマとしていきたい。

今回の研究は「就職」をテーマとしているから、質問 50, 51 では「就活に際して」と聞いている。そして集まったサンプルを検討した結果、「居住地の展望」と「就職での優先事項」に有意な関連は見られなかった。今回は居住地の希望と就職意識との関係だけに注目したから、就職意識以外の要素（例えば私生活面、遊ぶ場所が多い）との関係には検討する余地が残されているかもしれない。

引用文献

朝日新聞（北海道版） 2020/9/9 朝刊 6 面「在宅勤務 脱都心の契機」.

朝日新聞（北海道版） 2020/9/9 朝刊 26 面「東京一極集中 変わる？」.

Bohnstedt, George W., and David Knoke. 1988. *Statistics for Social Data Analysis* (2nd ed). Itasca,

IL: F. E. Peacock Pub. 『社会統計学』海野道郎・中村隆（監訳）ハーベスト社, 2019.

盆小原照晶・佐藤徹治, 2009, 「生活圏間人口移動の金銭的・非金銭的要因に関する実証分析——都市圏在住学生の就職時の生活圏選択行動を対象として」『日本都市計画学会都市計画論文集』44(3): 337-342.

和泉潤・守屋高弘, 1979, 「大学生の新規就職時の移動に関する研究」『日本都市計画学会都市計画論文集』14: 25-30.

河北新報 2021/1/30 朝刊 2 面「東京圏 人口集中が減速」.

東北大生の学習に関する調査

——学習への満足度と意欲——

大倉瑠那・大沼あかり・生内絵梨香・山口侑平

1. 研究関心

私たちは、大学生の学習意欲や授業満足度に興味を持ち、これらに影響を与えると考えられる要因について分析を行った。

本調査では殊更「友人関係についての満足度」と「授業料満足度」、さらには「出身地と大学との距離」という要因に焦点を当て、これら要因と東北大学生の学習への向き合い方との関係性を分析した。

この分析によって「意欲が低い学生はどのような特性の者なのか」「授業に満足していない学生の特性はどのようなものなのか」を知ることができるだろう。これら分析結果を学生支援に活かせば、意欲や授業満足度の格差是正や、東北大学生の学習意識の向上などに寄与できるかもしれない。

2. オンライン授業の形式ごとの満足度について

2.1 リサーチクエスト

コロナ禍によるオンライン授業の導入のため、昨年から新しく大学に入った学生たちは入学前に想定していた大学生活とは全く異なる生活を強いられており、学習へのモチベーションを見出せずにいる者も少なくない。また、対面授業と比べて、オンラインでの授業は同級生や教員とのコミュニケーションが取りづらく、人間関係の形成という点でも影響を及ぼしているのではないだろうか。特に、各々で講義資料を閲覧し、課題に取り組む形式をとるオンデマンド授業ではそうした不満は顕著に現れると予想され、教員や他の学生と即時的にコミュニケーションがとれるリアルタイム授業については満足度が高くなると考えられる。

その一方で、現3、4年生、つまり対面での授業に慣れていて人間関係も形成されている学生に付いては真逆の意見が見られると予想される。オンライン授業のメリットとして、大学に通う必要が無くなるため、時間の制限が無くなり自分の裁量で学習を進められることが挙げられる。ただし、オンライン授業の中でもリアルタイム授業の場合では時間の制約はあまり変わらないため、上級生についてはオンデマンド授業の方が満足度が高くなるのではないだろうか。

2020年に東京医科大学で三苦・原田らが行った調査によれば、7割近くの学生が対面授業よりもオンデマンド授業の方が理解しやすく学びやすいと回答し、その傾向は特に専門分

野を学び始めた学部2年生で顕著に見られたという。また、同調査では回答者の65%が大学や教員が想定していた授業時間の1.5倍から2倍の時間をかけて授業動画を視聴・学習したことも分かっている。つまり、学生は映像資料の分からない箇所を止めて繰り返し視聴したり、調べながら視聴することで理解できない点を解消しながら視聴していたと考えられる。こうした利便性の高さは対面授業やリアルタイム授業にはないオンデマンド授業特有のものであり、授業満足度や学習効率の向上に繋がると考えられる。

このようにオンライン授業にはリアルタイム授業・オンデマンド授業ともにメリット・デメリットが存在するが、受講する学生の背景によってよりメリットを感じやすくなると予想する。また、学年ごと、特に今回はコロナ禍以前・以後の学生に分けて分析を行うことで学生生活が授業満足度に与える影響を考察していきたい。そして、学びやすさというオンデマンド授業のメリットを十分に活かすことが出来れば、コロナ禍の後も授業形式を対面授業に制限することなく、多くの学生が学習しやすい環境づくりに取り組めると考える。

2.2 仮説

学年が上がるほどオンデマンド授業への満足度は高くなり、リアルタイム授業への満足度は低くなる

〈補助仮説〉

- ・2年生より3,4年生の方がオンデマンド授業への満足度が高い。
- ・2年生より3,4年生の方がリアルタイム授業への満足度が高い。

2.3 分析に用いる変数

〈従属変数〉

○授業形態ごとの満足度

1つの授業で複数の形態を採用している場合は、授業内・授業外を合わせて学習に利用している時間の長い形態を想定してもらった。また、「該当する授業を受講していない」という選択肢は欠損値として扱った。

- ・オンデマンド授業満足度(q09_3)
- ・リアルタイム授業満足度(q09_2)

「1.満足」「2.やや満足」「3.どちらでもない」「4.やや不満」「5. 不満」の5件法での回答を連続変数に加工し、値を逆転させて用いた。

〈独立変数〉

- ・学年(q03)

1年生の回答者が著しく少なかったため、2年生と3,4年生の2つのカテゴリーに分け

て分析した。

＜統制変数＞

- ・ コマ数 (q06)

学年ごとに履修しているコマ数が異なると予想し、連続変数として統制した。

- ・ 現在の友人関係に対する満足度 (q15_1)

大学における人間関係の満足度の指標として、「1.満足」～「5.不満」の5件法での回答を連続変数に加工し、値を逆転させて用いた。

- ・ 通信環境への満足度 (q11)

オンライン授業を受講するにあたる環境への満足度の指標として、「1.満足」～「5.不満」の5件法での回答を連続変数に加工し、値を逆転させて用いた。

2.4 記述統計

以下に各変数の記述統計を示す。

表 1. オンデマンド授業満足度とリアルタイム授業満足度の度数および相対度数

	オンデマンド授業満足度		リアルタイム授業満足度	
	度数	%	度数	%
満足	12	33.8	36	16.9
やや満足	97	47.5	96	45.1
どちらでもない	23	11.3	37	17.4
やや不満	12	5.9	32	15
不満	3	1.5	12	5.6
合計	147	100	213	100

表 2. 学年の度数および相対度数

	度数	%
2年生	103	49.8
3、4年生	104	50.2
合計	207	100

表 3. コマ数の基本統計量

	度数	最小値	平均	標準偏差	最大値
コマ数	194	3	12.52	3.92	25

表 4. 現在の友人関係に対する満足度の度数および相対度数

	度数	%
あてはまる	89	41.6
すこしあてはまる	59	27.6
どちらでもない	25	11.7
あまりあてはまらない	31	14.5
あてはまらない	10	4.7
合計	214	100

表 5. 通信環境への満足度の度数および相対度数

	度数	%
満足	113	16.9
やや満足	67	45.1
どちらでもない	12	17.4
やや不満	19	15
不満	3	5.6
合計	214	100

2.5 分析結果

まず、従属変数をオンデマンド授業満足度、独立変数を学年として単回帰分析を行った結果を表 6 に示す。なお、学年の基準カテゴリーは 2 年生とする。

表 6. オンデマンド授業満足度に関する単回帰分析

	B	S.E
切片	3.875***	0.09
学年(2年生に対して 3, 4年生)	0.363**	0.126
調整済みR ² 乗	0.041	
N = 197	***p<0.001, **p<0.01	

オンデマンド授業満足度と学年について正の効果が見られ、1%水準で有意であった。同

じ学年であってもコマ数や通信環境及び友人関係への満足度には個人差があり、それらの変数が結果に影響を与えている可能性を考慮し、コマ数・通信環境への満足度・友人関係への満足度を統制変数として加えて分析した結果は表 7 の通りである。

表 7. オンデマンド授業満足度に関する重回帰分析

	B	S.E
切片	2.874***	0.397
学年(2年生に対して 3, 4年生)	0.272*	0.129
コマ数	-0.001	0.017
通信環境への満足度	0.136*	0.063
友人関係への満足度	0.124*	0.052
調整済みR2乗	0.096	
N = 179	***p<0.001, *p<0.05	

重回帰分析の結果、オンデマンド授業満足度と学年について正の効果が見られ、5%水準で有意であった。よって、「2年生より3, 4年生の方がオンデマンド授業への満足度が高い」という補助仮説が支持される。また、通信環境及び友人関係への満足度も5%水準で有意な正の効果が見られ、オンデマンド授業満足度に影響を及ぼしていると思われる。

次に、リアルタイム授業を従属変数、学年を独立変数として単回帰分析を行った結果を表 8 に示す。

表 8. リアルタイム授業満足度に関する単回帰分析

	B	S.E
切片	3.33***	0.108
学年(2年生に対して 3, 4年生)	0.337*	0.153
調整済みR2乗	0.023	
N = 205	***p<0.001, *p<0.05	

リアルタイム授業満足度と学年について正の効果が見られ、5%水準で有意であった。オンデマンド授業満足度での場合と同様に、コマ数・通信環境への満足度・友人関係への満足度を統制変数として加えて重回帰分析を行った結果は表 9 の通りである。

表 9. リアルタイム授業満足度に関する重回帰分析

	B	S.E
切片	2.801***	0.47
学年(2年生に対して 3, 4年生)	0.198	0.156
コマ数	-0.04	0.02
通信環境への満足度	0.225**	0.075
友人関係への満足度	0.056	0.062
調整済みR2乗	0.087	
N = 185	***p<0.001, **p<0.01	

重回帰分析の結果、リアルタイム授業満足度と学年について有意な差は見られなかった。「2年生より3, 4年生の方がリアルタイム授業への満足度が高い」という補助仮説は支持されなかった。しかし、通信環境への満足度が高いほどリアルタイム授業満足度が高くなり、これは1%水準で有意であった。

リアルタイム授業満足度と学年の関連については有意な結果が得られなかったが、オンデマンド授業満足度については補助仮説が支持されたため、「学年が上がるほどオンデマンド授業への満足度は高くなり、リアルタイム授業への満足度は低くなる」という仮説は部分的に支持されたと言える。

2.6 考察

オンデマンド授業満足度に関しては、コロナ禍以前の大学生活を通して十分な友人関係が築けている3, 4年生の方が満足度が高くなり、およそ想定通りの結果となった。

その一方で、リアルタイム授業満足度に関しては学年との間だけでなく、友人関係への満足度についても有意な効果が見られなかったが、通信環境への満足度について正の効果が見られた。この結果を受けて、リアルタイム授業は配信される講義をオンライン上でリアルタイム視聴するという特性上、オンデマンド授業と比較しても、学生の通信環境が授業の質に大きく影響していると考えられる。

また、授業形式・友人関係・通信環境の全てにおいて「満足」「やや満足」と回答する人の割合が多く、学年の違いによる授業満足度の差が現れにくくなってしまったのではないかと予想される。

3 大学生の授業料満足度と学習環境への満足度の関連について

3.1.1 リサーチクエスションの設定

全国の大学が 2020 年 4 月より授業をオンライン形式で実施している。自宅から授業を受けられるようになり移動の手間が省けるといった利点がある一方、対人コミュニケーションが取りにくい・教授との距離が遠い・大学の教育施設を利用できないといった問題点も多く上がっている。その中でも、オンライン授業自体の質の低さ・対面授業が実施される場合と同額の学費設定といった現状は大きな波紋を呼んでいる。

国外では、オンライン授業で受けられるサービスとその対価として支払う学費の間にギャップがあることを問題視する声が挙がっている。読売新聞オンライン(2020)によれば、新型コロナウイルスの感染防止のためのオンライン授業で満足な教育を受けられなかったとして、韓国の 46 の大学生約 3500 人が 1 日、大学と国などを相手取り、授業料の一部返還を求めてソウル中央地裁に提訴したそう。また、朝日新聞 Globe+(2021)では、米国では元来、高等教育費用の高騰が長年の問題だったが、2020 年春にパンデミックのために授業中止や構内閉鎖に動いた大学が相次いだため、問題は一気に先鋭化し学生側が起こした授業料返還訴訟も十数件に上ると紹介されている。国内においても、2020 年 7 月 Twitter 上で「#大学生の日常も大事だ」を掲げたハッシュタグイベントが行われ、3 万件を超える大学生の怒りと絶望と落胆の声が寄せられている。その多くが、「オンライン授業の質の低さ」に言及しており、さらに学費の減額を望む意見も多々挙げられていた。このような傾向は東北大学生でも見られるのであろうか。今回は「授業料に見合った教育を受けられている」と東北大学生は感じているのかどうかを明らかにし、今後大学教育のコストパフォーマンスも最大化するためにどのような工夫を凝らす必要があるか分析する。この研究では、オンライン授業実施下の東北大学生の現状を明らかにし、その課題点および改善点を見出す。今後オンライン授業が恒久化する可能性を鑑み、より良い大学教育を生徒に提供する手だてになり得るのではないだろうか。

3.1.2 先行研究

足立(2021)によれば、多くの大学で学長声明のようなかたちで学費(学納金)の減額は行わない旨の考えが示されている。学費は、原則 4 年間の教育に対して必要とされる総額を年数で等分して納めているものであり、また学費(学納金)などには図書館、体育施設、実験・実習室などの大学付属の施設や設備を維持するための費用にも充てられているというよう

な内容である。

つまり、新型コロナウイルスのような不測の事態において、学生が大学施設を十分に利用できない場合であっても、当初規定されていた学費を納めることが求められており、授業形態および施設利用頻度によって学費を減額することはないということである。それを考慮すると、先に述べたような大学生の授業料返還訴訟に対しては、オンライン授業の質を向上させ費用に見合った教育を提供することが必須であろう。そのためには、東北大学生が現在提供されている授業の費用対効果をどのように考えているか検証する必要がある。

植村ら(2020)によれば、対面授業時に授業態度が良好であった学生は、オンライン授業でも積極的に授業に参加しており、オンライン授業での満足度も高いうえに学費に見合うとした意見が多いという関連が見られると紹介されていた。一方、対面授業よりも学習態度が悪くなった学生は、結果としてオンライン授業で望んだ学習成果が得られず、学費に見合うとは思わないという意見が多くなったという考えも述べられていた。

つまり、オンライン授業への学習態度は、授業自体への満足度だけでなく授業料への評価にも影響を及ぼすと考えられる。つまり、対面授業からオンライン授業への移行により質の高い授業を得られなかった学生は、自然と授業料にも不満を抱くという考察を立てることができるだろう。

3.2 仮説

以上を踏まえ、次のような仮説を立てた。

仮説：授業料に対し満足している人ほど、大学が提供する学習環境への総合的な評価が高い

3.3 分析に用いる変数

授業料に対する満足度

Q12「授業の内容や大学の施設の充実度、学生に対するサービスなどを総合的に見て、あなたは現在の授業料が適切であると思いますか。」において、「高い」「やや高い」「ちょうどいい」「やや安い」「安い」「わからない」のいずれかで回答してもらった。「わからない」という回答を欠損値とし、比較的回答の少なかった「ちょうどいい」「やや安い」「安い」を1カテゴリに加工した。満足度の高いカテゴリーに高得点を割り当てるよう設定するため、「高い」を1点・「やや高い」を2点・それ以下を3点と調整した。

学習環境への総合的な評価

Q7「総合的に見て、あなたはコロナ禍における現在の学習環境に満足していますか。」において、「満足」から「不満」までの五件法で尋ねた。連続変数として投入するため、満足度が高い順に5点～1点となるよう設定した。

通信環境への満足度

Q11「あなたは、ふだん授業を受けている場所の通信環境に満足していますか。」において、「満足」から「不満」までの五件法で尋ねた。連続変数として投入するため、満足度が高い順に5点～1点となるよう設定した。

学年

Q3「あなたは現在、何年生ですか。」において、「学部1年」「学部2年」「学部3年」「学部4年」「大学院生」「研究生」「その他」のいずれかで回答してもらった。回答数の少なかった「学部1年」「大学院生」「研究生」「その他」を欠損値とした。カテゴリ変数として捉える。

学費の負担形態

Q23「今年4月の時点で、学費(授業料、講座代、教科書代)はどこから出していましたか。あてはまるものすべてを選んでください。」において、「家庭」「アルバイト」「奨学金」「その他」のうちあてはまるものを全て回答してもらった。複数の項目に対し「あてはまる」を選んだ回答・「その他」を選んだ回答を欠損値とした。そして、「家庭」に関してはNO、「アルバイト」「奨学金」に関してはYESと再設定した。

学習意欲スコア

Q8「今セメスターのあなたの学習活動に関する以下の項目について、もっともあてはまるものをそれぞれ1つずつを選んでください。」において、「そう思う」から「そう思わない」までの五件法で尋ねた。これら学習意欲を反映する5つの質問の回答の得点を足し合わせ、学習意欲スコアという新しい変数を作成した。Cronbachの α 係数は0.765だったため合成可能と判断した。その際、2問目、4問目、5問目の質問で得られた回答は、「そう

思う」が5点・「そう思わない」が1点になるように調整した。つまり、点数が高くなればなるほど学習意欲が高くなるように再設定した。

3.4. 記述統計

記述統計量の表は以下の通り。

表 10. 授業料に対する満足度

	度数	%
満足	112	49.78
やや満足	76	33.78
どちらともいえない	12	5.33
やや不満	20	8.89
不満	5	2.22
N	225	

表 11. 学習環境に対する総合的な評価

	度数	%
満足	34	14.40%
やや満足	115	48.73%
どちらともいえない	41	17.37%
やや不満	34	14.41%
不満	12	5.08%
N	236	

表 12. 通信環境に対する満足度

	度数	%
満足	112	49.78
やや満足	76	33.78
どちらともいえない	12	5.33
やや不満	20	8.89
不満	5	2.22
N	225	

表 13-1. 学年

	度数	%
1年生	1	0.42
2年生	120	50.85
3年生	89	37.71
4年生	19	8.05
大学院生	2	0.85
研究生	5	2.12
N	236	

表 13-2. 学年(加工後)

	度数	%
2年生	120	52.63
3年生	89	39.04
4年生	19	8.33
N	228	

表 14-1. 学費の負担形態(家庭)

	度数	%
当てはまる	215	91.1
当てはまらない	21	8.9
N	236	

表 14-2. 学費の負担形態(アルバイト)

	度数	%
当てはまる	30	12.71
当てはまらない	206	87.29
N	236	

表 14-3. 学費の負担形態(奨学金)

	度数	%
当てはまる	50	21.19
当てはまらない	186	78.81
N	236	

表 14-4. 学費の負担形態(リコード後)

	度数	%
当てはまる	58	26.01
当てはまらない	165	73.99
N	223	

表 15. リコード後の授業料への満足度・通信環境への満足度・学習意欲スコア

	平均値	中央値	最大値	最小値	標準偏差	N
授業料への満足度	1.843	2	3	1	0.727	198
通信環境への満足度	4.234	5	5	1	1.026	235
学習意欲スコア	15.56	16	25	5	4.003	234

3.5 分析結果

3.5.1 単回帰分析

初めに、従属変数を学習環境に対する総合的な評価、独立変数を授業料に対する満足度として単回帰分析を行った結果を表に示す。

表 16. 学習環境に対する総合的な評価に関する単回帰分析

	係数	標準誤差
切片	2.682***	0.231
授業料への満足度	0.391***	0.101
調整済みR2	0.071	
N	198	

p < 0.1, *p < 0.05, **p < 0.01, ***p < 0.001

学習環境に対する総合的な評価という観点における授業料に対する満足度の影響が 1% 水準で有意に認められた。つまり、授業料に対し満足している人ほど、大学が提供する学

学習環境への総合的な評価が高いという仮説が支持された。また、通信環境への満足度が高いほど、学習環境に対する評価が低いといった副次的な結果も得られた。

3.5.2 重回帰分析

通信環境への満足度・学年・学費の負担形態・学習意欲スコアが授業料に対する満足度に影響を与える可能性を考慮し、それらを統制変数として追加した分析を以下に示す。

表 17 は学習環境への総合的な評価に対する授業料への満足度の影響に関して、統制変数として通信環境への満足度を加え重回帰分析を行った結果である。

表 17. 通信環境への満足度を加えた重回帰分析

	係数	標準誤差
切片	3.260***	0.249
授業料への満足度	0.407***	0.095
通信環境への満足度	-0.359***	0.069
調整済みR ²	0.19	
N	198	

p < 0.1, *p < 0.05, **p < 0.01, ***p < 0.001

分析結果より、学習環境に対する総合的な評価という観点における授業料に対する満足度の影響が 0.1%水準で有意に認められた。また回帰係数は 0.391 から 0.407 へと変化したため、授業料への満足度と学習環境への総合的な評価の 2 変数に対して、「通信環境」は影響を及ぼさないと考えられる。また、通信環境への満足度が高い人ほど学習環境に対する評価が低いといった結果が副次的に得られた。

表 18 は学習環境への総合的な評価に対する授業料への満足度の影響に関して、統制変数として学年を加え重回帰分析を行った結果である。「学年」の基準カテゴリーは 2 年生としている。

表 18. 学年を統制変数として追加した重回帰分析

	係数	標準誤差
切片	2.383***	0.226
授業料への満足度	0.390***	0.096
3年生	0.602***	0.148
4年生	0.527***	0.262
調整済みR2	0.162	
N	188	

p < 0.1, *p < 0.05, **p < 0.01, ***p < 0.001

分析結果より、学習環境への総合的な評価という観点における授業料に対する満足度の影響が 0.1%水準で有意に認められた。また回帰係数は 0.391 から 0.390 と変化した。また、係数の変動が比較的小さいため、授業料への満足度と学習環境への総合的な評価の 2 変数に対して、「学年」はほとんど影響を及ぼさないと考えられる。また、3 年生・4 年生は 2 年生よりも学習環境への総合的な評価が有意に高いといった結果も副次的に得られた。

表 19 は学習環境への総合的な評価に対する授業料への満足度の影響に関して、統制変数として学費の出費形態を加え重回帰分析を行った結果である。

表 19. 学費の出費形態を統制変数として追加した重回帰分析

	係数	標準誤差
切片	2.591***	0.27
授業料への満足度	0.445***	0.116
学費の出費形態(アルバイト・奨学金から出費)	-0.149	0.306
調整済みR2	0.083	
N	198	

p < 0.1, *p < 0.05, **p < 0.01, ***p < 0.001

分析結果より、学習環境への総合的な評価という観点における授業料に対する満足度の影響が 0.1%水準で有意に認められた。また回帰係数は 0.391 から 0.445 と変化した。また、学費の出費形態と学習環境に対する評価は負の関係性にあるものの、結果は有意ではなかった。

表 20 は学習環境への総合的な評価に対する授業料への満足度の影響に関して、統制変数として学習意欲スコアを加え重回帰分析を行った結果である。

表 20. 学習意欲スコアを統制変数として追加した重回帰分析

	係数	標準誤差
切片	2.129***	0.345
授業料への満足度	0.376***	0.1
学習意欲スコア	0.0366*	0.018
調整済みR2	0.084	
N	193	

p < 0.1, *p < 0.05, **p < 0.01, ***p < 0.001

分析結果より、学習環境への総合的な評価という観点における授業料に対する満足度の影響が 1%水準で有意に認められた。また回帰係数は 0.391 から 0.376 と変化したが係数の変動が比較的小さいため、授業料への満足度と学習環境への総合的な評価の 2 変数に対して、「学習意欲」はほとんど影響を及ぼさないと考えられる。授業料への満足度を統制した場合、学習意欲の高い人ほど学習環境への評価が高いという関係性が 0.5%水準で有意であった。

重回帰分析では、いずれの場合においても、学習環境に対する総合的な評価という観点において授業料に対する満足度の影響が 1%水準で有意に認められた。つまり、授業料に対し満足している人ほど、大学が提供する学習環境への総合的な評価が高いという仮説が支持された。

3.6 考察と結論

すべての分析で、授業料への満足度と学習環境への総合的な評価は正の関連があった。これは、授業料への満足度(サービスのコストパフォーマンスを測る指標)と学習環境への総合的な評価(実際のサービスの満足度)はある程度関連があり、大学が提供する教育サービス全般に満足できない理由としてサービスに適した価格で提供されていないことが存在するということである。つまり今回の分析では、設定した仮説「授業料に対し不満を感じる人ほど、大学が提供する学習環境への総合的な評価が低い」が支持されるという結果になった。

さらに、統制変数として投入した「通信環境への満足度」・「学年」・「学費の出費形態」・「学習意欲」は2者の関係性にほとんど影響せず、授業料への満足度と学習環境への総合的な評価は正の関連があるといった結果が得られた。しかしながら「通信環境への満足度」・「学費の出費形態」を投入した重回帰分析においては、2変数間の関連が強くなった一方、「学年」・「学習意欲」を投入した重回帰分析においては2変数間の関連を示す係数が微量ながら減少した。この減少は、統制変数を入れたことによる誤差であると結論付けたものの、コロナ禍以前の大学生活を経験しているか・純粋に大学生活および大学における学習に慣れているかといった要因は学習環境への評価に大きな影響を及ぼしている可能性もある。実際に、3年生・4年生は2年生よりも学習環境への総合的な評価が有意に高いという副次的な結果も得られた。3, 4年生は2年生よりも大学における学習スタイルを確立しているため、自身のペースで学習を進められるオンライン授業に適応しやすかったことや、コロナ禍以前に大学における友人関係を構築していたため、対面コミュニケーション機会の少ないオンライン授業であっても心理的負担を感じにくかったといった要因が考えられる。すなわち、コロナ禍以前の大学生活を経験しているため、入学当初からオンライン授業であった2年生に比べて理想と現実とのギャップが少ない・大学における学習のペースを個人で形成できているため学習環境への評価があまり低くなりにくいといった理由が考えられる。「学習意欲」に関しては、学習意欲が高い人は授業料の値段設定に関わらず大学での学びを最大化しようと努める傾向にあるため、結果として学習環境への評価も高くなりやすいのではないかと。つまり、授業料にただ不満を持ちつつサービスを受けるのではなく、大学が提供するあらゆるサービスに関して興味を持ち、自身の学習のため最大限活用するといった流れが考えられるだろう。

4. 出身地と仙台市との距離と学習意欲の関連について

4.1 リサーチクエスションの設定について

遍く東北大学の学生は東北大学の実施する入試に合格した者である。逆に言えば、東北大学に合格できる学力がない者は東北大学の学生になることはない。また、東北大学に合格できる以上の学力を持っている者の多くはより上位の大学に進学しているはずだろう。つまりところ東北大学の学生はおしなべて同程度の偏差値・学習能力を有している人だと考えられる。

それにも関わらず、この大学にも四年で卒業できる人がいる一方で留年してしまう人もいる。GPAが高い者もあれば低い人もいる。意欲がある学生がいればない学生もいる。長

時間勉強する学生もいれば、必要最低限ほどもしない学生もいる。大学入学時点の能力は皆似通っていると仮定すれば、このような差が出てしまうのは不思議である。

ではこの差はいかなる要因によって生じるのであろうか？

私は、出身地と東北大学との距離が学習態度に関係しているのではないかと考えた。出身地が遠い学生ほど学習へ向き合う姿勢が良く、近い学生ほど悪いのではないか？ 遠方出身者には、遠方からわざわざ引っ越してやってくるだけの「意欲」があるのではないかと。以降、このような出身地の距離と学習意欲をはじめとした学習への態度について分析を行っていく。

4.1.2 先行研究

大学生の学習意欲を決定づける要因はいかなるものか？ このことについては既存の研究でいくつか報告されている。例えば見舘（2008）は、教員とのコミュニケーションが多くなれば学習意欲が高くなることを示している。

しかし、これまでに「出身地と大学との距離」と学習態度との関係を分析した論文はほとんど報告されていない。そこで我々がこれらの関連を紐解いていこうと試みたわけだ。

4.2 仮説

以上を踏まえ、次の3つの仮説を立てた。

- 3-1. 遠方出身者の東北大学生ほど宮城県出身者に比べて学習意欲が高い。
- 3-2. 遠方出身者の東北大学生ほど学習時間が長い。
- 3-3. 遠方出身者の東北大学生ほど受講コマ数が多い。

4.3 分析に用いる変数

<従属変数>

- ・ 学習意欲スコア (q08_1～q08_5)

授業参加への姿勢、レポートとの向き合い方など、学習意欲を反映していると思われる5つの質問（それぞれ五件法）の回答の総和で新しい変数を作成した。その際、2問目、4問目、5問目の質問で得られた回答には次のような処理を施している。得られた「1」「2」「3」「4」「5」という回答を順番に「5」「4」「3」「2」「1」という具合にリコードした。この処理により、全5問で数値が大きいほど学習への意識が高いということで統一できる。また、Cronbachの α 係数は0.765だったため合成しても差し支えないと判断した。この変数を従属変数として扱う。

- ・ 授業外学習時間 (q10)

「今セメスターに、あなたはふだんどれくらいの時間を授業外学習に使っていますか。1

週間当たりの合計時間を答えてください。」という質問に対し、1 時間未満、1～3 時間未満、3～5 時間未満、5～7 時間未満、7～9 時間未満、9～11 時間未満、11～13 時間未満、13 時間以上の 8 カテゴリーで調査した。分析では、これらを連続変数として、1, 2, 4, 6, 8, 10, 12, 13 の 8 つにリコードしたものを使用した。

・コマ数(q6)

「あなたが今セメスターに、実際に受講している授業のコマ数を教えてください。」という質問に対し、コマ数を数字で回答してもらった。分析では、無回答だった人を欠損値として、連続変数として用いた。

<独立変数>

・出身地との距離⁶ (q46)

以下に示す図を用いて、東北大学の文科系総合研究棟とそこからの距離を質問し「宮城県」「宮城県以外の 100km 圏内」「100km～300km 圏内」「300km～600km 圏内」「600km」「その他」という回答を得た。それから「その他」という回答は排除し、5 つのカテゴリーからなる変数に加工した。なおこの質問における出身地の定義は、大学入学前に居住していた地域だとしている。



図 1.出身地と仙台市との距離を尋ねる質問に用いた地図

⁶ 出身地と仙台市との距離を尋ねる質問ではメルカトル図法の地図を用いているため、高緯度ほど歪みが大きくなっている。しかしその歪みに対応させた楕円ではなく、単なる円で距離を示してしまったため、実際の距離と合致しない場所がある。

・居住形態 (q60)

出身地の距離と居住形態には切ってもきれない関係があると考えられる。遠方からやってくる学生は実家を離れて下宿生活を始めるだろうし、近隣の学生はそのまま実家暮らしを継続するだろうと考えられるからだ。つまり「出身地との距離」と「学習意欲」の関係を分析しようとしても、そこには「居住形態」という要因が交絡していると考えられる。このような理由から「居住形態」も統制変数として必要になるのではないかと考えた。分析では「実家」「下宿,同居人あり」「下宿,一人暮らし」「寮」からなる4カテゴリーの変数を用いる。

ただしこの変数は基本の独立変数である「出身地との距離」と強い連関があると考えられる。よって多重共線性の問題があるかもしれない。しかし一応の参考として、この変数を導入した分析の結果を確認しておきたいと思う。

・入試形態 (q05)

リサーチクエストションでも述べたが、東北大学に入学する学生の学習能力や偏差値はおおよそ近似していると考えられる。しかし入試形態によってある程度の差異があることは予測される。例えば後期入学の学生は前期試験でより上位の大学に不合格になっている者だと想像がつく。より上位の大学を受験したということは、前期入学者よりも学力が高いことが予測される。その差をコントロールするためにも「入試形態」で統制することが必要だと考えた。ここでは得られた回答を「前期」「後期」「AO」の3つのカテゴリーからなる変数に加工した。

・奨学金受給の有無 (q28)

奨学金を受給しているか否かによっても学習意欲に影響があると考えた。奨学金をもらってまで大学に来ているのだから、受給している者はそうでない者よりも意欲が高いのではないかと予測したためである。集計したところ「利用している」「利用していない」「わからない」という3種類の回答が得られたが、「わからない」に回答した数が少なかったことなどから排除した。「利用している」を「奨学金利用あり」、「利用していない」を「奨学金利用なし」として2カテゴリーからなる変数を作成して分析に用いた。

・課外活動時間 (q55)

「あなたが1週間に課外活動(アルバイト・部活動・サークル)にかける時間をお答えください。」という質問に対し、5時間未満、5時間以上10時間未満、10時間以上20時間未満、20時間以上30時間未満、30時間以上の5カテゴリーで調査した。分析では、これらを連続変数として、5時間、7.5時間、15時間、25時間、30時間の5つにリコードしたものを使用

した。

・学年 (q3)

「あなたは現在、何年生ですか。」という質問に対し、学部1年、学部2年、学部3年、学部4年、大学院生、研究生、その他の7カテゴリで調査した。分析では、学部2年、学部3年、学部4年を、連続変数としてそれぞれ2, 3, 4の3つにリコードしたものを使用した。学部1年、大学院生、研究生、その他と回答した人は欠損値とした。

・学部 (q4)

「あなたの所属学部を教えてください。」という質問に対し、「文学部」、「経済学部」、「理学部」、「工学部」、「その他」の5カテゴリで調査した。分析では、「その他」と回答した人を欠損値として4つの変数として用いた。

4.4 記述統計

表 21.学習意欲変数の基本統計量

最小値	中央値	平均値	最大値	標準偏差	N
5	16	15.56	25	4.00	234

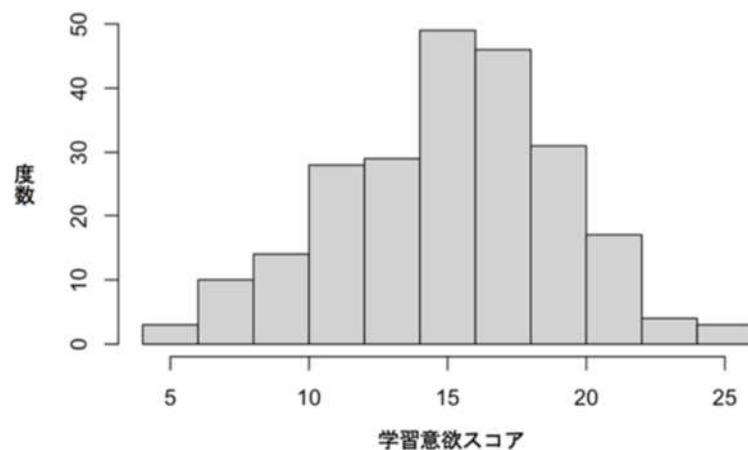


図 2.学習意欲スコアの分布

表 22.居住形態の度数

	度数	%
下宿, 一人暮らし	152	65.8
下宿, 同居人あり	12	5.2
実家	50	21.6
寮	17	7.4
N	231	

表 23.入試形式の度数および相対度数

	度数	%
前期	149	64.8
後期	16	7.0
AO	65	28.3
N	230	

表 24.奨学金利用有無の度数および相対度数

	度数	%
奨学金利用あり	72	30.9
奨学金利用なし	161	69.1
N	233	

表 25.学年

	度数	%
学部2年	103	49.8
学部3年	86	41.5
学部4年	18	8.7
N	207	100

表 26.学部

	度数	%
文学部	49	24.1
経済学部	31	15.3
理学部	78	38.4
工学部	45	22.2
N	203	100

表 27.出身地との距離

	度数	%
宮城県	39	8.6
～100km圏内	18	34.8
100～300km圏内	73	30.5
300～600km圏内	64	7.6
600km圏外	16	18.6
N	210	100

表 28.用いる変数の記述統計量

	N	最小値	平均	標準偏差	最大値
コマ数	194	3.00	12.52	3.92	25.00
授業外学習時間	215	1.00	8.00	3.82	13.00
課外活動時間	207	5.00	10.00	6.81	30.00

4.5 分析結果

4.5.1 仮説 3-1 について

今回は回帰分析を行う。先述の通り従属変数に「学習意欲スコア」を、独立変数に「出身地との距離」を据える。それから随時独立変数に統制に用いる変数を加えていく。

表 29.回帰分析の結果（モデル 1 モデル 2）

	モデル1		モデル2	
	B	Std.Error	B	Std.Error
(Intercept)	14.902***	0.618	14.993***	0.642
100km圏内	2.098 .	1.079	2.386 .	1.306
100km～300km	0.290	0.755	0.814	1.158
300km～600km	0.826	0.778	1.326	1.152
600km圏外	1.026	1.224	1.591	1.441
下宿,同居人あり			-0.617	1.042
下宿,一人暮らし			-2.386	1.587
寮			-0.021	1.425
R2	0.021		0.031	
***p<0.001,.p<0.1	N=228		N=223	

上に示した表 29 では、単回帰分析（モデル 1）の結果と「居住形態」を統制変数に加えた重回帰分析(モデル 2)の結果を示した。「出身地」の基準カテゴリーは「宮城県出身者」、

「居住形態」の基準カテゴリーは「実家暮らし」である。

分析の結果から、どちらのモデルでも 100km 圏内出身の係数が 10%水準で有意となった。サンプル数が少ないせいで標準偏差が大きくなり有意差が出にくいという可能性を考慮すれば「100km 圏内出身者は宮城県民よりも学習意欲が高い」と言えなくもなさそうだが、あくまでも希望的観測に過ぎない。

また、統制に用いた「居住形態」ではどのカテゴリーの係数も有意になることはなかった。

続いて「入試形態」を加えた重回帰分析（モデル 3）と、「奨学金利用の有無」を加えた重回帰分析（モデル 4）の結果を示す。「入試形式」の基準カテゴリーは「前期」、「奨学金利用の有無」の基準カテゴリーは「奨学金利用あり」としている。

表 30. 回帰分析の結果（モデル 3 モデル 4）

	モデル3		モデル4	
	B	Std.Error	B	Std.Error
(Intercept)	15.809***	0.713	14.774***	0.757
100km圏内	2.053 .	1.071	2.099 .	1.081
100km～300km	0.750	0.763	0.317	0.762
300km～600km	1.277	0.786	0.886	0.782
600km圏外	1.529	1.250	1.021	1.227
後期	-0.196	1.136		
AO	1.721**	0.596		
奨学金利用なし			0.170	0.576
R2	0.061		0.022	
***p<0.001,**p<0.01,.p<0.1	N=225		N=227	

これらモデルの結果でも、100km 圏内出身者は宮城県出身者に比べて学習意欲が高いことが 10%水準で有意となった。

また副産物的な結果として、AO 入試で東北大学に入学した学生は、前期試験で入学した学生よりも学習意欲が有意に高いという結果が得られた。

4.5.2 仮説 3-2 について

従属変数が連続変数であるため、回帰分析を用いる。

独立変数を「出身地域との距離」、従属変数を「授業外学習時間」とし、単回帰分析を行った。さらに、学生の授業外学習時間は学部や学年、アルバイトや部活動などの課外活動時間に影響を受けると考え、統制変数として「学年」と「学部」、「課外学習時間」を加えて重回帰分析を行った。なお、今回の分析では「出身地域の距離」の基準カテゴリーを「宮城県」に、「学部」の基準カテゴリーを「文学部」に設定した。

下に示した表 31 より、単回帰分析での各変数の効果を確認すると、100～300km 圏内と

300～600km 圏内の効果の差が 5%水準で有意であった。

さらに、学年と学部、課外学習時間を統制変数として加えた重回帰分析での各変数の効果を確認した。用いた独立変数の中では、理学部の差の効果のみが 5%水準で有意であり、出身地との距離のカテゴリーはいずれも統計的に有意な効果はなかった。

表 31.出身地との距離と授業外学習時間の回帰分析

	モデル1		モデル2	
	係数	標準誤差	係数	標準誤差
切片	6.692 ***	0.599	6.857 ***	1.458
100km圏内	1.308	1.065	1.481	1.162
100～300km圏内	1.760 *	0.742	1.391	0.789
300～600km圏内	1.761 *	0.759	0.949	0.796
600km圏外	1.245	1.110	0.879	1.185
学年			-0.439	0.450
経済学部			1.195	1.195
工学部			1.640	1.640
理学部			1.777 *	1.777
課外活動時間			0.637	0.043
調整済みR	0.013			0.016
N	210		186	

*p < 0.05, **p < 0.01, ***p < 0.001

4.5.3 仮説 3-3 について

従属変数が連続変数であるため、回帰分析を用いた。

独立変数を「出身地域との距離」、従属変数を「コマ数」とし、単回帰分析を行った。さらに、学生が取るコマ数は学部や学年に影響を受けると考え、統制変数として「学年」と「学部」を加えて重回帰分析を行った。なお、今回の分析では「出身地域との距離」の基準カテゴリーを「宮城県」に、「学部」の基準カテゴリーを「文学部」に設定した。

下に示した表 32 より単回帰分析での各変数の効果を確認すると、いずれの変数についても統計的に有意な効果は見られなかった。

さらに、学年と学部を統制変数として加えた重回帰分析での各変数の効果を確認した。用いた独立変数の中では、学年と工学部、理学部の差の効果のみが 0.1%水準で有意であり、出身地との距離のカテゴリーはいずれも統計的に有意な効果はなかった。

表 32.出身地との距離とコマ数の回帰分析

	モデル1		モデル2	
	係数	標準誤差	係数	標準誤差
切片	11.882 ***	0.661	16.858 ***	1.329
～100km圏内	-0.471	1.145	-0.392	1.097
100～300km	1.263	0.808	1.109	0.775
300～600km圏内	1.100	0.835	0.796	0.799
600km圏外	-0.311	1.224	1.027	1.219
学年			-2.348 ***	0.435
経済部			0.793	0.696
工学部			2.883 ***	0.853
理学部			2.538 ***	0.709
調整済みR2	0.009		0.179	
N	191		180	

*p < 0.05, **p < 0.01, ***p < 0.001

4.6 考察と結論

4.6.1 仮説 3-1 について

まず有意か否かは俎上に載せず、係数の正負のみに注目してみよう。するとすべてのモデルで、宮城県出身者から見た他地域出身者の係数は正となっている。このことから（偶然かもしれないが）全体的に見て宮城県外出身の東北大学生の学習意欲は宮城県出身者よりも学習意欲よりも高い傾向がある、と考えることができるかもしれない。

今回の分析では「遠方出身者の東北大学生ほど宮城県出身者に比べて学習意欲が高い」という仮説は支持されそうにない。この仮説が正しかったならば宮城県から遠い地域のカテゴリーほど、係数の数値は大きくなるはずだからだ。わずかながらに有意傾向が認められたのは 100km 圏内出身者のカテゴリーのみであった。

では、100km 圏内出身者で学習意欲が高いかもしれないという結果が得られたのはなぜなのか。考えられる説を以下に箇条書きする。

- ① 実際に 100km 圏内から他県の大学に来る学生は意欲が高いものなのだ。（一般論説）
- ② 宮城県の周りに住む人々は、宮城県の人よりも意識が高い。（県民性説）
- ③ 回答者の学部や学年の偏りがこのような結果を作り出した。（標本抽出の綾説）
- ④ 本当に偶然によってこのような結果が得られた。（偶然説）
- ⑤ その他の要因

この説のうちのどれが、もしくは複数の正しいのかは定かではない。そもそも①の説は先行研究などが見つからなかったため、今回の分析だけで真偽を決するのは難しそうだ。

さらに仮に今回の東北大学の分析で①の説が正しかったとしても、その傾向を全国の大学に一般化できるとは到底思えない。他の地域の大学、偏差値の異なる大学、違う入試形態のある大学で同じような調査を実施すれば、異なる結果が得られると私は推測する。例えば、地方からスポーツ推薦で都市の大学に進学した者に高い学習意欲があるか？ という問題もある。

その点も含め、「大学の所在地と出身地との距離」と「学習意欲」には関係があるのか否かは今後検討する余地はあるかもしれない。

4.6.2 仮説 3-2 について

仮説 3-2 に関して、仮説として立てていた「遠方出身者の東北大生ほど学習時間が長い」という仮説を支持することはできなかった。

単回帰分析では 100～300km 圏内、300～600km 圏内で統計的に有意な効果がみられたものの、統制変数を加えた重回帰分析では、理学部は文学部と比較して授業外学習時間に有意な差が認められた一方、出身地のカテゴリーはいずれも統計的に有意な効果は見られなかった。これについては、2 つの解釈が考えられる。一つ目に、下の表 33 から分かる通り、特に 100～300km 圏内と 300～600km 圏内のカテゴリーには、文学部よりも授業外学習時間が長いと認められた理学部、工学部が多く属している。したがって、学部という交絡変数によって単回帰分析では有意な効果が生じたと考える。2 つ目に、100～300km 圏内と 300～600km 圏内のカテゴリーはその他のカテゴリーと比較してサンプルに含まれるケース数が大きい、標準誤差が小さくなり、有意になりやすかったと考えられる。

表 33.学部と出身地との距離のクロス表

	文学部	経済学部	理学部	工学部	N
宮城県	14(40%)	10(29%)	4(11%)	7(20%)	35
～100km圏内	10(56%)	4(22%)	3(17%)	1(6%)	18
100～300km圏内	25(36%)	17(25%)	18(26%)	9(13%)	69
300～600km圏内	21(35%)	12(20%)	15(25%)	12(20%)	60
600km圏外	14(40%)	10(29%)	4(11%)	7(20%)	35

4.6.3 仮説 3-3 について

仮説 3-3 に関して、仮説として立てていた「遠方出身者の東北大生ほど受講コマ数が多い」という仮説を支持することはできなかった。一方で学年の変数と、学部の変数のうち工学部と理学部のカテゴリーでは文学部と比較して有意な差が認められた。

今回の調査では学生の「学習に対する意欲」を測る指標として「履修コマ数」を用いたが、学生が履修する授業は必修科目や卒業必要要件として学部ごとにあらかじめ決められてい

るものが多いため、受講コマ数が個人の出身地に影響されなかったのではないかと考える。

4.7 変数間の因果関係

最後に、今回の回帰分析で係数の一部に有意・有意傾向がみられた「学習意欲」と「授業外学習時間」が、「出身地との距離」とその他の統制変数との間にどのような関係があるのかを考察する

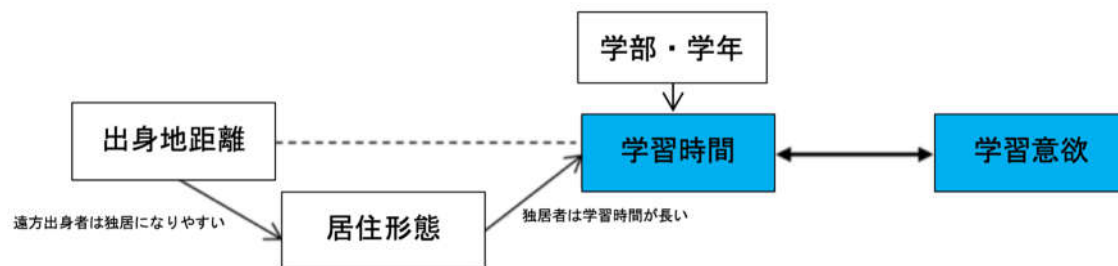


図 3. 各変数間の因果関係

先ほどの考察で述べたように「出身地との距離」と「学習意欲」「授業外学習」との間には直接的な関係はなさそうだった。

また「授業外学習時間」は「学部」「学年」という要因によって決定される他、「居住形態」にも影響を受けることが予測された。というのも、従属変数に「学習時間」、独立変数に「居住形態」を用いた回帰分析の結果、実家暮らしの学生に比べて下宿先で一人暮らしをしている学生の係数が正に有意となったからだ。その結果を以下に示す。独立変数「居住形態」の基準カテゴリーは「実家暮らし」とした。

表.34 授業外学習時間の居住形態の回帰分析

	B	Std.Error
(切片)	6.680***	0.534
下宿,一人暮らし	1.692**	0.616
下宿,同居人あり	0.320	1.214
寮	1.379	1.061
R2	0.035	
N=231	***p<0.001,**p<0.01	

この回帰分析の結果、実家暮らしの学生に比べて下宿先で一人暮らしをしている学生の週毎の学習時間は、平均して約 1.7 時間ほど長いことが 1%水準で示された。しかし、なぜ一人暮らしの学生が実家暮らしの学生よりも授業外学習時間が長いのかは、ここでは説明す

ることは出来ない。

では一人暮らしをしている学生は、どこからやってきた者が多いのだろうか。次に示すのは「出身地との距離」と「居住形態」のクロス表だ。

表.35 出身地距離と居住形態のクロス表

	下宿,一人暮らし	下宿,同居人あり	実家	寮	N
宮城県	6(14.6%)	0(0%)	35(85.4%)	0(0%)	41
100km圏内	12(66.7%)	1(5.6%)	4(22.2%)	1(5.6%)	18
100~300km圏内	61(76.3%)	7(8.8%)	2(2.5%)	10(12.5%)	80
300~600km圏内	59(84.3%)	2(2.9%)	3(4.3%)	6(8.6%)	70
600km圏外	11(68.8%)	1(6.3%)	4(25.0%)	0(0%)	16
N	149	11	48	17	225

この表から、宮城県出身者は多くが「実家暮らし」なのに対し、「100~300km 圏内」および「300~600km 圏内」のカテゴリーは「下宿,一人暮らし」の学生が圧倒的に多いことが明白だろう。カイ二乗検定を行なってみたところ p 値は 2.2-e16 と極めて小さくなった。これは飛行機が墜落する確率の約 4 兆倍起こり得ないことだ。この二つの要因が独立ではないことが示された。

また「出身地との距離」は「居住形態」に先行する要因だと考えられる。傘を差したから雨が降るのではなく、雨が降ったから傘を差すのだ。実家暮らしをしているから宮城県出身者になるわけではない。同じく、下宿先で一人暮らしをしているから宮城県外出身者になる者は金輪際不在だろう。つまるところ「出身地との距離」が「居住形態」を決定づけていると言える。

以上より「授業外学習時間」は、「出身地との距離」というよりは「学部」「学年」「居住形態」などで説明されているようだ。

そして「学習意欲」意欲と授業外学習時間には正の関連があると思われる。

表 36. 授業外学習時間と学習意欲の単回帰分析

	B	Std.Error
(切片)	4.678***	0.976
学習意欲	0.213***	0.061
R2	0.05	
N=234	***p<0.001	

上に示したのは、従属変数に「授業外学習時間」を独立変数に「学習意欲スコア」を用いて行なった回帰分析の結果である。係数は正の数で 0.1%水準で有意になった。つまり学

学習意欲スコアが高い人ほど学習時間が長いということだ。

今回行なった分析では、東北大学生の「授業外学習時間」のばらつきを説明する要因として「学部」「学年」などが存在することがわかった。一方で「学習意欲」のばらつきを説明する要因として満足なものを見出すことはできなかった。

もしかすると「学習意欲」というものは個々人の精神的なものなので、「学部」や「学年」、「出身地との距離」という集団的な特性とは相容れないものなのかもしれない。

はたまた入学時のフレッシュな「学習意欲」に注目すれば、遠方出身者の方が高い数値を示すのかもしれない。上級生は仙台で数年間過ごすことにより現在の環境に馴致し、出身地に関係なく意欲が一定の値に近似して行くという可能性もある。今回の分析では一年生のサンプル数が極端に少なかったため、その真偽のほどを検証することは不可能だ。

以上のことも踏まえて「学習意欲」のばらつきへの説明的な要因が今後見つかることに期待をしたい。

5.まとめ

今回の調査では、「通信環境への満足度」と「授業料満足度」、オンデマンド授業における「友人関係に対する満足度」の3つにおいて、学習意識に有意な効果を与えると認められた。

これらの結果を踏まえたうえで、学生の学習意識の向上に有効な施策としては、学生間の交流支援や、通信環境が悪い学生への支援、大学サービスの向上が挙げられる。これらの施策を行うことで、学生が積極的に学習に取り組むことが期待されるだろう。

6.引用文献

三苫博，原田芳巳，山崎由花，内田康太郎，五十嵐涼子，大滝純司，2020，「対面授業は，オンデマンド型授業より優れているのか？」『特集パンデミック下の医学教育——現在進行形の実践報告7 オンライン授業』51(3)：266-267.

中村哲之，2021，「オンライン授業(オンデマンド型)における教育効果——教育心理学的観点からの実践的検討」『東洋学園大学教職課程年報』3：1-14.

足立清人，2021，「新型コロナウイルス感染症による混乱のなかでの大学「在学契約」についての覚書」『北星学園大学経済学部北星論集』60(2)：55-69.

植村八潮，山崎航，小田佳織，長谷川さくら，2020，「教員・学生へのアンケートによるオンライン授業の現状分析」『専修大学情報科学研究所所報』96：21-30.

オンライン授業で満足な教育受けられず、授業料返還求め提訴…韓国の大学生3500人.
読売新聞 2020-07-01, 読売新聞オンライン, <https://www.yomiuri.co.jp/world/20200701-OYT1T50211/>, (参照 2021-07-21) .

オンライン授業料に不満爆発、米で学生の値下げ要求広がる.朝日新聞.2020-10-04,

<https://globe.asahi.com/article/1378704>, 朝日新聞 GROBE+, (参照 2021-07-21) .

見舘好隆, 永井正洋, 北澤武, 上野淳, 2008, 「大学生の学習意欲, 大学生生活の満足度を規定する要因について」『日本教育工学論文誌』 32(2): 189-196.

東北大生の社会・政治関心

——性的マイノリティへの人権意識と SNS 上での政治関心——

松村レオナルド大地・韓在賢・橋村和英

1. 研究関心

本研究では東北大生の社会・政治問題に関心を抱き、人権意識の程度と政治関心度という2つの観点について調査した。

人権意識については主にジェンダー問題について扱った。日本は先進国の中でジェンダー意識の低さをたびたび指摘されているが、比較的ジェンダー問題への理解、関心が高いと考えられる東北大生を対象にして調査することで、比較的ジェンダー問題への理解、関心が高い集団の中で、さらに高い理解、関心を生み出すものはなにかという問いに対して手がかりを得たいと考えた。政治関心についても同様の理由である。

本稿は4部構成になっており、第2節で個人の特性と人権について、第3節で政治関心度とその規定要因について考察し、第4節で全体のまとめを行う。

2. 東北大生における開放性と人権意識の関連

2.1 研究背景とリサーチクエスチョン

近年、世界的にも人権問題への関心は高まっており、それは日本でも同様である。しかし世界経済フォーラム(WEF)が発表した『世界ジェンダー・ギャップ報告書 2021』では日本は歴代ワースト2位の121位であったり、同性婚が認められた国(オランダ、ベルギーetc)がある一方で、いまだにLGBTQ+への理解が浅かったりと、セクシャルマイノリティという分野において日本の遅れは著しい。

本研究では若年層の中でも、セクシャルマイノリティの理解が比較的浸透している大学生を調査対象にし、彼らの人権に対する意識がどの程度であるかを調べる。また程度に差があった場合、どのような特性を持つものが人権意識を高く保持しているかについても考えていく。

2.2 先行研究

ジェンダーやセクシャル・マイノリティの人権意識に関する調査や研究はこれまでも数多く行われてきた。民間の調査では電通LGBTQ+調査2020が挙げられる。この調査ではいわゆる「ストレート」(性的なあり方が多数派の人たち)のセクシャル・マイノリティに対する意識を調査している。その中でクラスター分析を行い、6つの層に分けている。「知識ある他人事層」、すなわちセクシャル・マイノリティの知識はあるが、それほど関心を持っていない層が一番多いというこ

とを示したことが調査の成果であると言える。

研究機関における調査としては、須長らの研究（2020）が挙げられる。セクシュアル・マイノリティに対する近畿大学の学生の意識調査 2016 年度から 2018 年度の三年間に渡って行ったものである。この調査では、正しい知識を有している学生の割合が上昇傾向であることや、身近な同性愛者に対する嫌悪感の減少傾向が示されている。また、客観的知識量、嫌悪感、当事者との接触機会などの項目において、男女で有意差が示されたことも特筆に値する。

また、釜野(2017)では、家族・ジェンダー保守度（保守的な家族観、ジェンダー観を持っている割合）と同性愛・両性愛フォビア度を規定する要因として、「性別、年齢、同棲経験、政治意識、周りにセクシュアル・マイノリティがいるか否か」が有意なものとして示されている。

ジェンダーに特化した意識調査に関しては、熊本(2016)がある。こちらは、近畿大学の学生に対する 2010 年と 2016 年に行われた意識調査についてまとめられている。ジェンダーを肯定する意識の減少などが示されている一方で、差別・条約・法律に関する学習経験が減少していることを問題点として取り上げられている。

2.3 仮説

仮説 1：開放性が高い人は（セクシャリティ・ジェンダーに関する）人権意識が高い

仮説 2：開放性が高い人は（セクシャリティ・ジェンダーに関する）人権の知識を多く持っている

先行研究では、セクシャリティ・ジェンダーに関する人権意識や知識について、性別、年齢、同棲経験、政治意識、性的マイノリティ当事者との接触経験の有無などが影響を及ぼすことを示している。一方で、個人の性格特性と人権に関する意識や知識の関連性はあまり調べられていない。そこで個人の性格特性として、心理学で用いられるビッグファイブと言われる性格の五因子のうち「開放性」を選び、その「開放性」と人権意識や知識との関連性を分析することにした。

「開放性」とは個人の認知的柔軟性や探求心を表す性格指標である。(Barford, Kate A., and Luke D. Smillie, 2016) 個人の性格特性として「開放性」を選んだ理由は接触経験と寛容度の間に関連性があることが先行研究から分かっているので、そもそも未知のものを受け入れやすい性格特性がある人のほうが、人権に対する意識が高いのではないかと推測した。

2.4 分析方法

開放性（接近, 柔軟性, 需要）のテスト項目の作成。開放性に関する具体的な行動や意識のあり方を表現すると思われるものを西川（1992）の計 50 項目の開放性尺度から、本研究の意義と特に一致すると考えるものを 5 つ選択した。回答形式は 3 つの選択肢方式を取り、回答は、はい 2 点、どちらでもない 1 点、いいえ 0 点（逆転項目の場合、はい 0 点、どちらでもない 1 点、いい

え 2 点) と得点化し、その合計をテスト得点とした。さらに得点の解釈がしやすいようにテスト得点を 5 点満点に調整した。

ジェンダー・セクシャリティに関する客観的知識を測る項目を作成した。前半 3 問はセクシャリティに関する質問、後半 3 問はジェンダーに関する質問とした。セクシャリティに関しては須長ら (2020) を参考に、ジェンダーに関する質問は時事的に取り上げられやすい事柄を中心に質問を設定した。回答形式は 2 つの選択肢方式を取り、質問文で示されている客観的知識が正しい場合、正しい 1 点、正しくない 0 点、客観的知識が正しくない場合、正しい 0 点、正しくない 1 点と得点化し、その合計をテスト得点とした。q37_1、q37_3、q37_4、q37_5、q37_6 が客観的に正しいとされる知識、q37_2 が客観的に正しくないとされる知識である。

ジェンダー・セクシャリティに関する人権意識を測る項目を作成した。前半 2 問はセクシャリティに関する質問、後半 3 問はジェンダーに関する質問とした。セクシャリティに関しては須長ら (2020) を参考に、ジェンダーに関する質問は時事的に取り上げられやすい項目及び去年度の調査の質問項目を参考に作成した。回答形式は 5 つの選択肢方式を取り、そう思う 1 点、どちらかといえばそう思わない 2 点、どちらともいえない 3 点、どちらかといえばそう思わない 4 点、そう思わない 5 点と (q38_4 のみ逆の配点にしている) 得点化し、その合計をテスト得点とした。

2.5 分析結果

まず開放性の各項目への回答傾向を検討した。一貫性の程度を Cronbach の α 係数で測ったところ .395 と低い値が得られた。表 1 では選択した 5 項目と各項目のテスト得点 (当該項目の得点を除いたもの) との相関係数を示したものである。いずれの項目も相関係数が 0.2 前後と信頼性が低いという結果が出た。これは回答者の負担の大きさが影響していると考えられる。熊谷ら (2012) によるとビックファイブ尺度の項目といった考えて答える必要のあるものについて、質問項目数の軽減が回答者の負担軽減に大きく寄与し、データの質の向上にもつながると考察している。本研究ではすでに他の尺度や実験課題などが併用されており、回答者の負担が大きかったと考えられる。

表 1 : 開放性に関する質問項目と相関係数

item	corrected item-total correlation
1 気ままで風変わりな人といると不愉快になる	0.22
2 常々目新しい方法よりも熟達した方法で物事を行うのが好きである	0.17
3 問題を解決するときはずっと確実なものを好む	0.17
4 何をするときもいつも確実なものを好む	0.27
5 議論は早く終わらせたいと思う方だ	0.18

続いて人権知識と意識の回答傾向について確認すると、知識は 3 問目を除き正答者の数が 80%

を超えており高い正答率を示した。意識については α 係数が 0.523 となり、先ほどと同じように選択した 6 項目と各項目の相関関係を出したところ、低い相関関係が示された。

表 2：人権知識と正答率

item	正答率
q37_1 LGBTには含まれないセクシャルマイノリティの人達がいる	95.65%
q37_2 バイセクシャルとは同性を好きになる人たちの総称である	81.30%
q37_3 日本では一定の条件のもと戸籍上の性別を変更することができる	75.65%
q37_4 衆議院議員に占める女性の割合は20%を下回る	91.70%
q37_5 アファーマティブアクションとは、社会的弱者の権利を保障するために積極的に格差を是正していくことである	82.38%
q37_6 MeToo運動とは性被害やセクハラ被害を告発し、人権意識の啓発を行う社会運動である	87.67%

表 3 では選択した 5 項目と各項目のテスト得点（当該項目の得点を除いたもの）との相関係数を示したものである。q38_2 においては相関係数が 0.43 と少し高い値が出たが、q38_2 を除く項目において相関係数が 0.2 前後と信頼性が低いという結果が出た。

表 3：人権意識と相関係数

item	corrected item-total correlation
q38_1 同性愛者に恋愛感情を持たれるのは嫌だ	0.28
q38_2 企業は利潤が第一なので、セクシャルマイノリティの雇用に必ずしも積極的になる必要はない	0.43
q38_3 男女共同参画社会は実現してきている	0.28
q38_4 選挙にいてクォータ制（女性議員を優先して当選させる枠のこと）を実現するべきである	0.21
q38_5 男は外で働き、女は家庭を守るべきだ	0.27

図 1 では q38 の人権意識の設問に関して、各項目ごとの回答の割合を示している。q38_1, q38_2 の性的マイノリティに関する人権意識に関する項目では、「そう思わない」と「どちらかといえばそう思わない」を合わせた割合、すなわち肯定的な意識を持つ人がそれぞれ 5 割弱、5 割強と比較的高い値を示している。q38_3 の男女共同参画社会については、「そう思わない」と「どちらかといえばそう思わない」を合わせた割合が半数以上を超えている。q38_4 のクォータ制の是非については、「そう思わない」と「どちらかといえばそう思わない」を合わせた割合が半数以上を超えている。q38_5 の性別役割分業意識に関しては、「そう思わない」が 7 割を超えている。

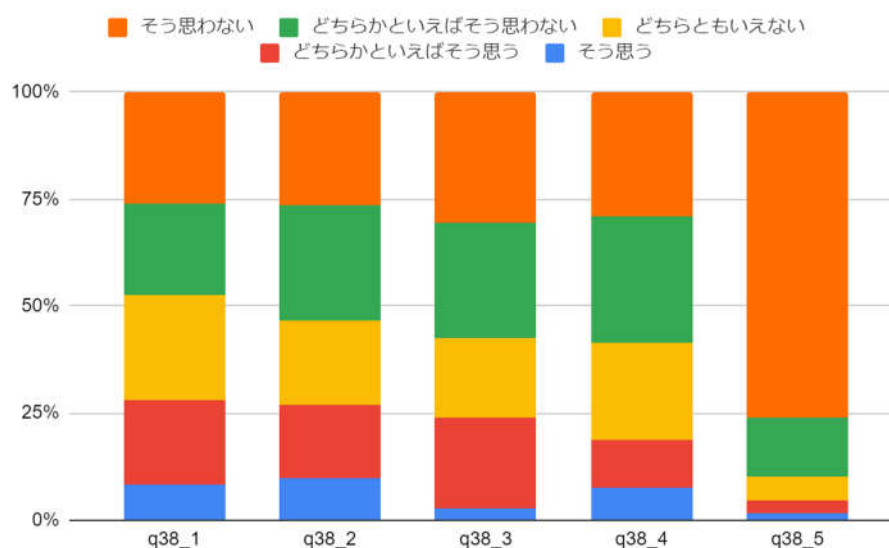


図 1：人権意識の設問における回答の割合

2.6 考察と推論

本調査では、独立変数として採用した「開放性」の項目の一致度が低かったため、分析に用いることができなかった。考えられる理由としては、「開放性」の各項目が一般に測った場合は一致度が高くなるのに対して、今回対象とした東北大生の集団に関してはそれが当てはまらなかったというものである。また、他の尺度や質問項目の多さから、回答者に過度な負担がかかっていた可能性がある。今後はその点を考慮に入れて質問項目の選定を進める必要がある。

したがって仮説を検証することはできなかったが、一つ一つの項目の結果を元に考察をすすめる。

一つ目は人権に関する客観的知識の正答率 (q37)についてである。これは q37_3 を除き、各項目の正答率が 8 割を超えている。また一番低かった q37_3 に関しても正答率が 75.65% である。単純には比較できないが、須長らの研究(2020) で実施された近畿大学の学生に対する意識調査で、「日本では戸籍上の性別を変えることができる」という項目の正答率が 56.07%であったことを考えると、客観的知識を身に付けた学生が本調査では比較的多かったと言える。

二つ目は人権意識に関する項目 (q38) についてである。性的マイノリティに関する人権意識を尋ねた項目 (q38_1,q38_2)に関しては、それぞれおよそ 5 割が人権を守ることに對して肯定的な意識を持っていることが窺える。しかし単純比較はできないが、須長らの研究(2020)で「同性に恋愛感情を持たれるのは嫌だ」に対して、「あまり当てはまらない」「当てはまらない」と答えた割合が約 67%であったことを考えると、やや低い数値であるとも言える。また、男女共同参画社会が実現してきていないと答える割合(q38_3)も 5 割を超えて

おり、男女平等が進んでいない現状を認識している人が多数いることが分かる。しかしながらクオータ制の是非(q38_4)については、半数以上が否定的な意見を持っている。このことから、人権意識が高くても、具体的な制度としてのクオータ制に否定的な人が多く見られるということが分かる。最後に、性別役割分業意識を尋ねた項目(q38_5)については、性別役割分業意識に対する否定的な割合が 8 割を超えていた。また、去年度の実習において「賛成」と答えた割合が 2.9%だったのに対し今年度の実習で「そう思う」と答えた割合は 1.5%、去年度の実習において「反対」と答えた割合が 47.0%だったのに対し今年度の実習で「そう思わない」と答えた割合は 76.0%であった。単純比較はできないが、このことから、性別役割分業意識に対する否定的な人の割合が増えていることが窺える。これは、直前にジェンダーやセクシャリティに関する質問を尋ねているので、文脈効果により否定的な回答が増えている可能性を否定できない。

個人の性格特性と人権意識との関連性は分析できなかったが、以上の結果から東北大生のジェンダー・セクシャリティに対する一定の意識の高さを示せたことは、本調査における一定の成果だと言えるだろう。今後の課題は、「開放性」に変わる性格指標を検討することや、回答者ができるだけ負担を感じないように質問項目を選定することである。

3. 政治的有効性感覚と政治信頼感が SNS 上での政治参加に及ぼす影響

3.1 研究の目的

社会における政治参加に影響する要因としては、大別して構造的な要素と個人的な要素が挙げられる。前者はある社会の近代化が進んだ程度や政治体制などを、後者は個人が有する認知的な能力、動機的な要因などを指す(Verba & Nie, 1972)。特に、「個人が有している、政治体制に及ぼせる自分の能力への信頼」と定義される政治的有効性感覚(political efficacy)は、一般的に政治参加に影響を及ぼす個人的な要素を包括的に網羅する概念として把握されている。

パブリック・スフィア(public sphere)と熟議民主主義(deliberate democracy)の論題は、コミュニケーション研究において重要な研究関心の一つになっており、インターネットの登場は、そうした議論をより進める可能性を示唆してきた。特に、匿名性が保障されるオンライン環境の特性上、オフラインでの伝統的な政治参加から疎外されてきた少数意見や社会的な弱者にとっても、インターネットは自らの意見を発信できる場として期待されてきた。若年層の政治関心度と参加が低調傾向になっているという問題は数多くの国家で議論されているが、特に日本では公的な場で意見の表出を憚る情緒とともに若年層においてデモや選挙といった伝統的な政治参加の程度が低いと指摘する観点が多く存在する。そのため、日本の大学生が、SNS というネット上の環境下ではオフラインでの伝統的な政治参加と比べて違う政治参加の傾向が見せるのかを「政治的有効性感覚」と「政治信頼感」という古典的な概念を適用して分析し、確認することが本研究の主な目的である。本研究では、インターネ

ット時代に現れる SNS 上での大学生の政治参加が、政治的有効性感覚と政治信頼感によってどのような影響を受けているのかを考察する。

3.2 先行研究

政治的有効性感覚は「自分の政治的な行動が有している、もしくは有することができる、政治的な過程に及ぼす影響力についての個人の感情」を意味する(Campbell, Gurin & Miller, 1954, p.187)。つまり、政治的有効性感覚が高い人は、「自分たちが政治に働きかければ、それだけの効果がある」と考える傾向がある。一般的に政治的有効性感覚の程度は、高い教育水準と経済力を有する専門職の男性、政治的な領域と既につながっている人々のほうが高いと指摘される(Madsen, 1987; Niemi, Craig & Mattei, 1991)。

Siegelman と Feldman は、伝統的な政治参加(選挙やオフラインでの選挙運動など)は、高い政治的有効性感覚とともに高い政治信頼感(political trust, 現在の政治システムについて持っている一般的な信頼)を有するグループでよく見られると指摘している(Siegelman & Feldman, 1983)が、非伝統的な参加(オンラインでの参加など)について、当時の研究ではその可能性を制限的に示す程度で留まったという限界が存在する。そのため、Siegelman と Feldman 以降の研究ではオンラインでの政治参加を促す要因を分析する必要性が提示され、様々な分析が行われてきた。その中で韓国の大学生を対象としたハ・ジョンウォンの 2006 年の研究では政治的有効性感覚と政治信頼感と大学生の政治参加を分析し、政治的有効性感覚は大学生の政治参加(オフライン&オンラインの両方)を促す主要な要因として確認されたが、政治信頼感とはオンライン&オンラインでの政治参加に独立的な影響力を持たないという結果が得られた(ハ・ジョンウォン, 2006)。政治的有効性感覚は個人的な要素が包括的に含まれている概念であるため、調査対象によって政治参加との関連性では差がみられる可能性がある。また、2000 年代と比べて 2020 年代は SNS の普及とともに、個人の社会参加がより活発になっている時代でもある。以上のような背景から考えると、日本の大学生、その中でも東北大生という集団を対象として分析を行えば先行研究とは違う結果が得られる可能性が存在する。そのため、本研究では東北大生の政治的有効性感覚と政治信頼感、政治参加の程度を調べ、政治的有効性感覚と政治信頼感が SNS 上での政治参加に有意義な影響を及ぼしているか否かを分析する。また、Conway は様々な政治参加の概念を「能動的(active)」、「受動的(passive)」な参加に分類した(Conway, 1991, p.13)。能動的な参加は目的志向的な行動、受動的な参加は単に行事に参加したり諸現象に注目することを意味する。Conway は当時メディアを通じての情報探索も「参加」としてみなしていたため、この分析では大学生の SNS での「政治的な行動」を、自ら情報を発信する「積極的」な行動と、情報の探索や共感といった「消極的」な行動に分類して考察した。

3.3 変数の測定

独立変数としては「政治的有効性感覚」と「政治信頼感」を設定し、それぞれが大学生の SNS 上での政治参加を促す効果があるか否かを分析する。

仮説 1：政治的有効性感覚が高いほど、大学生の SNS 上での政治参加を促す

仮説 2：政治信頼感が高いほど、大学生の SNS 上での政治参加を促す

また、その参加が消極的なものか(同意を示したり、諸現象に注目する程度)、積極的なものか(目的志向的な行動)によって分類し、それぞれの参加に及ぼす効果を確認する。

「政治的有効性感覚」と「政治信頼感」は、ハ・ジョンウォンの 2006 年の研究で利用された設問の一部を利用して調べた。両方とも 5 段階のリッカート尺度を利用した。回答は、そう思う 4 点、どちらかというと思う 3 点、どちらともいえない 2 点、どちらかというと思うわない 1 点、そう思わない 0 点 (逆転項目の場合、そう思う 0 点、どちらかというと思う 1 点、どちらともいえない 2 点、どちらかというと思うわない 3 点、そう思わない 4 点) と得点化し、その合計を得点とした。表 4 は質問項目と一貫性の程度を示す Cronbach の α 係数である。選択した 3 項目と各項目のテスト得点 (当該項目の得点を除いたもの) との相関係数を示したものである。また表 5 はそれぞれの回答の割合である。

表 4：政治的有効性感覚と一貫性の程度

item	corrected item-total correlation
q40_1 自分は人並みに日本の重要な社会問題や社会現象について十分に理解している	0.52
q40_2 人と政治や社会問題に関する話をするとき、自分なりの判断や主観を持ってないときがある	0.41
q40_3 現政権をリードしているだいたい自分は政治や社会の諸問題の解決に向けて直接参加してもいいほど、資格と能力を十分に有している	0.45

表 5：政治的有効感覚と回答割合

item	そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらとも いえない	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
q40_1 自分は人並みに日本の重要な社会問題や政治現象について十分に理解している	0.1	0.29	0.24	0.25	0.11
q40_2 人と政治や社会問題に関する話をするとき、自分なりの判断や主観を持ってないときがある	0.21	0.31	0.15	0.23	0.1
q40_3 自分は政治や社会の諸問題の解決に向けて直接参加しても良いほど、資格と能力を十分に有している	0.3	0.36	0.22	0.09	0.04

また、現政権と政治家に持つ一般的な信頼である「政治信頼感」を 4 段階の尺度で調べた。設定は政治的有効性感覚と同様である。

表 6：政治信頼感と一貫性の程度

item	corrected item-total correlation
q41_1 現政権は、自らの利害関係によって国家を運営しているように思える。	0.47
q41_2 現政権の指導者たちがメディアを通じて国民に言っていることは、 だいたい真実だと受け入れてよい。	0.43
q41_3 現政権をリードしているだいたいの人々は、日本が直面している問題 を解決できるほど素質を備えている。	0.48

表 7：政治的信頼感と回答割合

item	そう思う	どちらかといえ そう思う	どちらとも いえない	どちらかといえ そう思わない	そう思わない
q41_1 現政権は、自らの利害関係によって国家を運営しているように思える。	0.194	0.357	0.286	0.138	0.026
q41_2 現政権の指導者たちがメディアを通じて国民に言っていることは、 だいたい真実だと受け入れてよい。	0.231	0.379	0.23	0.144	0.015
q41_3 現政権をリードしているだいたいの人々は、日本が直面している問題 を解決できるほど素質を備えている。	0.214	0.306	0.337	0.128	0.015

政治的有効性感覚、政治的信頼感の Cronbach の α 係数からそれぞれを合計化して得点化することに問題はないと考えた。

また、SNS 上での消極的&積極的な参加の程度を次の 4 段階の尺度で調べた。回答は、よくある、たまにある、あまりない、まったくないである。表 8 は質問項目回答割合である。さらに消極的参加と積極的参加を上と同様に得点化し、合計をだしたものを政治参加として変数化した。積極的参加と消極的参加の相関係数は 0.61 だったので、政治参加として同じ概念を測れていると解釈した。

表 8：政治参加(消極的)**：“q42”と政治参加(積極的)**：“q44”の回答割合

item	よくある	たまにある	あまりない	まったくない
q42 あなたはふだん、インターネットやSNS上で社会の諸問題に関する発言やアカウントに対して、フォローや「いいね」をすることがありますか。	0.03	0.18	0.21	0.55
q44 あなたはふだん、社会の諸問題について自らSNSで投稿をするなど、他人に情報を発信することがありますか(Twitterのリツイートも含みます)。	0.01	0.06	0.15	0.74

3.4 政治的有効性感覚と SNS 上での政治参加

表 9：政治的有効性感覚と SNS 上での政治参加の単回帰分析

政治的有効性感覚と SNS 上での政治参加		
	B	S.E.
切片	1.094 ***	0.194
政治的有効性感覚	0.372 ***	0.065
調整済み R2	0.143	
N	190	

†p < 0.1, *p < 0.05, **p < 0.01, ***p < 0.001

以上のようなデータをもとに、政治的有効性感覚を独立変数、SNS 上での政治参加を従属変数とした単回帰分析を行った。結果上、0.1%水準で有意で、政治的有効性感覚が高ければ高いほど、参加を促す。参加を消極的な参加と積極的な参加に分けても分析する。

研究仮説 1 - 1：政治的有効性感覚が高いほど、大学生の SNS 上での消極的な政治参加を促す

研究仮説 1 - 2：政治的有効性感覚が高いほど、大学生の SNS 上での積極的な政治参加を促す

表 10：政治的有効性感覚と SNS 上での積極的な政治参加の単回帰分析

政治的有効性感覚と SNS 上での政治参加(積極的)		
	B	S.E.
切片	0.614 ***	0.131
政治的有効性感覚	0.249 ***	0.044
調整済み R2	0.140	
N	190	

†p < 0.1, *p < 0.05, **p < 0.01, ***p < 0.001

表 11：政治的有効感覚と SNS 上での消極的な政治参加の単回帰分析

政治的有効感覚と SNS 上での政治参加(消極的)		
	B	S.E.
切片	0.923 ***	0.184
政治的有効感覚	0.267 ***	0.062
調整済みR2	0.084	
N	192	

†p < 0.1, *p < 0.05, **p < 0.01, ***p < 0.001

消極的な参加&積極的な参加、両方を促す効果があることが確認された。

3.5 政治信頼感と SNS 上での政治参加

続いて、政治信頼感が SNS 上での政治参加に影響を及ぼすか否か、政治信頼感を独立変数、政治参加を従属変数とした単回帰分析で分析する。

表 12：政治的信頼感と SNS 上での政治参加の単回帰分析

政治的信頼感と SNS 上での政治参加		
	B	S.E.
切片	2.362 ***	0.218
政治的信頼感	-0.086	0.080
調整済みR2	0.001	
N	192	

†p < 0.1, *p < 0.05, **p < 0.01, ***p < 0.001

結果上、統計的に有意義な結果は得られなかった。このような結果は、政治信頼感は独立的には政治参加に有意義な影響を及ぼすものではない可能性を示唆する。消極的な参加、積極的な参加に分けても効果を分析してみる。

研究仮説 2-1：政治信頼感が高いほど、大学生の SNS 上での消極的な政治参加を促す

研究仮説 2-2：政治信頼感が高いほど、大学生の SNS 上での積極的な政治参加を促す

表 13：政治的信頼感と SNS 上での積極的政治参加の単回帰分析

政治信頼感とSNS上での積極的な政治参加		
	B	S.E.
切片	1.377 ***	0.148
政治信頼感	-0.024	0.055
調整済みR2	-0.004	
N	192	
tp < 0.1, *p < 0.05, **p < 0.01, ***p < 0.001		

表 14：政治的信頼感と SNS 上での消極的政治参加の単回帰分析

政治信頼感とSNS上での消極的な政治参加		
	B	S.E.
切片	1.919 ***	0.202
政治信頼感	-0.094	0.075
調整済みR2	0.003	
N	193	
†p < 0.1, *p < 0.05, **p < 0.01, ***p < 0.001		

両方とも、統計的に有意な結果は得られなかった。

3.6 政治的有効性感覚を高める要因

i. 学習意欲と政治的有効性感覚

政治的有効性感覚と他の変数との関係を分析する。政治的有効性感覚が学習によって習得されるのであれば、次のような仮説を立てることができるであろう。

学習意欲については以下のような項目で得点化した。信頼性係数は 0.76 となっていたので、同じ概念を測っているととらえられる。

表 15：学習意欲についての質問項目

item
レポートや課題はただこなしている
授業には意欲的に参加している
単位さえ取ればよいと考えて授業に参加している
自分は学習意欲が高い方だと思う
勉強が好きである

研究仮説 3：学習意欲(授業への参加度)が高いほど、政治的有効性感覚も高い。

表 16：学習意欲と政治的有効性感覚の単回帰分析

	学習意欲と政治の有効性感覚	
	B	S.E.
切片	2.061 ***	0.242
学習意欲	0.253 **	0.077
調整済みR2	0.048	
N	193	
†p < 0.1, *p < 0.05, **p < 0.01, ***p < 0.001		

有意水準 1%で有意で、授業意欲と政治的有効性感覚は有意義な関係がある。つまり、普段授業に意欲的に参加すればすればほど政治的有効性感覚が高くなる傾向がある。学習意欲を独立的な変数として政治参加との関連を分析してみる。

研究仮説 3-1：学習意欲が高いほど、SNS 上での政治参加が多い。

表 17：学習意欲と SNS 上での政治参加の単回帰分析

	学習意欲とSNS上での政治参加	
	B	S.E.
切片	2.023 ***	0.240
学習意欲	0.041	0.076
調整済みR2	-0.004	
N	193	
tp < 0.1, *p < 0.05, **p < 0.01, ***p < 0.001		

授業意欲自体が政治参加に直接つながるものではなかった。

ii. 性別と政治的有効性感覚

性別間に政治的有効性感覚の差が存在するかを分析した。基準カテゴリーは女性となっている。

研究仮説 4：性別によって政治的有効性感覚の差が存在する。

表 18：性別と政治的有効感覚の単回帰分析

	性別と政治的有効性感覚	
	B	S.E.
切片	2.540 ***	0.113
性別	0.441 **	0.142
調整済みR2	0.042	
N	193	

†p < 0.1, *p < 0.05, **p < 0.01, ***p < 0.001

有意水準 1%で、性別間には政治的有効性感覚の有意義な差がある。女性の方が有効性感覚が低い。続いて、それぞれの性別を独立変数とした男女グループ別の回帰分析を行ってみる。
 研究仮説 4 - 1：男性の場合、政治的有効性感覚が高いほど SNS 上での政治参加が多い。
 研究仮説 4 - 2：女性の場合、政治的有効性感覚が高いほど SNS 上での政治参加が多い。

表 19：男性における政治的有効感覚と政治参加のグループ別回帰分析

	政治的有効性感覚と政治参加(男性のみ)	
	B	S.E.
切片	0.784 **	0.245
政治的有効性感覚	0.449 ***	0.077
調整済みR2	0.211	
N	121	

†p < 0.1, *p < 0.05, **p < 0.01, ***p < 0.001

表 20：女性における政治的有効感覚と政治参加のグループ別回帰分析

	政治的有効性感覚と政治参加(女性のみ)	
	B	S.E.
切片	1.533 ***	0.342
政治的有効性感覚	0.251	0.130
調整済みR2	0.039	
N	67	

†p < 0.1, *p < 0.05, **p < 0.01, ***p < 0.001

有意水準 0.1%で男性グループでは政治的有効性感覚が政治参加を促す結果があることが確認されたが、女性の場合、政治的有効性感覚と参加との関係が統計的に有意ではなかった。

男性とは違って、女性は政治的有効性感覚が高くても、SNS 上での参加行動には繋がっていないことが確認された。

iii. 所属学部と政治的有効性感覚

所属学部によって政治的有効性感覚に差があるかを分析する。所属学部は文系(文・経)と理系(理・工)に分類し、同じく政治的有効性感覚が SNS 上での政治参加に及ぼす影響を分析する。

研究仮説 5- 1 : 文系の学生において、政治的有効性感覚は SNS 上での政治参加を促す。

研究仮説 5- 2 : 理系の学生において、政治的有効性感覚は SNS 上での政治参加を促す。

表 21 : 文系における政治的有効感覚と政治参加のグループ別回帰分析

政治的有効性感覚と政治参加(文系のみ)		
	B	S.E.
切片	1.193 ***	0.257
政治的有効性感覚	0.384 ***	0.086
調整済みR2	0.143	
N	113	
†p < 0.1, *p < 0.05, **p < 0.01, ***p < 0.001		

表 22 : 理系における政治的有効感覚と政治参加のグループ別回帰分析

政治的有効性感覚と政治参加(理系のみ)		
	B	S.E.
切片	0.982 **	0.322
政治的有効性感覚	0.336 **	0.112
調整済みR2	0.110	
N	63	
†p < 0.1, *p < 0.05, **p < 0.01, ***p < 0.001		

それぞれ有意水準 0.1%と 1%で、両方とも政治的有効性感覚が政治参加を促す効果があると確認された。つまり、学部(文系&理系)によって差はなく、両方とも有意な結果となっている。

3.5 分析結果

政治的有効性感覚と政治信頼感という 2 つの変数がそれぞれ SNS 上での政治参加に及ぼ

す相互作用の効果を分析した結果、政治的有効性感覚が高い人は SNS 上での政治参加度が高く、政治的有効性感覚は消極的&積極的な政治参加に全部有意義な影響を及ぼすことが確認された。一方、政治信頼感は SNS 上での政治参加に独立的に有意義な影響力を持たなかった。

また、政治的有効性感覚との関係があると考えられる要素として、「学習意欲(授業への参加度)」、「性別」、「所属学部」についても分析を行った。学習意欲の場合、有意水準 1% で政治的有効性感覚との有意義な相関関係を持つことが確認されたが、学習意欲自体は独立的に政治参加に影響を与える変数ではなかった。性別の場合、男性と女性の政治的有効性感覚には有意義な差があることが確認された。男性に比べて女性の方が政治的有効性感覚が低く、女性のグループでは高い政治的有効性感覚と政治参加との有意義な関係がみられなかった。こうした結果は、一般的に政治的有効性感覚が政治参加を促すという傾向性に反するもので、女性への社会的なプレッシャーなどが作用したと考えられる。最後に、所属学部を文系(文・経)&理系(理・工)に分けて政治的有効性感覚と政治参加との関連を分析した結果、所属学部による差は見られず、政治的有効性感覚が積極的&消極的政治参加を全部促す効果があることが確認された。

3.6 考察と推論

本研究においても、政治的有効性感覚は政治参加を促す重要な要因として働いていることが確認された。しかし、政治信頼感は独立的に政治参加を促す効果はみられなかった。本研究は韓国、アメリカなどで行われた先行研究をもとに、日本、なかでも東北大学の学部生 & 大学院生という下位集団を対象として政治的有効性感覚と政治信頼感がオンラインでの政治参加に及ぼす効果を確認しようとした点で意味を持つ。インターネットが既存の政治参加にどのような影響を与えるかについては、ネット上の環境に慣れて、活用できる既得権に参加が集中する傾向を強化するという強化的観点(reinforcement perspective)と、疎外されてきた構成員の参加を促すという拡張的観点(expansionist perspective)が対立しているが、本研究の結果では政治的有効性感覚と政治参加の程度で性別間の差が見られるなど、日本の大学生にとって SNS とインターネットという環境自体が参加を促す効果があるという明確な根拠は示されなかった。

一方、東北大学の一部の学部を調査対象とし、より多様な媒介変数を考慮することができなかったという点では限界を持つ。また、SNS というオンライン上での政治参加を考察の対象としているため、オフラインで行われる政治活動にオンラインでの参加経験が及ぼす影響などが確認できず、分析においてより立体的なモデルの設定が求められる。

したがって、今後の研究では、イデオロギー的な性向や政治知識など、様々な変数との関係を含めてより包括的な政治参加の構造的なモデルを設定する必要性が示唆される。

4. まとめ

本稿ではジェンダー意識や、政治関心が比較的高いと考えられる東北大生を調査対象にすることで、さらに高い関心を引き出す要因の手がかりをつかめるのではないかという考察のもと調査、分析を行った。

第2節より実際に東北大生のジェンダー意識や知識は高い割合は見る事ができた。しかし調査設計の不備により、その規定要因を把握することはかなわなかった。したがってどのような要因が人権意識、知識を高めるかを把握することは今後の課題になる。

第3節については、政治関心を高める要因として政治的有効性感覚があげられ、有意な結果となったため、政治的有効度を高める、つまり政治についての知識を増やすことが政治参加度、関心度を高めるということにつながるということが分かった。しかし特筆すべきことは女性においては政治的有効度と政治参加度に関係がなかったということである。これは現在の日本が抱えている政界での女性の割合の低さという問題が影響していることが考えられる。このような女性の政治に対する”窮屈さ”は比較的反リベラルな考えを持つ大学でもみることができた。

引用文献

- Barford, K. A., and Smillie, L. D. .2016, "Openness and other Big Five traits in relation to dispositional mixed emotions," *Personality and individual differences*, 102:118-122.
- Campbell, A., Guirin, G., and Miller, W, 1954, *The voter decides*, Evanston, IL.: Row, Peterson.
- Conway, M. M. (1991). *Political participation in the United States* (2nd ed.) Washington, DC: CQ press.
- 電通ダイバーシティラボ, 2020, 「LGBTQ+調査 2020」『Global Gender Gap Report 2021』
http://www3.weforum.org/docs/WEF_GGGR_2021.pdf (閲覧日: 2021/06/24)
- 하종원(ハ・ジョンウオン), 2006, "대학생의 인터넷 정치참여에 관한 연구(大学生のインターネット政治参加に関する研究)", 韓国言論情報学報, 369-405.
- 釜野さおり, 2017, 「同性愛・両性愛についての意識と家族・ジェンダーについての意識の規定要因——性的マイノリティについての意識:2015 年全国調査から——」『家族社会学研究』 29(2): 200-215.
- 並川努・谷伊織・脇田貴文・熊谷龍一・中根愛・野口裕之, 2012, 「Big five 尺度短縮形の開発と信頼性と妥当性の検討」『心理学研究』 83(2): 91-99.
- 熊本理抄, 2017, 「IV. 調査結果の分析: 近畿大学学生のジェンダー意識に関する考察,『近畿大学学生人権意識調査報告書——ジェンダー編』 61-88.
- Madsen, Douglas, 1987, "Political self-efficacy tested", *American Political Science Review*, 81(2):571-581.

- Niemi, R. G., Craig, S. G., and Mattei, F., 1991, "Measuring internal political efficacy in the 1988 National Election Study", *The American Political Science Review*, 85(4):1407-1413.
- 西川隆蔵, 1992, 「パーソナリティの開放性-閉鎖性に関する研究 精神健康性, 創造性, 自己意識との関係について」『教育心理学研究』 40(1):37-46.
- Sigelman L., Feldman S., 1983, "Efficacy, mistrust and political mobilization: A cross national analysis," *In Comparative Political Studies*, 16:118-143
- 須長史生・小倉浩・正木啓子・倉田知光・堀川浩之, 2020, 「性的マイノリティに対する大学生の意識と態度: 第 3 報—3 か年のアンケート調査のまとめと提言—」『昭和学士会雑誌』 80(5):396-421.
- Verba, S. and Nie, N. H., 1972, *Participation in America: Political democracy and social equality*, New York: Harper & Row.

東北大生の生活・友人形成と SNS 利用の関係

遊佐真・小田涼平

研究関心とリサーチクエスションの設定について

SNS（ソーシャルネットワーキングサービス）は大学生のコミュニケーションにおいて重要なツールである。特に 2020 年以降では、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、大学生同士の対面でのコミュニケーションが取りづらくなり、SNS を用いたコミュニケーションの割合が増えていると考えられる。

SNS は従来から、既存の友人関係の維持や深化を目的として使用されてきた。小寺敦之(2009)によれば、SNS の一種である mixi においては、特に「既存の関係の強化」に比重がおかれたコミュニケーションに流れている。また、SNS はその特性上、オンライン上で見知らぬ人々が交流することもできる。

その一方で、近年においては、SNS から現実の友人関係を形成するという例がしばしば見られる。このことは「オフ会」という単語が一般的になっていることから判断できる。具体的には、SNS 上で交流して仲良くなった後に、リアルで会うといったものである。そして、コロナウイルスの流行に伴い、友人形成の機会が減少した現在、このような友人形成のプロセスは大学生の友人形成において役立つ手段になりうる。

以上のことを踏まえ、SNS の利用方法が、東北大生の大学生活や友人形成にどのように影響を与えているかを調べることで、SNS の効果的な利用方法を知り、充実した大学生活や友人関係の構築に役立てられると考える。

1. 先行研究と仮説

1.1 先行研究

第 50 回大学生活実態調査(全国大学生活協同組合連合会, 2015)では、大学生活の充実していない学生は充実していると回答した学生に比べてスマートフォンの利用時間が 11.3 分長いという調査結果が指摘されている。しかし、この調査ではスマートフォンの具体的な利用内容やその割合については調べていない。大学生の SNS 利用と心理状態の関係を調べた調査には、佐柳信男・中村彩乃(2018)がある。この調査では心理的ウェルビーイングを人生に対する肯定的評価、孤独感、自己肯定感の三つの尺度を用いて測定しているが、大部分の SNS 利用指標とウェルビーイング指標は有意な関連がなく、有意及び有意傾向な SNS 利用指標はウェルビーイング指標に対して正の関連を持っているという結果だった。しかし、私たちの調査を行った 2021 年 6 月では、新型コロナウイルスの流行に伴う外出自粛により、対面授業の減少や部活動の規制など大学生が対面コミュニケーションを取りづらい状況が

続いている。そのため SNS を用いたコミュニケーションの割合が増え、SNS 利用と心理状態の関係に変化が起きていることが考えられる。

松尾豊・安田雪(2007)によれば、SNS を用いて関係維持を行う場合、SNS における規範に従うために負荷がかかる。これはすなわち、SNS 上においても現実社会での生活のように、ルールに従う必要があることを意味している。ゆえに、SNS を用いて友人形成を行う場合においても、ルールに従うという点においては同様に友人形成の能力が必要であると考えられる。

そして、友人形成のプロセスという共通性から、現実の友人形成においても、SNS 上での友人形成においても、必要な能力は同じものであると推測できる。したがって、個人が既に所持している友人形成能力が、SNS を介した友人形成のプロセスにおいても重要であると考えられる。さらに、この友人形成能力は、対面でのコミュニケーションによる友人形成が中心である高校以前の友人数によって判断できると考えられる。

また、申知元・潮村公弘(2019)によれば、Twitter の利用によって積極的、かつ気軽な友人関係の構築・維持ができると考えられる。ゆえに、Twitter は、SNS を介した友人形成のプロセスにおいて有効な SNS と考えられる。Twitter のフォロー数が多い人ほど、Twitter を介してより積極的に人々と繋がっているということが出来る。したがって、Twitter のフォロー数と SNS を介してできた友人の数の間に関係があると考えられる。

2. 仮説

これらの先行研究を踏まえ、以下の 3 つの仮説を立てた。

仮説 1 : SNS のチャット機能の使用時間が長い人ほど、生活の満足度が高い。

SNS を用いたコミュニケーションは、特に双方向的なものに注目し、チャット機能の使用時間によって測定する。また、SNS 利用に対する利用者の心理状態は、五段階で測定した生活満足度を用いて操作化する。

仮説 2 : 高校以前の友人が多い人ほど、SNS からつながった友人が多い。

個人がもともと所持している友人形成能力は、高校以前の友人数によって操作化する。また、SNS を介した友人形成能力は、SNS からつながった友人数によって操作化する。

仮説 3 : Twitter で個人アカウントのフォローが多い人ほど、SNS からつながった友人が多い。

Twitter の利用度合いは、Twitter の個人アカウントのフォロー数によって測定する。また、SNS を介した友人形成の積極性は、SNS からつながった友人数によって操作化する。

3. 変数の説明

性別

Q1「あなたの性別をお答えください（男性・女性・その他）」をもとに、カテゴリ変数を作成した。その際その他は欠損値として扱った。

チャットの使用時間

Q20「あなたはふだん、1日あたりどのくらいの時間、友人と SNS でメッセージのやり取り (LINE や Twitter の DM やリプライ) をしていますか。(まったくしていない・5分未満・5分~15分未満・15~30分未満・30分~1時間未満・1時間~2時間未満・2時間以上)」をもとに順序あるカテゴリ変数を作成した。質問の関係上、Q20で「まったくしていない」を選択した場合 Q21 を回答できないため、「まったくしていない」を欠損値として扱い、6つのカテゴリを持つ変数として作成した。回帰分析に用いる際には、それぞれのカテゴリを 0・2.5・10・22.5・45・90・150 に置き換えて変数を作成した。

チャットの内容

Q21「ふだん友人との SNS でのメッセージのやり取りにおいて、もっとも多い会話の内容は以下のうちどれですか。(事務連絡・遊びや飲み会の約束・愚痴や悩みごとの相談・近況報告・その他)」をもとにカテゴリ変数を作成した。

生活満足度

Q56「あなたは現在の生活に満足していますか」の回答（満足している・まあまあ満足している・どちらともいえない・少し不満である・大いに不満である）をもとに順序あるカテゴリ変数を作成した。

SNS を介してできた友人の数

Q19「あなたには SNS がきっかけで知り合い、実際に会ったことのある友人が何人いますか。」をもとに変数を作成した。なお、ここで「6人以上」は10人として扱った。

高校以前の友人の数

Q13「あなたには高校卒業以前にできて、今でも定期的に連絡を取り合っている友人が何人いますか。ここでの連絡を取るとは、グループでの会話も含めます。」をもとに変数を作成した。なお、ここでは各範囲の中央値を階級値として分析に用い、「30人以上」は35人として分析に用いた。

Twitter のフォロー数

Q18「Twitter を利用している方にうかがいます。あなたが Twitter でもっともよく使うアカウントでの、「個人アカウント」のフォロー数はいくつですか。ここでの「個人アカウント」は、公式アカウント(企業、有名人など)ではないアカウントのことを指します。」をもとに、変数を作成した。なお、「Twitter は利用していない」は NA とした。また、各範囲の中央値を階級値として分析に用いた。また、「500 人以上」は 525 人として分析に用いた。

東北大学に通っている高校以前の友人の数

Q14「あなたには、東北大学に通っている高校卒業以前の友人が何人いますか。」をもとに、変数を作成した。なお、「6 人以上 10 人未満」は 8 人、「10 人以上」は 15 人として分析に用いた。

4. 分析結果

4.1 記述統計

以下に記述統計を示す。

4.1.1 東北大生のチャットの使用状況

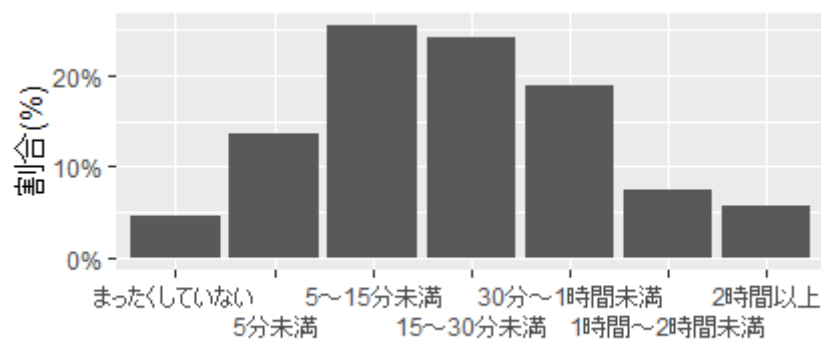


図 4.1.1 Q20 今セメスターにおける 1 日の平均 SNS メッセージやり取り時間

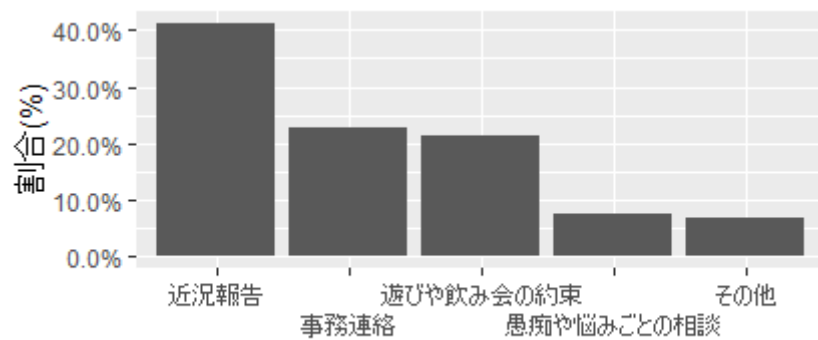


図 4.1.2 Q21SNS のメッセージのやり取りで最も多い内容

東北大生の一日のチャットの利用時間は、22.8%の「5～15 分未満」を頂点に山なりに分布していた。メッセージの主な内容としては「近況報告」が約 35%を占めており、その次に「事務報告」、「遊びや飲み会の約束」と続き、「愚痴や悩みごとの」相談が最も少なかった。「その他」の回答はそのほとんどが雑談、とりとめのない話という内容だった。

4.1.2 東北大生の生活満足度

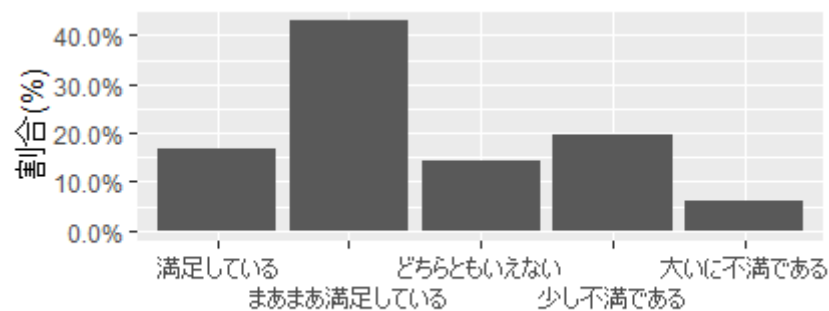


図 4.1.3 Q56 現在の生活に満足しているか

生活満足度について、東北大生の 58.4%は「満足している」「まあまあ満足している」という回答をしており、「大いに不満である」「少し不満である」と答えた生徒は全体の 25%であった。

4.1.3 東北大生の SNS と友人に関する状況

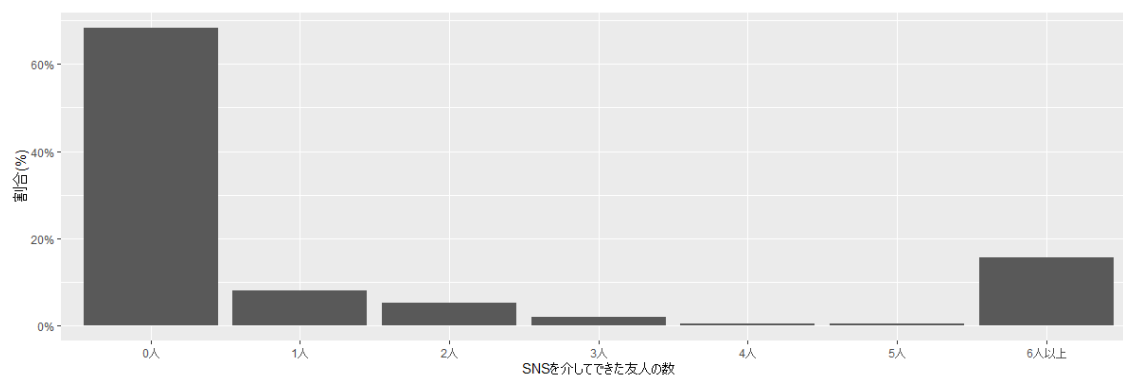


図 4.1.4 Q19 SNS を介してできた友人の数

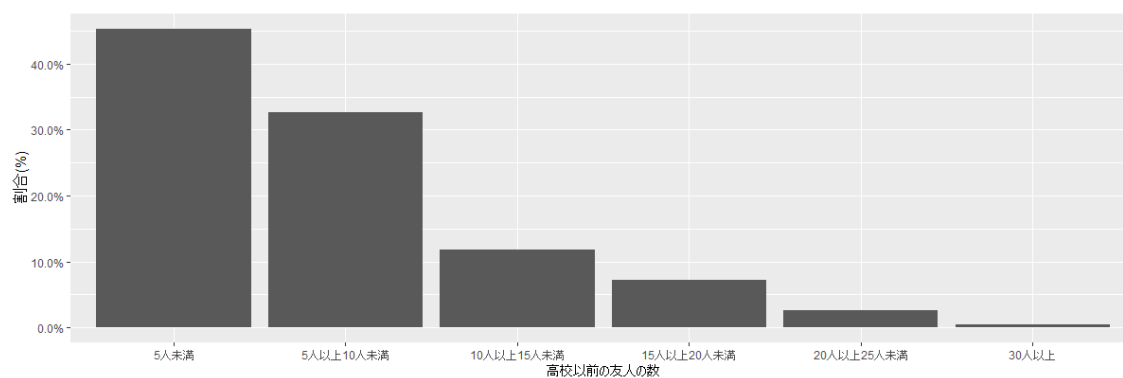


図 4.1.5 Q13 高校以前の友人の数

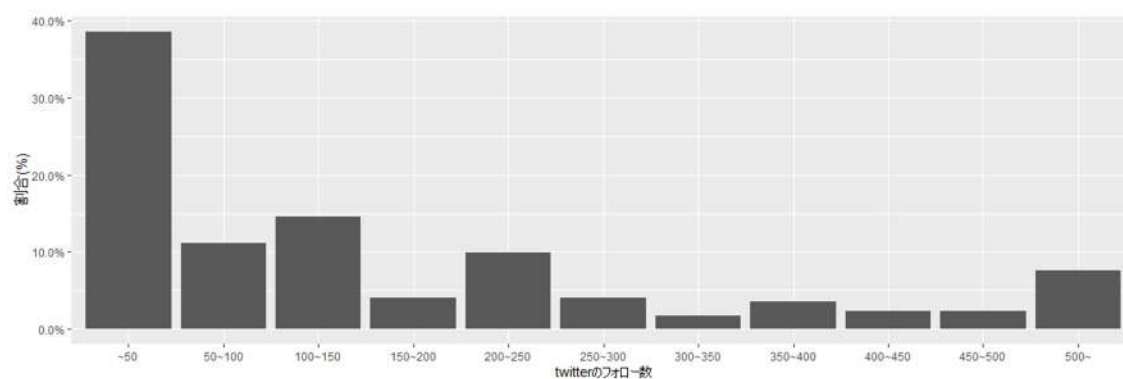


図 4.1.6 Q18 Twitter のフォロワー数

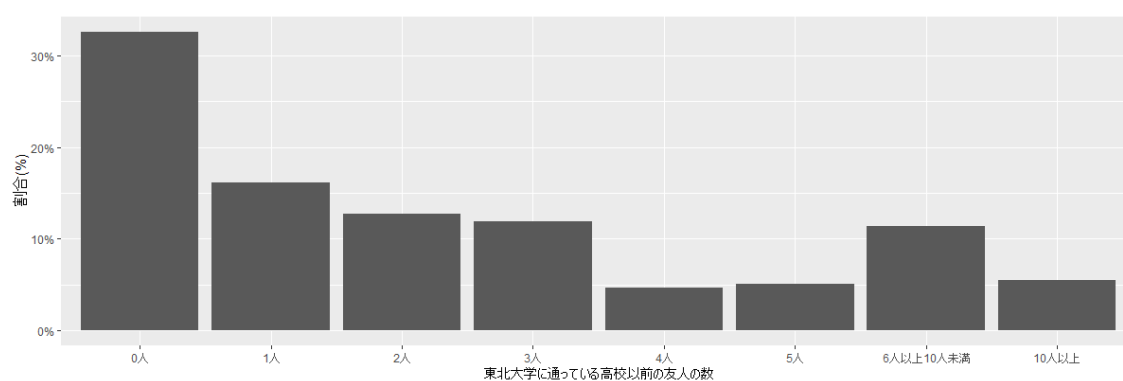


図 4.1.7 Q14 東北大学に通っている高校以前の友人の数

東北大生の約 30%は SNS を介して少なくとも 1 人以上の友人を作ったことがあった。また、高校以前の友人の数は 0~10 人が約 80%を占め、東北大学に通っている高校以前の友人の数では約 60%の東北大生において少なくとも 1 人以上いた。さらに、Twitter のフォロー数では、50 人未満が最も多い約 40%となった。

4.2 回帰分析

4.2.1 仮説 1

まず、生活満足度を従属変数、チャットの使用時間を独立変数とした順序ロジスティック回帰分析（モデル 1）と、そこに統制変数としてチャットでの会話内容を加えたもの（モデル 2）を行った結果を表 4.2.1 に示す。

表 4.2.1 生活満足度に関する順序ロジスティック回帰分析

	モデル1		モデル2	
	係数	標準誤差	係数	標準誤差
5分未満 (ref.)				
5分～15分未満	0.424	0.421	0.632	0.428
15分～30分未満	-0.043	0.433	0.141	0.445
30分～1時間未満	0.327	0.440	0.629	0.458
1時間～2時間未満	0.468	0.574	0.458	0.601
2時間以上	-0.523	0.675	-0.126	0.707
事務連絡 (ref.)				
遊びや飲み会の約束			-0.317	0.401
愚痴や悩みごとの相談			-0.442	0.558
近況報告			-0.648 †	0.351
その他 (雑談)			-0.267	0.595
しきい値1	-2.588 ***	0.434	-2.792 ***	0.477
しきい値2	-0.879 *	0.356	-1.059 **	0.404
しきい値3	-0.190	0.347	-0.354	0.395
しきい値4	1.711 ***	0.369	1.616 ***	0.413
Nagelkerke R ²	0.0213		0.0450	
N	197		195	

† p < 0.1, *p < 0.05, **p < 0.01, ***p < 0.001

その結果、どちらのモデルでも一日のチャットの利用時間と生活満足度の有意な関連は見られず、チャットの内容による生活満足度への影響もほとんど見られなかった。

次に性別と学年が生活満足度へ影響を与える可能性を考慮し、それらを統制変数に加えた分析を表 4.2.2 に示す。

表 4.2.2 生活満足度に関する順序ロジスティック回帰分析

	係数	標準誤差
5分未満 (ref.)		
5分～15分未満	0. 638	0. 437
15分～30分未満	0. 131	0. 452
30分～1時間未満	0. 481	0. 469
1時間～2時間未満	0. 268	0. 655
2時間以上	-0. 313	0. 760
事務連絡 (ref.)		
遊びや飲み会の約束	-0. 123	0. 415
愚痴や悩みごとの相談	-0. 889	0. 609
近況報告	-0. 611 †	0. 358
その他（雑談）	-0. 182	0. 626
男性	-0. 097	0. 295
学年	0. 328	0. 223
しきい値1	-2. 051 **	0. 747
しきい値2	-0. 329	0. 704
しきい値3	0. 401	0. 701
しきい値4	2. 410 ***	0. 728
Nagelkerke R2	0. 0638	
N	187	

† p < 0. 1, *p < 0. 05, **p < 0. 01, ***p < 0. 001

結果として、10%水準で「近況報告」の係数が「事務連絡」に対して有意に負であることがわかったが、それ以外の一日のチャットの利用時間、チャットの内容、性別、学年と生活満足度の間に有意な関係は見られなかった。したがって、チャット機能の利用時間と生活満足度の間に関連があるかどうかは、今回収集したデータでは明らかにすることはできなかった。「事務連絡」に対して「近況報告」が生活満足度に対してマイナスの関連を示している理由としては、他人の充実した近況を知り、自身の生活と比較することで生活満足度が低下しているためであると考えられる。

また、どのような人がチャットを長時間使用しているのかを調べるため、チャット機能の使用時間を従属変数、学年を独立変数として単回帰分析を行った。これはコロナウイルス流行後に入学した1,2年生と流行前に入学した3,4年生では友人形成のプロセスの違いからチャット機能の使用時間に差が出る可能性を考えたためである。結果を表4.2.3に示す。

表 4.2.3 チャット機能の利用時間に関する単回帰分析

	係数	標準誤差
切片	32.165 ***	3.538
1, 2年生 (ref.)		
3, 4年生	-1.607	5.237
調整済みR2	-0.0044	
N	206	

† p<0.1, *p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001

この結果から、学年とチャット機能の利用時間には有意な関連が見られないことが分かった。

4.2.2 仮説 2

まず、SNS を介してできた友人の数を従属変数、高校以前の友人の数を独立変数として行った単回帰分析の結果を表 4.2.4 に示す。

表 4.2.4 SNS を介してできた友人の数に関する単回帰分析

	係数	標準誤差
切片	1.355 ***	0.405
高校以前の友人	0.066	0.044
調整済みR2	0.0060	
N	210	

† p<0.1, *p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001

高校以前の友人の数による影響は有意に認められなかった。次に、性別が SNS を介してできる友人の数に与える影響を考慮し、性別を統制変数に加え、重回帰分析を行った。その結果を表 4.2.5 に示す。

表 4.2.5 SNS を介してできた友人の数に関する重回帰分析

	係数	標準誤差
切片	1.897 ***	0.482
高校以前の友人	0.084 †	0.044
女性 (ref.)		
男性	-1.128 *	0.512
調整済みR2	0.0249	
N	204	

† p<0.1, *p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001

SNS を介してできた友人の数において高校以前の友人の数による影響が 10%水準で有意に正であることが認められた。また、性別が SNS を介してできた友人の数に及ぼす影響も 5%水準で有意に認められた。

また、1,2 年生と 3,4 年生ではコロナウイルスの流行前に入学したか否かという違いがあるため、SNS によって友人を作る必要性に差があると考えられる。ゆえに、SNS を介してできた友人の数を従属変数、学年を独立変数として単回帰分析を行った。その結果を表 4.2.6 に示す。

表 4.2.6 SNS を介してできた友人の数に関する単回帰分析

	係数	標準誤差
切片	1.911 ***	0.336
1, 2年生 (ref.)		
3, 4年生	-0.283	0.497
調整済みR2	-0.0033	
N	204	

† p<0.1, *p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001

SNS を介してできた友人の数において、学年による影響は有意に認められなかった。したがって、学年による SNS を使って友人を作る必要性の違いはあまりないと考えられる。

4.2.3 仮説 3

はじめに、SNS を介してできた友人の数を従属変数、Twitter のフォロー数を独立変数として行った単回帰分析の結果を表 4.2.7 に示す。

表 4.2.7 SNS を介してできた友人の数に関する単回帰分析

	係数	標準誤差
切片	1.069 **	0.395
フォロー数	0.007 ***	0.002
調整済みR2	0.0830	
N	169	

† p<0.1, *p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001

フォロー数による影響は 0.1%水準で有意に正であることが認められた。次に、東北大学に通っている高校以前の友人の数と性別が、SNS を介してできた友人の数に及ぼす影響を考慮し、統制変数に加え、重回帰分析を行った。その結果を表 4.2.8 に示す。

表 4.2.8 SNS を介してできた友人の数に関する重回帰分析

	係数	標準誤差
切片	1.699 **	0.513
フォロー数	0.009 ***	0.002
東北大学に通う高校以前の友人	0.039	0.069
女性 (ref.)		
男性	-1.681 **	0.579
調整済みR2	0.1307	
N	165	

† p<0.1, *p<0.05, **p<0.01, ***p<0.001

その結果、SNS を介してできた友人の数において、フォロー数による影響は 0.1%水準で有意に正であると認められた。また、性別による影響も 1%水準で有意に見られた。

5. 考察と結論

まず、仮説 1 の SNS のチャット機能の使用時間と生活満足度の関係について、チャットの内容、性別、学年を統制しても有意な関連は見られなかった。このことから、今回のデータから仮説 1 が支持されるかどうかを判断することはできない。佐柳・中村(2018)の研究では、大部分の SNS 利用指標と利用者の心理的状況に有意な結果がみられず、有意な SNS 利用指標は心理的状況に対して正の関連を持っている結果であったが、有意な結果が得られなかったという点で、私たちの調査はこの先行研究と一部合致する。学年間でチャットの利用時間に有意な差がみられないことなどから、このような結果になった理由として、今回質問紙で尋ねなかったチャット機能を用いたコミュニケーションに対する個人の価値観が、満足度に影響を与えている可能性が挙げられる。対面コミュニケーションが制限されたことで、SNS 上のメッセージのやり取りを好まない、もしくは慣れていない学生もある程度の時間チャットを利用することが必要となり、SNS 上のコミュニケーションを好まないが長時間チャットを利用している学生がいる可能性が考えられる。加えて、今回の調査では SNS 上のコミュニケーション量の指標としてチャット機能の利用時間を用いたため、友人と長時間のコミュニケーションをとる際、LINE などの通話機能や zoom などのビデオチャットを用いた場合についてはデータを集められていない。そのため、今後の展望としては「SNS で友人とメッセージのやり取りをすることに苦手意識を持っていますか」「一日あたりどのくらいの時間友人と通話をしていますか」等の質問を追加した調査を行い、それらの結果を踏まえて分析を行う必要があると考える。

次に、仮説 2 の SNS を介してできた友人の数と高校以前の友人の数の関係について、性別を統制した場合において、10%水準で有意な正の効果が見られた。したがって、10%水準ではあるが、東北大生において、個人が既に所持している友人形成能力が、SNS を介した友人形成のプロセスにおいても重要であることは有意であるといえる。つまり、SNS は友人

関係を形成するうえでの手段に過ぎないといえる。ゆえに、友人形成をサポートするうえでは、SNS などによる友人形成の場を作ることよりも、各個人の友人形成能力を向上させる必要があると考えられる。

仮説3のSNSを介してできた友人の数とTwitterのフォロワー数の関係について、東北大学に通っている高校以前の友人の数や性別を統制変数とした時、0.1%水準で有意な正の効果が見られた。したがって、SNSを介して友人を作る場合、Twitterは有効な手段の一つであるといえる。しかし、この調査ではTwitterによってできた友人の数については調べていない。ゆえに、今後の調査ではTwitterを介して作った友人の数を調査しTwitterのフォロワー数との関係を分析する必要があると考えられる。

今回の調査において、SNSのチャット利用と生活満足度の関係を明らかにすることはできなかったが、東北大生におけるSNSと友人形成のプロセスの関係性を分析することができた。今後の展望としては、SNSに対する個人の価値観や友人形成に用いたSNSの種類の内訳などを調査したデータを用いて分析することで、SNSの効果的な利用方法についてさらに明らかにすることができると考える。

引用文献

- 小寺敦之, 2009, 「若者のコミュニケーション空間の展開——SNS『mixi』の利用と満足、および携帯メール利用との関連性」『情報通信学会誌』27(2): 55-66.
- 松尾豊・安田雪, 2007, 「SNSにおける関係形成原理——mixiのデータ分析」『人工知能学会論文誌』22(5): 531-541.
- 佐柳信男・中村彩乃, 2018, 「大学生のSNS利用と心理的ウェルビーイングの関係——主要SNSの影響の比較」『日本教育心理学会総会発表論文集』60(0): 533 - 533.
- 申知元・潮村公弘, 2019, 「SNS利用態度と友人観の因果関係——SNSサービスの特徴相違に着目した検討」『多文化・共生コミュニケーション論叢』14: 5-16.
- 全国大学生生活教育協働組合連合会, 2014, 「第50回学生生活実態調査の概要報告」(2021年7月21日取得, <https://www.univcoop.or.jp/press/life/report50.html>).

東北大生の生活と鬱症状

——新型コロナウイルスによる対人関係の変化に着目して——

岩間珠菜・塩本拓己・鈴木果奈・野口晴香

1. 研究背景とリサーチクエスチョン

2019 年末より新型コロナウイルス（COVID-19）の感染拡大が続き、大学生の生活は大きく変化した。その中でも対人関係に関する変化は特に大きい。長期化する感染拡大防止対策により部活動・サークル活動の停止など構内活動が大幅に制限されたことやオンライン授業の導入などで非対面コミュニケーションが増えたことにより友人と接する機会が減少し人間関係が希薄化してしまうという現状がある。このような慣れない状況下は大学生にとってストレス等を引き起こす恐れがあり鬱病をはじめとした大学生のメンタルヘルスに多大な影響を起こしかねない。実際、秋田大学で行われた感染拡大に伴う外出自粛などによる学生の心身への影響に関する調査によると男女ともに一割以上の学生に中程度の鬱症状が見られたと報告されている（秋田大学～新型コロナウイルスの感染拡大に伴う外出自粛が学生の心身に与えた影響について～ 2020）。

一方でこのような状況下でもストレス少なく生活しているという例もある。オンライン授業について、場所や時には時間を選ぶことなく受講できるため通学時間の節約や自分のペースで学習することができる、私語や雑音が少ないため集中でき学習効率が上がるなど非対面コミュニケーションの利便性を評価する学生は少なくない。また部活動・サークル活動が活動休止となった分、空いた時間でフィットネスや読書、動画配信サービスを楽しむなどひとりでも没頭できる新たな趣味を見つけるなどいわゆる「ひとり時間」を満喫している人もいる。

このように新型コロナウイルスによる生活の変化が学生を鬱傾向にするかどうかは人によって様々である。ではいったいどのような人が鬱症状を発症しやすいのだろうか。本研究では新型コロナウイルスによって最も変化したと考えられる対人関係に着目し、それらに関連する項目と鬱症状との関係性を調査することにより、どのような特性を持つ人が新型コロナウイルスにより鬱症状を引き起こしやすいか検討することを目的としている。

2. 先行研究の検討

ビデオ通話機能を用いたコミュニケーションの評価について研究した狩野・布井（2020）の研究によると、ビデオ通話による非対面コミュニケーションより直接対面コミュニケーションの方が感情が快状態にあり、喋りやすく印象が良好である。大学生において、新型コロナウイルスの影響により対面授業が制限されオンライン授業へと切り替わり、同居人以

外の友人や先輩、後輩と直接会う機会が減少し、非対面のコミュニケーションが増加したと考えられる。このような、直接対面しコミュニケーションをとる機会が減少している状況下で大学生は、快感情を得にくく、また孤独感を感じやすくなっていると考えられる。北條ら（2020）の研究によると、大学生において授業以外で人と接する機会が増えた人ほど、幸福度が上がる傾向がある。これは逆に、授業以外の人と接する機会が減少するほど幸福度が下がるということができ、コロナ禍で授業以外でも人と直接対面で接する機会が減少している大学生は、幸福度が下がっていると考えることが出来る。

また、コロナ禍の10代の不安についての調査（2020）によると、外出行動が減ったことによる健康や学力、進学・就活への不安が強い傾向が見られた。さらに部活やサークル、趣味や習い事が減った層では「友人と会えずに距離ができる」や「コロナうつ」などの人間関係不安が全体を上回った。これまで加わっていた外部の輪に参加しにくくなり、人と会う機会が減ったことで人間関係不安がより強くなったと考えられる。そこで、コロナ禍以前から現在にかけての外出行動の増減が交際費の増減に結びついていると考える。外出行動の増減を数量的に把握し、交際費の増減と鬱症状の関連を調べることによって、コロナ禍のため外出行動が減ったことによる大学生のメンタルヘルスへの影響を考察する。併せて、対面コミュニケーション満足度や以下に述べる所属欲求との関連も見ていきたい。

加えて、梶谷・土本・佐藤（2021）によると、新型コロナウイルス以前と比較して新型コロナウイルス後の方が鬱病のスクリーニングスコアが高く、鬱病に罹患している大学生が増加したことを示唆している。ゆえに、新型コロナウイルスの影響により大学生の鬱症状が増加していることが考えられる。さらに Baumeister と Leary（1995）が提唱した所属仮説によると、「所属」は快感情を生み出し、反対に所属欲求が満たされない場合には様々な不適応障害を引き起こされる。関連して、小林ら（2008）の研究では、所属欲求が高い人は人間関係に満足できない場合に抑うつ傾向が高まることを明らかにしている。

以上より、新型コロナウイルスによる対人関係の変化は、大学生の鬱症状増加に繋がっている可能性が考えられる。しかしこれらの研究は、大学生の対面コミュニケーションと鬱症状の直接の関連については調べていないため、この点について考える必要がある。

3. 仮説

以上を踏まえ、3つの仮説を立てた。

仮説1：対面コミュニケーションに満足していない方が、鬱症状が多い

仮説2：出費の内訳において交際費が減ったと感じる人の方が鬱症状が多い

仮説3：新型コロナウイルスの影響で、所属欲求が強い人の方が鬱症状が多い

4. 変数

4.1 分析に用いる変数の説明

〈対面コミュニケーション満足度〉

q61「同居人を除く他人との対面コミュニケーションを十分にとれているか」において、不十分を1、十分を5とした5件法の回答を使用した。

〈鬱症状得点〉

鬱症状に関する質問項目として、NHK 健康チャンネルの「軽症のうつ病セルフチェック」から、q58「憂鬱な気分になる」「興味や喜びを感じにくい」「食欲が異常に増えた、または異常に減った」「睡眠の異常（寝付きが悪い、頻繁に目が覚める、眠りすぎる）」「そわそわする、または体が重い」「疲れやすい」「自分を責める」「思考力・集中力の低下」の8つの回答（「あてはまる」、「少しあてはまる」、「どちらともいえない」、「あまりあてはまらない」、「あてはまらない」）を使用した。また、「あてはまる」を1、「少しあてはまる」を2、「どちらともいえない」を3、「あまりあてはまらない」を4、「あてはまらない」を5としていたが、回答の値を反転させた。8つの回答について Cronbach の信頼性係数を確認したところ、 $\alpha=0.839$ であったため内的整合性があると判断し、8つの質問項目を足し合わせて鬱症状得点を作成した。

〈コロナ禍以前と比べた交際費の金額の変化〉

q26「コロナ禍以前(2020年4月以前)とくらべて、交際費の金額は大きくなりましたか、それとも小さくなりましたか。2020年4月以降に入学した方は、入学前の交際費の金額とくらべてください。」という質問に対し、5つの回答（「大きくなった」、「少し大きくなった」、「変わっていない」、「少し小さくなった」、「小さくなった」）を使用した。

〈学年〉

q03「あなたは現在、何年生ですか。」という質問に対し、7つの回答（「学部1年」、「学部2年」、「学部3年」、「学部4年」、「大学院生」、「研究生」、「その他」）を使用した。コロナ禍以前に入学した生徒とコロナ禍後に入学した生徒による違いをみることを目的としているため、「学部1年」と「学部2年」を「1, 2年生」、「学部3年」と「学部4年」を「3, 4年生」とカテゴリー化して使用し、その他の項目は欠損値とした。

〈所属欲求〉

所属欲求に関しては、Leary ら(2005)による所属欲求尺度を用いる。質問項目としては小林知博・谷口淳一・木村昌紀・Leary, M.R (2006) による邦訳を参考にした。

q59「もし他の人が自分を受け入れてくれそうになくても気にしないようにしてい

る。」「他の人に避けられたり拒まれたりしないように努めている。」「他の人が気にかけてくれるかどうか、めったに気にしない。」「困ったときに頼れる人がいると常を感じていたい。」「人との繋がりを強く求めている。」「他の人の計画に自分が含まれていないと、とても気になる。」の6つの回答（「あてはまる」、「少しあてはまる」、「どちらともいえない」、「あまりあてはまらない」、「あてはまらない」）の回答を使用している。また、6つの回答について Cronbach の信頼性係数を確認したところ、内的整合性が確認できなかった。1つ目の設問「もし他の人が自分を受け入れてくれそうになくても気にしないようにしている。」について、回答者の受け取り方によって答えが逆転する可能性があると考えられ、その回答を省いた5つの回答で合成得点を作成した。信頼係数は $\alpha=0.74$ であったため内的整合性があると判断し、5つの質問項目を足し合わせて所属欲求得点を作成した。さらに人数ができるだけ均等になるように5つのカテゴリー（「低い」、「やや低い」、「中間」、「やや高い」、「高い」）に分けて使用した。

4.2 各分析に用いる変数

仮説ごとに用いる変数を以下に示した。ただし単回帰分析に加えて重回帰分析を行ったため、仮説②に関しては計2つ、仮説③では計3つの分析を行った。それぞれ仮説②-1、②-2、③-1、③-2、③-3と示し、用いた変数を表示した。

仮説①		
【独立変数】		
対面コミュニケーション満足度		
【従属変数】		
鬱症状得点		
仮説②-1	仮説②-2	
【独立変数】	【独立変数】	
コロナ禍前後の交際費の変化	コロナ禍前後の交際費の変化	
【従属変数】	【従属変数】	
鬱症状得点	鬱症状得点	
【統制変数】	【統制変数】	
学年	所属欲求得点、	

対面コミュニケーション満足度		
仮説③－1	仮説③－2	仮説③－3
【独立変数】 所属欲求得点	【独立変数】 所属欲求得点	【独立変数】 対面コミュニケーション満足度
【従属変数】 鬱症状得点	【従属変数】 鬱症状得点	【従属変数】 所属欲求得点
	【統制変数】 学年	

5. 分析結果

5.1 記述統計量

以下に記述統計を示す。

5.1.1 鬱症状得点

鬱症状得点について、最小値 8.00、最大値 40.00、中央値 24.00、平均値 23.51、最頻値 24.00 である。

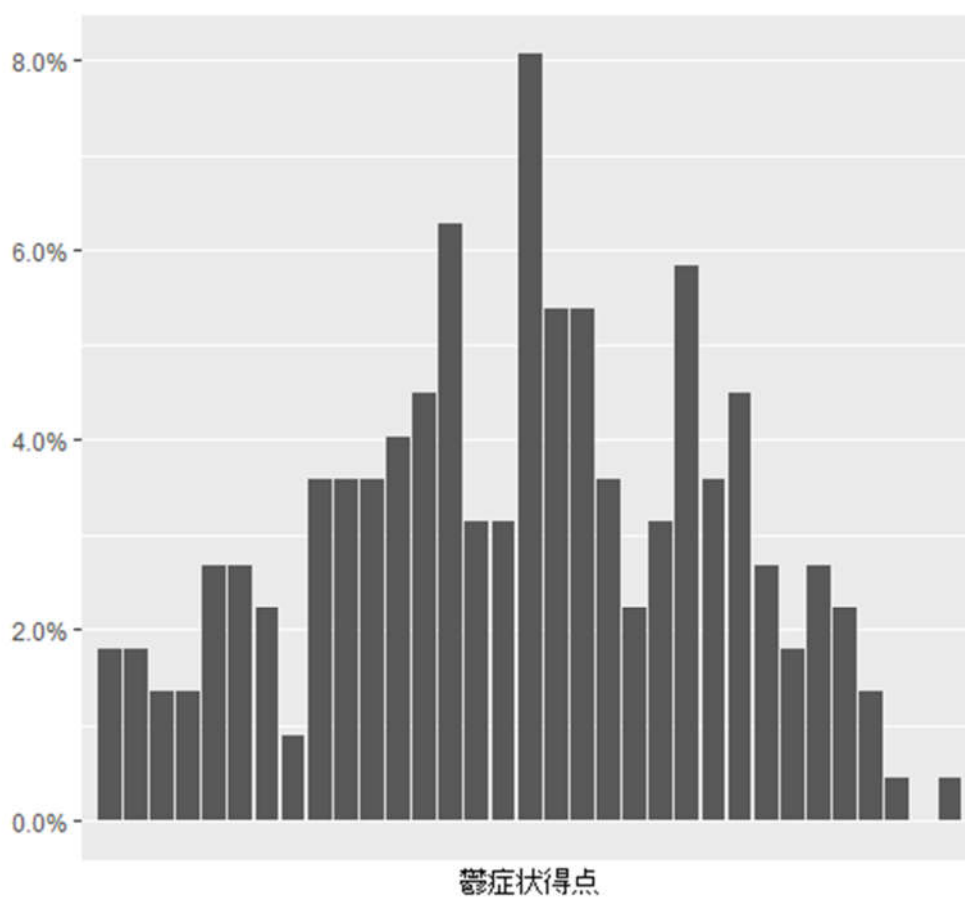


図 5.1.1 鬱症状得点の分布

東北大生が感じている鬱症状の多さについて上記のような結果が得られた。正規分布に近い分布となっており、鬱症状得点についてはばらつきがあることが分かった。

5.1.2 対面コミュニケーション満足度

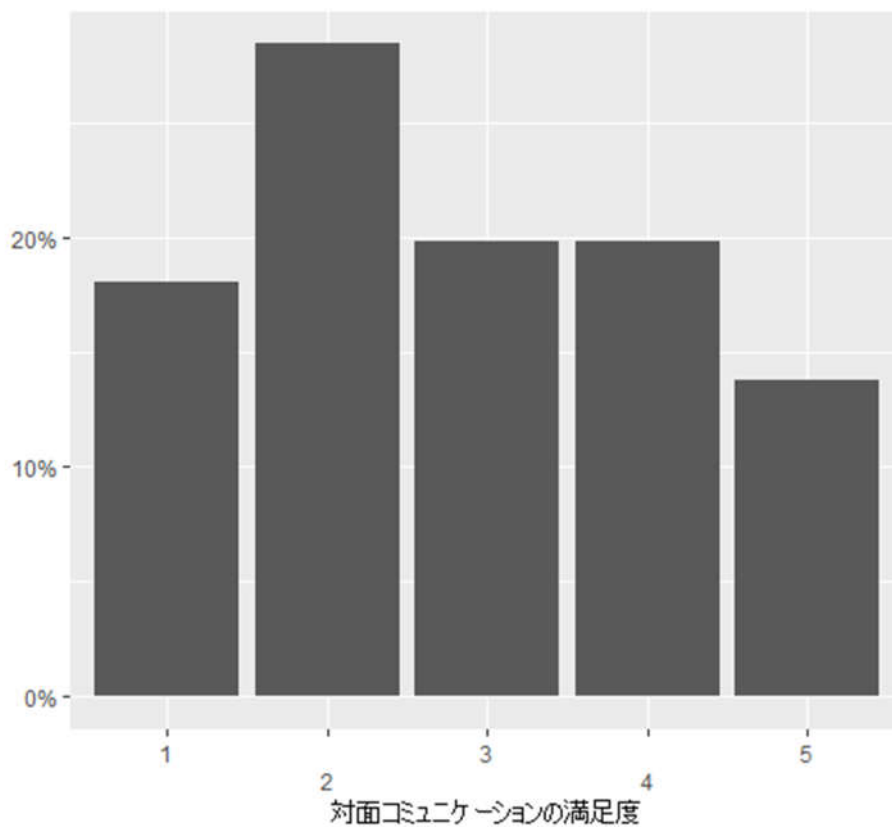


図 5.1.2 対面コミュニケーション満足度

東北大生の対面コミュニケーション満足度について上記のグラフのような結果が得られた。対面コミュニケーション満足度の割合にばらつきがあるが、「2」が最も割合が大きく、満足していない人が過半数であるという結果になった。

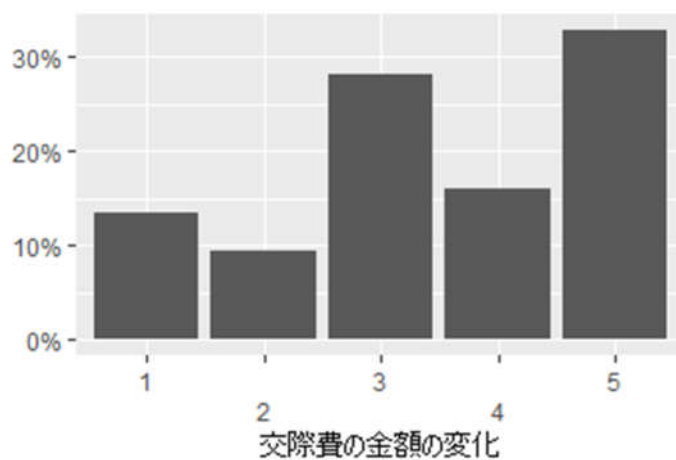


図 5.1.3 コロナ禍以前と比べた交際費の金額の変化

交際費の金額の変化について上記のグラフのような結果が得られた。横軸の1から5までは順に、「大きくなった」、「少し大きくなった」、「変わらなかった」、「少し小さくなった」、「小さくなった」を示している。総数は231で、回答にはばらつきが見られたが、小さくなったと感じている人の方が多いことがわかる。

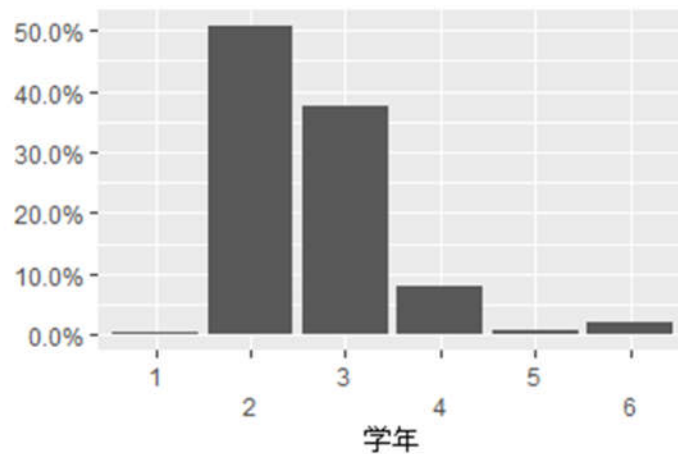


図 5.1.4 学年

学年について上記のグラフのような結果が得られた。棒グラフはそれぞれは左から、「学部1年」、「学部2年」、「学部3年」、「学部4年」、「大学院生」、「研究生」を示している。総数は236で、1, 2年生の人数の合計は121人、3, 4年生の人数の合計は108人となった。

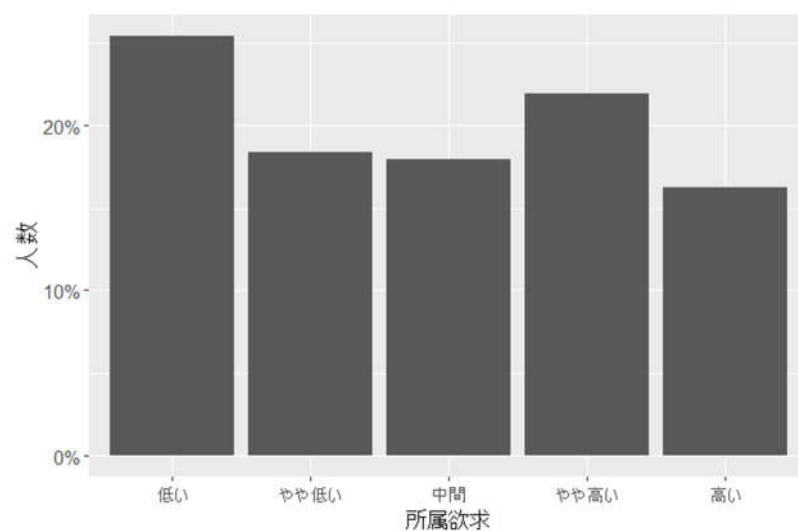


図 5.1.5 所属欲求

所属欲求について上記のグラフのような結果が得られた。総数は「228」で、人数はそれぞれ「低い」が 58 人、「やや低い」が 42 人、「中間」が 41 人、「やや高い」が 50 人、「高い」が 37 人であった。なお、調査のためそれぞれのカテゴリーに同程度の人数が含まれるよう分類している。それぞれのカテゴリーに当たる合成得点は、「低い」から順に 5~14、15~16、17~18、19~21、22~25 である。

5.2 仮説①

主観的尺度である対面コミュニケーション満足度と鬱症状得点を単回帰分析することで、大学生の対面コミュニケーションの満足度と鬱症状の直接的な関係について調べる。鬱症状得点を従属変数、対面コミュニケーション満足度を独立変数として、単回帰分析を行った結果を表 5.2.1 に示す。

表 5.1 鬱症状を従属変数とした単回帰分析

	係数	標準誤差
対面コミュニケーション	-1.199 **	1.142
切片	26.914	0.364
調整済み R ²	0.0467	
N	223	

†p < 0.1, *p < 0.05, **p < 0.01, ***p < 0.001

鬱症状得点の観点において対面コミュニケーション満足度の影響が 1%水準で有意に認められた。ゆえに、対面コミュニケーション満足度が低いほど鬱症状が多いことが明らかとなり、仮説が支持される結果となった。

5.3 仮説②

鬱症状得点を従属変数、コロナ禍以前と比べた交際費の金額の変化を独立変数として線形回帰分析を行った。結果を表 5.3.1 に示す。

表 5.3.1 鬱症状得点を従属変数とした単回帰分析

	係数	標準誤差
大きくなった(ref.)		
少し大きくなった	-0.4190	1.3693
変わっていない	0.1810	2.1424
少し小さくなった	0.3755	1.6507
小さくなった	1.4167	1.8400
切片	23.0690***	1.6285
調整済み R2	0.0077	
N	221	

†p < 0.1, *p < 0.05, **p < 0.01, ***p < 0.001

鬱症状得点と交際費の金額の変化について、有意な結果は得られなかった。項目によって正負もばらつきがあり、仮説は支持されなかった。

加えて、学年、または所属欲求と対面コミュニケーション満足度を統制変数として加えた重回帰分析を行った。結果をそれぞれ表 5.3.2 と表 5.3.3 に示す。

表 5.3.2 鬱症状得点を従属変数とした重回帰分析

	学年を加えた分析	
	係数	標準誤差
大きくなった (ref.)		
少し大きくなった	0.381	2.175
変わっていない	0.026	1.695
少し小さくなった	0.311	1.929
小さくなった	1.503	1.703
学年 3, 4 年生	-0.179	1.073
切片	23.086	1.369

調整済み R2	0.0078
N	209

†p < 0.1, *p < 0.05, **p < 0.01, ***p < 0.001

表 5.3.3 鬱症状得点を従属変数とした重回帰分析 2

所属欲求と対面コミュニケーション満足度を加えた分析		
	係数	標準誤差
大きくなった (ref.)		
少し大きくなった	0.768	2.052
変わっていない	0.241	1.612
少し小さくなった	0.042	1.781
小さくなった	0.786	1.582
所属欲求 低い (ref.)		
所属欲求 やや低い	2.581 .	1.510
所属欲求 中間	4.370 **	1.472
所属欲求 やや高い	4.417 **	1.422
所属欲求 高い	5.799 ***	1.508
対面コミュニケーション満足度	-1.017 **	0.368
切片	22.873	1.979
調整済み R2	0.1268	
N	208	

†p < 0.1, *p < 0.05, **p < 0.01, ***p < 0.001

学年、または所属欲求と対面コミュニケーション満足度を統制変数として加えた重回帰分析においても、鬱症状得点と交際費の金額の変化について有意な結果は得られなかった。

5.4 仮説③

鬱症状得点を従属変数、所属欲求得点を独立変数とした線形単回帰分析を行った。結果を以下の表に示す。

表 5.4.1 鬱症状得点を従属変数とした単回帰分析

	係数	標準誤差
所属欲求(低い)(ref.)		
所属欲求(やや低い)	3.486*	1.461
所属欲求(中間)	4.811**	1.461
所属欲求(やや高い)	5.19***	1.387
所属欲求(高い)	6.508***	1.495
切片	19.79***	0.938
調整済み R2	0.085	
N	222	

†p < 0.1, *p < 0.05, **p < 0.01, ***p < 0.001

所属欲求の全てのカテゴリーにおいて、鬱症状得点との有意な正の相関が見られた。また、所属欲求が低いグループに比べ、所属欲求が高いグループの方が強い相関が認められる。よって、所属欲求が高い人ほど鬱症状得点も高いという解釈が可能である。

続いて、統制変数に学年を加えた線形重回帰分析を行った。結果は以下の表の通りである。

表 5.4.2 鬱症状得点と学年を従属変数とした重回帰分析

	係数	標準誤差
所属欲求(低い)(ref.)		
所属欲求(やや低い)	3.470*	1.473
所属欲求(中間)	4.660**	1.487
所属欲求(やや高い)	5.176***	1.402
所属欲求(高い)	6.4***	1.517
学年(3,4年生)	-0.120	0.970
切片	19.87***	1.0300
調整済み R2	0.078	
N	218	

†p < 0.1, *p < 0.05, **p < 0.01, ***p < 0.001

学年を統制した場合の所属欲求得点と鬱症状得点には正の相関が見られたが、学年と鬱症状得点の関連に関して有意な結果は得られなかった。つまり、入学年がコロナ以前、以後であるかは鬱症状得点に影響を与えないと解釈でき、仮説③は支持されないと判断する。

そこで、さらに所属欲求得点に影響を与えうる要因を探るべく、所属欲求得点を従属変数、対面コミュニケーション満足度を独立変数として線形単回帰分析を行った。結果は以下の通りである。

表 5.4.3 所属欲求を従属変数とした単回帰分析

	係数	標準誤差
対面コミュニケーション	-0.409†	0.209
切片	18.113***	0.653
調整済み R2	0.085	
N	228	

†p < 0.1, *p < 0.05, **p < 0.01, ***p < 0.001

この分析では、対面コミュニケーション満足度と所属欲求得点には負の相関があるとわかった。すなわち、対面コミュニケーション満足度が高いほど所属欲求が低いという解釈が可能である。

6. 考察・結論

仮説 1

はじめに、仮説 1 の対面コミュニケーション満足度と鬱症状の関係について、対面コミュニケーション満足度と鬱症状得点に正の相関が見られた。よって、対面コミュニケーションに満足していないほど鬱症状が多い、という仮説が成立した。これは、対面コミュニケーションの不満足感によって感じられる孤独感がストレスに繋がり、鬱症状が誘発されるからであると考えられる。

仮説 2

有意な結果は得られなかった。学年や、所属欲求と対面コミュニケーション満足度で統制しても有意な結果は得られなかった。

外出行動の増減がメンタルヘルスに与える影響がプラスであるかマイナスであるかも人によるため、個人差がかなり大きいと考えられる。個々に多様な価値観があるため、今回使用した変数のみでは測りきれなかった。また、外出行動と交際費が直接的に結びつくものではないため、より外出行動に関連した変数を使う必要があると考えられる。

外向性、もともとの経済状況、コミュニティの数や大きさなど、さまざまな変数を用いたさらなる分析が求められる。

仮説 3

所属欲求が高いほど鬱症状得点も高いという結果が得られた。しかしこの相関の強さに入学時期は影響せず、想定していた内容とは異なる結果となった。この結果からは大学生に対するコロナの精神的影響の有無は判断できず、仮に影響があるとしても、その影響は学年によらず一律であると考えられる。

加えて、所属欲求と対面コミュニケーション満足度の分析では、有意な負の相関が得られた(図 6.1)。仮説 1 の結果と併せると、所属欲求得点と鬱症状得点の相関には対面コミュニケーション満足度が交絡変数として関わっている可能性が指摘できる。

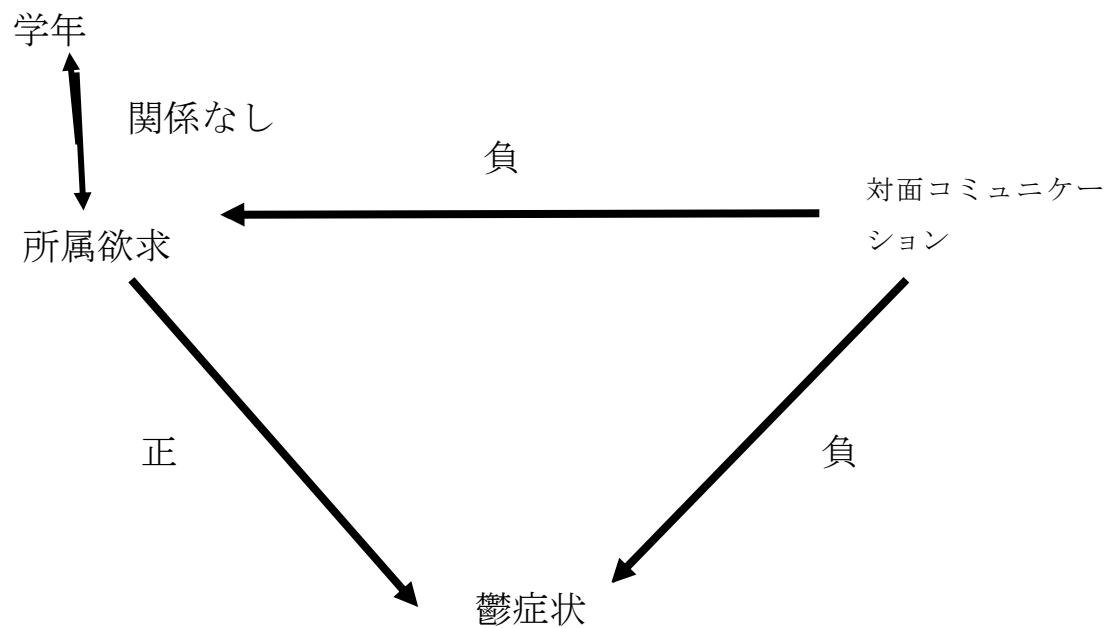


図 6.1 変数の相関まとめ

まとめ

対面コミュニケーション不足による孤独感がストレスにつながり、鬱症状が誘発されること、所属欲求が満たされていない人ほど鬱症状が多いこと、対面コミュニケーションが不足している人ほど所属欲求が満たされていないこと、という3つの考察が得られた。これより、鬱症状の発現と所属欲求が満たされていないことに対し、適切な対面コミュニケーションを行うことが有効であると考えられる。対面コミュニケーションの例として対面授業を毎週受講する、サークルなどの飲食をともなわない対面活動を行うなどが挙げられる。そのままでは対面コミュニケーションが不足してしまうため、定期的に人と会う機会を設けることが必要であると考えられる。

本研究の課題としては、外出行動をより表す変数を用意すること、外出行動と鬱症状に関連した価値観をさらに取り入れた分析が必要であることが挙げられる。また、今回は調査票に「所属欲求」という言葉を用いて調査を実施したが、鬱症状の調査と同様に所属欲求の強さを測るような多項目の質問による調査を行うことによって、無意識下の欲求まで含めて変数として使用することができると考えられる。

引用文献

- 秋田大学, 2020, 「秋田大学調査～新型コロナウイルスの感染拡大に伴う外出自粛が学生の心身に与えた影響について」, 秋田大学ホームページ, (2021 年 4 月 21 日取得, <https://www.akita-u.ac.jp/honbu/event/item.cgi?pro6&1334>).
- 久我尚子・井上智紀, 2020, 『コロナ禍の10代の不安 第1回 コロナによる暮らしの

変化に関する調査～10代編』, ニッセイ基礎研究所, (2021年7月21日取得, <https://www.nli-research.co.jp/report/detail/id=64955?site=nli>).

小林知博・谷口淳一・木村昌紀・Leary, M.R (2006) 日本心理学会第70回大会『所属欲求尺度 (the Need to Belong Scale) 邦訳版作成の試み』.

NHK 健康チャンネル, 2019, 「軽症のうつ病の症状とチェック方法、基本的な治療、効果的なセルフケアを紹介」, NHK 健康チャンネルホームページ, (2021年5月12日所得, https://www.nhk.or.jp/kenko/atc_307.html).

東北大学生の生活と意識に関する調査 (2021年)

この調査は、東北大学の学生の皆様の生活や意識について、おうかがいするものです。シラバスから学部の専門科目授業を無作為に抽出し、選ばれた授業を受講していらっしゃる学生の皆様にご協力をお願いしております。

この調査は、文学部の授業「行動科学基礎実習」の一環として実施しております。できるだけ多くの方のご意見を反映した調査を目指しておりますので、ご協力いただければ幸いに存じます。

- 調査の中で、回答者の皆様の名前やメールアドレスなどの個人情報は収集いたしません。回答はすべてコンピュータで集計して処理するため、どなたの回答かわかるようなことは決してありません。また、ご回答いただいた内容は、授業における学生教育以外の目的には使用いたしません。

- 回答に要する時間は、おおむね10～15分程度です。

- 各質問には、あなたのご意見にもっとも近い回答をお選びください。

- どうしても答えたくない質問には、無理にご回答いただく必要はございません。空欄のまま、次の質問に進みください。

- この調査に関するお問い合わせは、下記までお願いいたします。

東北大学文学部行動科学研究室

准教授 小川和孝

TEL : 022-795-6038

E-mail : katsunori.ogawa.b1@tohoku.ac.jp

はじめに、あなたご自身のことについてうかがいます。

1。 あなたの性別をお答えください。

1 つだけマークしてください。

☐ 男性

☐ 女性

☐ その他: _____

2。 あなたの現在の年齢はいくつですか。

20歳ならば、「20」と数字（半角）のみ回答してください。

3。 あなたは現在、何年生ですか。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 学部1年
- ☐ 学部2年
- ☐ 学部3年
- ☐ 学部4年
- ☐ 大学院生
- ☐ 研究生
- ☐ その他: _____

4。 あなたの所属学部を教えてください。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 文学部
- ☐ 経済学部
- ☐ 理学部
- ☐ 工学部
- ☐ その他: _____

5。 あなたが大学に入学した入試方式を選んでください。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 一般入試前期試験
- ☐ 一般入試後期試験
- ☐ AO入試
- ☐ その他: _____

次に、あなたの今セメスターの学習活動についてうかがいます。

- 6。あなたが今セメスターに、実際に受講している授業のコマ数を教えてください。（10コマならば、「10」と数字（半角）のみ回答してください。）

- 7。総合的に見て、あなたはコロナ禍における現在の学習環境に満足していますか。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 満足
- ☐ やや満足
- ☐ どちらともいえない
- ☐ やや不満
- ☐ 不満

- 8。今セメスターのあなたの学習活動に関する以下の項目について、もっともあてはまるものをそれぞれ1つずつ選んでください。

1 行につき 1 つだけマークしてください。

	そう思う	どちらかとい えばそう思う	どちらとも いえない	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わ ない
レポートや課題はただこなしている。	☐	☐	☐	☐	☐
授業には意欲的に参加している。	☐	☐	☐	☐	☐
単位さえ取ればよいと考えて授業に参加している。	☐	☐	☐	☐	☐
自分は学習意欲が高い方だと思う。	☐	☐	☐	☐	☐
勉強が好きである。	☐	☐	☐	☐	☐

- 9。あなたが受講している授業の、形態ごとの総合的な評価を教えてください。受講している授業に該当の授業形態がない場合は、「該当する授業を受講していない」を選択してください。

1つの授業で複数の形態を採用している場合は、授業内・授業外を含めてあなたがもっとも学習に利用している時間の長い形態のものを選んでください。

1行につき1つだけマークしてください。

	満足	やや満足	どちらでもない	やや不満	不満	該当する授業を受講していない
対面型	☐	☐	☐	☐	☐	☐
リアルタイム型	☐	☐	☐	☐	☐	☐
オンデマンド型	☐	☐	☐	☐	☐	☐
資料配布型	☐	☐	☐	☐	☐	☐

- 10。今セメスターに、あなたはふだんどれくらいの時間を授業外学習（授業の課題やレポートに取り組んでいる時間や資格試験に向けた学習など）に使っていますか。1週間当たりの合計時間を答えてください。

1つだけマークしてください。

- ☐ 1時間未満
☐ 1～3時間未満
☐ 3～5時間未満
☐ 5～7時間未満
☐ 7～9時間未満
☐ 9～11時間未満
☐ 11～13時間未満
☐ 13時間以上

11. あなたは、ふだん授業を受けている場所の通信環境に満足していますか。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 満足
- ☐ やや満足
- ☐ どちらともいえない
- ☐ やや不満
- ☐ 不満

12. 授業の内容や大学の施設の充実度、学生に対するサービスなどを総合的に見て、あなたは現在の授業料が適切であると思いますか。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 高い
- ☐ やや高い
- ☐ ちょうどよい
- ☐ やや安い
- ☐ 安い
- ☐ わからない

あなたのSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）利用や友人関係についてうかがいます。

13. あなたには高校卒業以前にできて、今でも定期的に連絡を取り合っている友人が何人いますか。ここでの連絡を取るとは、グループでの会話も含めます。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 5人未満
- ☐ 5人以上10人未満
- ☐ 10人以上15人未満
- ☐ 15人以上20人未満
- ☐ 20人以上25人未満
- ☐ 25人以上30人未満
- ☐ 30人以上

14. あなたには、東北大学に通っている高校卒業以前の友人が何人いますか。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 0人
- ☐ 1人
- ☐ 2人
- ☐ 3人
- ☐ 4人
- ☐ 5人
- ☐ 6人以上10人未満
- ☐ 10人以上

15. 今の友人関係（SNS上を含む）について、もっとも自分の考えに近いと感じるものを選択してください。

1 行につき 1 つだけマークしてください。

	あてはまる	少しあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	あてはまらない
今の自分の友人関係に満足している	☐	☐	☐	☐	☐
今の友人関係は、自分が望んでいるものと違うと思う	☐	☐	☐	☐	☐
今の友人付き合いが本当はつらい時がある	☐	☐	☐	☐	☐

16. あなたはふだんSNSを利用していますか。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 利用している
- ☐ 利用していない 質問 22 にスキップします

17。 あなたがふだん利用しているSNSについて、当てはまるものをすべてを選んでください。

当てはまるものをすべて選択してください。

☐ Twitter

☐ LINE

☐ Instagram

☐ Facebook

その他: ☐ _____

18。 Twitterを利用している方にうかがいます。あなたがTwitterでもっともよく使うアカウントでの、「個人アカウント」のフォロー数はいくつですか。ここでの「個人アカウント」は、公式アカウント（企業、有名人など）ではないアカウントのことを指します。

1 つだけマークしてください。

☐ Twitterは利用していない

☐ 50人未満

☐ 50人以上100人未満

☐ 100人以上150人未満

☐ 150人以上200人未満

☐ 200人以上250人未満

☐ 250人以上300人未満

☐ 300人以上350人未満

☐ 350人以上400人未満

☐ 400人以上450人未満

☐ 450人以上500人未満

☐ 500人以上

19. あなたにはSNSがきっかけで知り合い、実際に会ったことのある友人が何人いますか。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 0人
- ☐ 1人
- ☐ 2人
- ☐ 3人
- ☐ 4人
- ☐ 5人
- ☐ 6人以上

20. あなたはふだん、1日あたりどのくらいの時間、友人とSNSでメッセージのやり取り（LINEやTwitterのDMやリプライ）をしていますか。

1 つだけマークしてください。

- ☐ まったくしていない 質問 22 にスキップします
- ☐ 5分未満
- ☐ 5～15分未満
- ☐ 15～30分未満
- ☐ 30分～1時間未満
- ☐ 1時間～2時間未満
- ☐ 2時間以上

21. ふだん友人とのSNSでのメッセージのやり取りにおいて、もっとも多い会話の内容は以下のうちどれですか。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 事務連絡
- ☐ 遊びや飲み会の約束
- ☐ 愚痴や悩みごとの相談
- ☐ 近況報告
- ☐ その他: _____

生活費、アルバイトについてうかがいます。

22. 今年4月の仕送り額はいくらですか。ただし家賃が含まれている場合は、差し引いて考えてください。

1 つだけマークしてください。

- ☐ なし
- ☐ 1万円未満
- ☐ 1万円以上3万円未満
- ☐ 3万円以上5万円未満
- ☐ 5万円以上7万円未満
- ☐ 7万円以上9万円未満
- ☐ 9万円以上

23. 今年4月の時点で、学費（授業料、講座代、教科書代）はどこから出していましたか。あてはまるものすべてを選んでください。

当てはまるものをすべて選択してください。

- ☐ 家庭（仕送り）
- ☐ アルバイト
- ☐ 奨学金

その他: ☐ _____

24. 今年5月における生活費（食費、交通費、光熱費、雑費）はいくらでしたか。ただし家賃は含めないでください。

1 つだけマークしてください。

- ☐ なし
- ☐ 1万円未満
- ☐ 1万円以上2万円未満
- ☐ 2万円以上3万円未満
- ☐ 3万円以上4万円未満
- ☐ 4万円以上5万円未満
- ☐ 5万円以上6万円未満
- ☐ 6万円以上7万円未満
- ☐ 7万円以上

25. 今年5月における生活費以外の出費（交際費、サークル関連費、趣味にかかる費用など）はいくらでしたか。

1 つだけマークしてください。

- ☐ なし
- ☐ 5千円未満
- ☐ 5千円以上1万円未満
- ☐ 1万円以上2万円未満
- ☐ 2万円以上3万円未満
- ☐ 3万円以上

26. コロナ禍以前（2020年4月以前）とくらべて、交際費の金額は大きくなりましたか、それとも小さくなりましたか。2020年4月以降に入学した方は、入学前の交際費の金額とくらべてください。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 大きくなった
- ☐ 少し大きくなった
- ☐ 変わっていない
- ☐ 少し小さくなった
- ☐ 小さくなった

27. あなたは現在、授業料免除制度を利用していますか。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 利用している
- ☐ 利用していない
- ☐ わからない

28. あなたは現在、奨学金制度を利用していますか。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 利用している
- ☐ 利用していない
- ☐ わからない

29。 今年4月の奨学金受給額はいくらですか。

1 つだけマークしてください。

- ☐ なし
- ☐ 3万円未満
- ☐ 3万円以上5万円未満
- ☐ 5万円以上8万円未満
- ☐ 8万円以上

30。 今年1月から5月の間の、月の平均アルバイト収入額はいくらですか。

1 つだけマークしてください。

- ☐ アルバイトをしていない 質問 36 にスキップします
- ☐ 1万円未満
- ☐ 1万円以上3万円未満
- ☐ 3万円以上5万円未満
- ☐ 5万円以上7万円未満
- ☐ 7万円以上9万円未満
- ☐ 9万円以上

31。 今年1月から5月までの間の週平均アルバイト時間は何時間ですか。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 5時間未満
- ☐ 5時間以上10時間未満
- ☐ 10時間以上15時間未満
- ☐ 15時間以上20時間未満
- ☐ 20時間以上25時間未満
- ☐ 25時間以上

32. あなたはどのような理由からアルバイトを始めましたか。以下の選択肢から、もっともあてはまるものを選んでください。

複数のアルバイトをしている方は、そのうち主なもの1つについてお答えください。

1 つだけマークしてください。

- ☐ お小遣い（趣味）のため
- ☐ 社会勉強・自分の将来の役に立てるため
- ☐ 学費・生活費のため
- ☐ 保護者や友人に言われたため
- ☐ その他: _____

33. あなたのアルバイトは、自発性（率先して仕事をする事、勤務内容を自分で考えたり工夫したりすること）が必要なものですか。

複数のアルバイトをしている方は、そのうち主なもの1つについてお答えください。

1 つだけマークしてください。

- ☐ あてはまる
- ☐ 少しあてはまる
- ☐ どちらともいえない
- ☐ あまりあてはまらない
- ☐ あてはまらない

34. 今年1月から5月の間のアルバイト収入額は、月ごとにみて振れ幅はどのくらいでしたか。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 大きかった
- ☐ どちらかといえば大きかった
- ☐ どちらかといえば小さかった
- ☐ 小さかった

35. 今年1月から5月の間のアルバイト収入額について、平均額を実際の収入額が5,000円以上、上回った月・下回った月はそれぞれ何回ありましたか。

4月からアルバイトを始めた方は、4月と5月の平均額に関してお答えください。

1行につき1つだけマークしてください。

	0回	1回	2回	3回	4回
平均額を実際の収入額が5,000円以上、上回った月	☐	☐	☐	☐	☐
平均額を実際の収入額が5,000円以上、下回った月	☐	☐	☐	☐	☐

政治や社会に対するあなたの意識・行動についてうかがいます。

36. 次のそれぞれの項目について、自分自身にどの程度あてはまりますか。それぞれについてもっとも近いものを1つずつ選んでください。

1行につき1つだけマークしてください。

	はい	どちらでもない	いいえ
気ままで風変わりな人と一緒にいると不愉快になる	☐	☐	☐
常々目新しい方法よりも熟達した方法で物事を行うのが好きである	☐	☐	☐
問題を解決するときは、たとえ馬鹿げたことであってもあらゆる可能性を考えようとする	☐	☐	☐
何をするときもいつも確実なものを好む	☐	☐	☐
議論は早く終わらせたいと思う方である	☐	☐	☐

37。 次のそれぞれについて、正しいと思うか、正しくないと思うかを選んでください。

1 行につき 1 つだけマークしてください。

	正しい	正しくない
LGBTには含まれないセクシャルマイノリティの人たちがいる	☐	☐
バイセクシャルとは同性を好きになる人たちの総称である	☐	☐
日本では一定の条件のもと戸籍上の性別を変更することができる	☐	☐
衆議院議員に占める女性の割合は20%を下回る	☐	☐
アファーマティブアクションとは、社会的弱者の権利を保障するために積極的に格差を是正していくことである	☐	☐
MeToo運動とは、性被害やセクハラ被害を告発し、人権意識の啓発を行う社会運動である	☐	☐

- 38。 次のそれぞれの項目について、自分自身にどの程度あてはまりますか。もっとも近い回答を1つずつ選んでください。

1 行につき 1 つだけマークしてください。

	そう思う	どちらかとい えばそう思う	どちらと もいえな い	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わ ない
同性愛者に恋愛感情を持たれるのは嫌だ	☐	☐	☐	☐	☐
企業は利潤が第一なので、セクシャルマイノリティの雇用に必ずしも積極的になる必要はない	☐	☐	☐	☐	☐
男女共同参画社会は実現している	☐	☐	☐	☐	☐
選挙においてクォータ制（女性議員を優先して当選させる枠のこと）を実現すべきである	☐	☐	☐	☐	☐
男は外で働き、女は家庭を守るべきだ	☐	☐	☐	☐	☐

- 39。 あなたの身の回りにセクシャルマイノリティの方はいますか。

1 つだけマークしてください。

- ☐ はい
- ☐ いいえ

- 40。 次のそれぞれの項目について、自分自身にどの程度あてはまりますか。それぞれについてもっとも近いものを1つずつ選んでください。

1 行につき 1 つだけマークしてください。

	あてはま る	少しあて はまる	どちらとも いえない	あまりあては まらない	あてはま らない
自分は人並みに日本の重要な社会問題や政治現象について十分に理解している	☐	☐	☐	☐	☐
人と政治や社会問題に関する話をするとき、自分なりの判断や主観を持てないときがある	☐	☐	☐	☐	☐
自分は政治や社会の諸問題の解決に向けて直接参加しても良いほど、資格と能力を十分に有している	☐	☐	☐	☐	☐

- 41。 次のそれぞれの項目について、自分自身にどの程度あてはまりますか。それぞれについてもっとも近いものを1つずつ選んでください。

1 行につき 1 つだけマークしてください。

	そう思う	どちらかとい えばそう思う	どちらとも いえない	どちらかといえ ばそう思わない	そう思わ ない
現政権は、自らの利害関係によって国家を運営しているように見える	☐	☐	☐	☐	☐
現政権の指導者たちがメディアを通じて国民に言っていることは、だいたい真実だと受け入れてよい	☐	☐	☐	☐	☐
現政権をリードしているだいたいの人々は、日本が直面している問題を解決できるほど資質を備えている	☐	☐	☐	☐	☐

42. あなたはふだん、インターネットやSNS上で社会の諸問題に関する発信やアカウントに対して、フォローや「いいね」をすることがありますか。

1 つだけマークしてください。

- ☐ よくある
- ☐ たまにある
- ☐ あまりない
- ☐ まったくない

43. 以下の項目のうち、最近6ヶ月間に調べたり、「いいね」やフォローをしたりしたものがあればすべて選んでください。

当てはまるものをすべて選択してください。

- ☐ セクシャルマイノリティ
- ☐ 外国人差別
- ☐ 特定の政治家や政党
- ☐ あてはまるものはない

44. あなたはふだん、社会の諸問題について自らSNSで投稿をするなど、他人に情報を発信することがありますか（Twitterのリツイートも含みます）。

1 つだけマークしてください。

- ☐ よくある
- ☐ たまにある
- ☐ あまりない
- ☐ まったくない

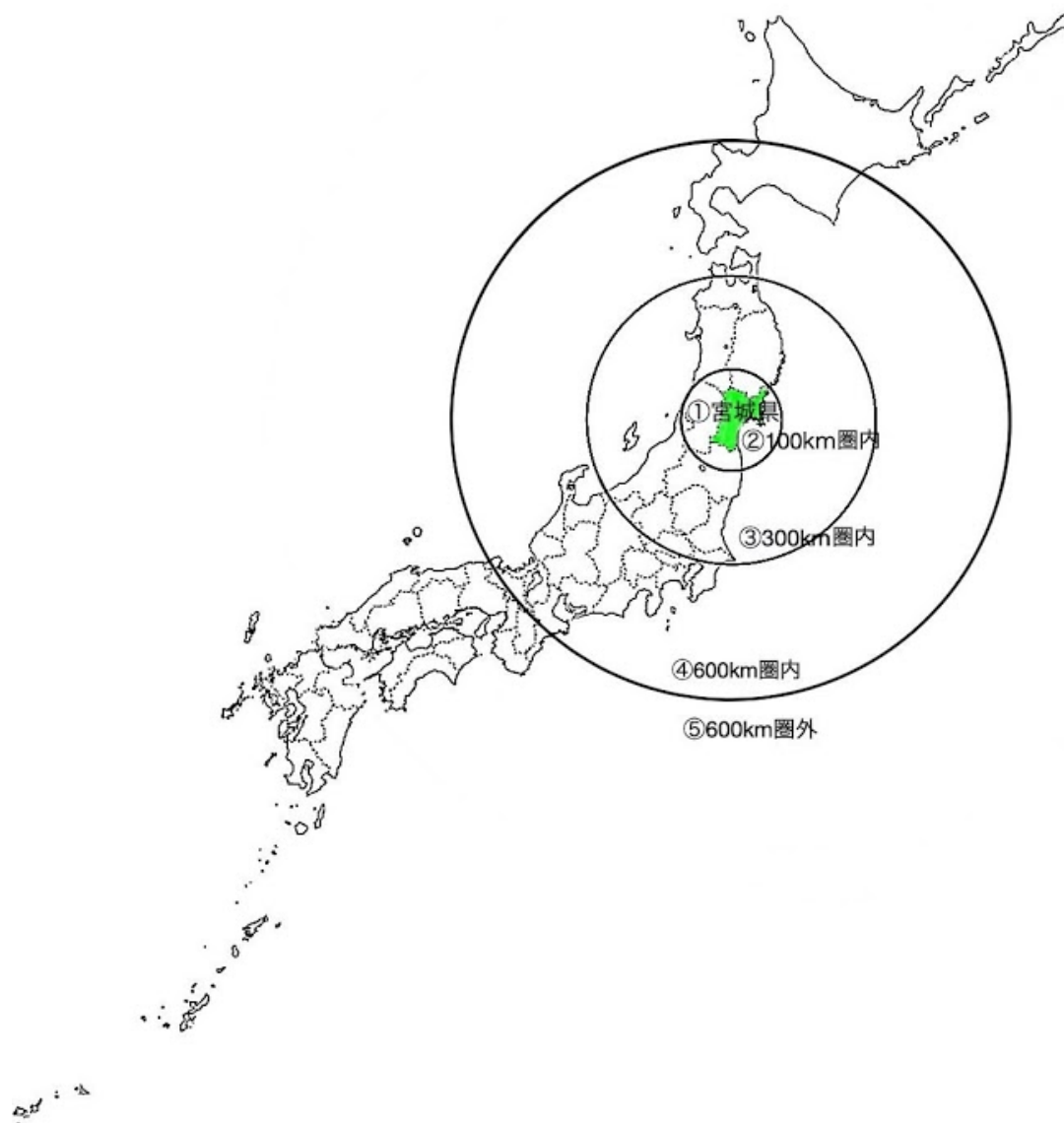
45. 以下の項目のうち、最近6ヶ月間に関連する投稿や発信をしたことがあるものをすべて選んでください。

当てはまるものをすべて選択してください。

- ☐ セクシャルマイノリティ
- ☐ 外国人差別
- ☐ 特定の政治家や政党
- ☐ あてはまるものはない

ふたたび、あなた自身のことについてうかがいます。

46. あなたが大学進学する直前に住んでいた地域についてうかがいます。以下の地図を見て、宮城県からの距離に応じてその地域がどれに該当するかを選んでください。



1 つだけマークしてください。

- ☐ 宮城県
- ☐ ～100km圏内
- ☐ 100km～300km圏内
- ☐ 300km～600km圏内
- ☐ 600km圏外
- ☐ その他（海外など）

47. 以下の都市のうち、これまで住んだ時期や年数にかかわらず、あなたが自分の「出身地」と考えるものを選んでください。

選択肢には主要な都市を掲載しています。該当するものがない場合は、「その他の市町村」あるいは「日本以外」をお選びください。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 札幌市
- ☐ 仙台市
- ☐ さいたま市
- ☐ 東京23区
- ☐ 千葉市
- ☐ 横浜市
- ☐ 川崎市
- ☐ 相模原市
- ☐ 新潟市
- ☐ 静岡市
- ☐ 浜松市
- ☐ 名古屋市
- ☐ 京都市
- ☐ 大阪市
- ☐ 堺市
- ☐ 神戸市
- ☐ 岡山市
- ☐ 広島市
- ☐ 北九州市
- ☐ 福岡市
- ☐ 熊本市
- ☐ その他の市町村
- ☐ 日本以外

48. 現段階で、あなたが卒業後の就職先として居住を希望する地域を、以下からお選びください。未定の方は「未定」を、すでに就職先が決まっている方は、「すでに決まっている」を選んでください。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 北海道
- ☐ 青森県
- ☐ 岩手県
- ☐ 宮城県
- ☐ 秋田県
- ☐ 山形県
- ☐ 福島県
- ☐ 茨城県
- ☐ 栃木県
- ☐ 群馬県
- ☐ 埼玉県
- ☐ 千葉県
- ☐ 東京都
- ☐ 神奈川県
- ☐ 新潟県
- ☐ 富山県
- ☐ 石川県
- ☐ 福井県
- ☐ 山梨県
- ☐ 長野県
- ☐ 岐阜県
- ☐ 静岡県
- ☐ 愛知県
- ☐ 三重県
- ☐ 滋賀県
- ☐ 京都府
- ☐ 大阪府
- ☐ 兵庫県
- ☐ 奈良県
- ☐ 和歌山県
- ☐ 鳥取県

- ☐ 島根県
- ☐ 岡山県
- ☐ 広島県
- ☐ 山口県
- ☐ 徳島県
- ☐ 香川県
- ☐ 愛媛県
- ☐ 高知県
- ☐ 福岡県
- ☐ 佐賀県
- ☐ 長崎県
- ☐ 熊本県
- ☐ 大分県
- ☐ 宮崎県
- ☐ 鹿児島県
- ☐ 沖縄県
- ☐ 海外
- ☐ 未定
- ☐ すでに決まっている

49。 現在、あなたには卒業後の就職先として興味のある職業がありますか。すでに就職先が決まっている方は、「すでに決まっている」をお選びください。

1 つだけマークしてください。

- ☐ はい
- ☐ いいえ
- ☐ すでに決まっている

50. 就職に際して、以下の項目のうち、あなたが1番目に重視するものを選んでください。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 個人の生活と仕事の両立
- ☐ 福利厚生
- ☐ 労働時間
- ☐ 就業規則
- ☐ 企業のブランド力
- ☐ 社会貢献
- ☐ 人のためになること
- ☐ 楽しく生きること
- ☐ たくさんお金を稼ぐこと
- ☐ プライドを持って仕事をする事
- ☐ その他: _____

51. 就職に際して、以下の項目のうち、あなたが2番目に重視するものを選んでください。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 個人の生活と仕事の両立
- ☐ 福利厚生
- ☐ 労働時間
- ☐ 就業規則
- ☐ 企業のブランド力
- ☐ 社会貢献
- ☐ 人のためになること
- ☐ 楽しく生きること
- ☐ たくさんお金を稼ぐこと
- ☐ プライドを持って仕事をする事
- ☐ その他: _____

52. あなたは卒業後の就職において、以下のどちらをより重視しますか。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 就職は希望通りの業種・会社だが、居住地は希望通りの市町村ではない
- ☐ 居住地は希望通りの市町村だが、就職は希望していた業種・会社ではない

53. あなたは、「仕事が在宅ワークになり、かつ十分な収入を確保できる」という状況におかれるとしたら、都市部と地方のどちらへの居住を希望しますか。

ここで言う「都市部」とは札幌市・仙台市・さいたま市・東京23区・千葉市・横浜市・川崎市・相模原市・新潟市・静岡市・浜松市・名古屋市・京都市・大阪市・堺市・神戸市・岡山市・広島市・北九州市・福岡市・熊本市のことを指し、地方とは日本国内のその他の市町村のことを指します。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 都市部
- ☐ 地方
- ☐ 海外
- ☐ わからない

54. あなたが現在所属、活動している団体について、あてはまるものをすべて選んでください。

当てはまるものをすべて選択してください。

- ☐ 学友会
- ☐ サークル
- ☐ アルバイト
- ☐ ボランティア活動
- ☐ あてはまるものはない
- ☐ その他

55. あなたが1週間に課外活動（アルバイト・部活動・サークル）にかかる時間をお答えください。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 5時間未満
- ☐ 5時間以上10時間未満
- ☐ 10時間以上20時間未満
- ☐ 20時間以上30時間未満
- ☐ 30時間以上

56. あなたは現在の生活に満足していますか。

1 つだけマークしてください。

- ☐ 満足している
- ☐ まあまあ満足している
- ☐ どちらともいえない
- ☐ 少し不満である
- ☐ 大いに不満である

57. あなたは学業、趣味への取り組み、人間関係、将来設計に満足していますか。

1 行につき 1 つだけマークしてください。

	満足して いる	まあまあ満足して いる	どちらともい ない	少し不満で ある	大いに不満で ある
学業	☐	☐	☐	☐	☐
趣味への取 り組み	☐	☐	☐	☐	☐
人間関係	☐	☐	☐	☐	☐
将来設計	☐	☐	☐	☐	☐

58. 以下の項目について、最近のあなた自身にどの程度あてはまりますか。それぞれについてもっとも近いものを1つずつ選んでください。

1行につき1つだけマークしてください。

	あてはまる	少しあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	あてはまらない
憂鬱な気分になる	☐	☐	☐	☐	☐
興味や喜びを感じにくい	☐	☐	☐	☐	☐
食欲が異常に増えた、または異常に減った	☐	☐	☐	☐	☐
睡眠の異常（寝付きが悪い、頻繁に目が覚める、眠りすぎる）	☐	☐	☐	☐	☐
そわそわする、または体が重い	☐	☐	☐	☐	☐
疲れやすい	☐	☐	☐	☐	☐
自分を責める	☐	☐	☐	☐	☐
思考力・集中力の低下	☐	☐	☐	☐	☐

59. 以下の項目について、自分自身にどの程度あてはまりますか。それぞれについてもっとも近いものを1つずつ選んでください。

1行につき1つだけマークしてください。

	あてはまる	少し当てはまる	どちらとも言えない	あまりあてはまらない	あてはまらない
もし他の人が自分を受け入れてくれ そうになくても気にしないようにして いる	☐	☐	☐	☐	☐
他の人に避けられたり拒まれたりし ないように努めている	☐	☐	☐	☐	☐
他の人が気にかけてくれるかどうか、 めったに気にしない	☐	☐	☐	☐	☐
困ったときに頼れる人がいると常に 感じていたい	☐	☐	☐	☐	☐
人との繋がりを強く求めている	☐	☐	☐	☐	☐
他の人の計画に自分が含まれてい ないと、とても気になる	☐	☐	☐	☐	☐

60. あなたの現在の居住形態を教えてください。

1つだけマークしてください。

- ☐ 実家
- ☐ 実家以外のアパートやマンションなど（一人暮らし）
- ☐ 実家以外のアパートやマンションなど（複数人で生活）
- ☐ 寮（ユニバーシティハウスを含む）
- ☐ その他: _____

- 61。 現在、同居人を除く他人との対面コミュニケーションを十分に取れていると感じますか。ただし、対面コミュニケーションとは、相手と直接会って行うコミュニケーションを指します。

1 つだけマークしてください。

	1	2	3	4	5	
不十分	☐	☐	☐	☐	☐	十分

このコンテンツは Google が作成または承認したものではありません。

Google フォーム

基礎集計表（N=236）

（1）数値は各カテゴリーの占める割合（%）を示す。ただし、（※）を付した変数は連続変数とみなし、平均値を示している。

（2）NAは1件か2件の時は除外して平均値、分布などを計算し、それ以上の数の場合には、NAをカテゴリーにくわえて計算している。

q01	性別		
	男性		62.8
	女性		36.8
	その他		0.4
q02	※年齢		20.1
q03	学年		
	1年生		0.4
	2年生		50.9
	3年生		37.7
	4年生		8.1
	大学院生		0.9
	研究生		2.1
q04	学部		
	文学部		40.7
	経済学部		20.8
	理学部		19.1
	工学部		13.6
	その他		5.9
q05	入試方式		
	一般入試前期		63.7
	一般入試後期		7.3
	AO入試		27.8
	その他		1.3
q06	※受講コマ数		12.6
q07	現在の学習環境に満足しているか		
	満足		14.4
	やや満足		48.7
	どちらともいえない		17.4
	やや不満		14.4
	不満		5.1
q08_1	今セメスターの学習活動：レポートや課題はただこなしている		
	そう思う		32.9
	どちらかと言えばそう思う		32.5
	どちらともいえない		15.4

	どちらかと言えばそう思わない	17.1
	そう思わない	2.1
q08_2	今セメスターの学習活動：授業には意欲的に参加している	
	そう思う	14.8
	どちらかと言えばそう思う	48.3
	どちらともいえない	22.0
	どちらかと言えばそう思わない	12.7
	そう思わない	2.1
q08_3	今セメスターの学習活動：単位さえ取ればよいと考えて授業に参加している	
	そう思う	10.6
	どちらかと言えばそう思う	25.4
	どちらともいえない	19.5
	どちらかと言えばそう思わない	28.4
	そう思わない	16.1
q08_4	今セメスターの学習活動：自分は学習意欲が高い方だと思う	
	そう思う	10.3
	どちらかと言えばそう思う	29.1
	どちらともいえない	29.1
	どちらかと言えばそう思わない	23.5
	そう思わない	8.1
q08_5	今セメスターの学習活動：勉強が好きである	
	そう思う	15.0
	どちらかと言えばそう思う	41.0
	どちらともいえない	26.5
	どちらかと言えばそう思わない	11.5
	そう思わない	6.0
q09_1	授業の形態ごとの総合的な評価：対面型	
	満足	24.5
	やや満足	32.6
	どちらでもない	12.9
	やや不満	6.9
	不満	1.3
	該当する授業を受講していない	21.9
q09_2	授業の形態ごとの総合的な評価：リアルタイム型	
	満足	15.7
	やや満足	45.8
	どちらでもない	16.5
	やや不満	15.7
	不満	5.5

	該当する授業を受講していない	0.9
q09_3	授業の形態ごとの総合的な評価：オンデマンド型	
	満足	31.3
	やや満足	45.1
	どちらでもない	11.6
	やや不満	7.3
	不満	1.3
	該当する授業を受講していない	3.4
q09_4	授業の形態ごとの総合的な評価：資料配布型	
	満足	10.9
	やや満足	19.6
	どちらでもない	7.8
	やや不満	14.8
	不満	3.5
	該当する授業を受講していない	43.5
q10	今セメスターの授業外学習時間	
	1時間未満	0.4
	1～3時間未満	10.6
	3～5時間未満	15.3
	5～7時間未満	18.6
	7～9時間未満	15.7
	9～11時間未満	10.6
	11～13時間未満	5.1
	13時間以上	23.7
q11	ふだん授業を受けている場所の通信環境への満足	
	満足	51.9
	やや満足	32.3
	どちらでもない	5.1
	やや不満	8.5
	不満	2.1
q12	現在の授業料が適切であると思うか	
	高い	16.5
	やや高い	37.7
	ちょうどよい	27.5
	やや安い	17.0
	安い	0.4
	わからない	16.1
q13	高校卒業以前にできて、今でも定期的に連絡を取り合っている友人の数	
	5人未満	45.3

	5人以上10人未満	32.6
	10人以上15人未満	11.9
	15人以上20人未満	7.2
	20人以上25人未満	2.5
	25人以上30人未満	0.0
	30人以上	0.4
q14	東北大学に通っている高校卒業以前の友人の数	
	0人	32.6
	1人	16.1
	2人	12.7
	3人	11.9
	4人	4.7
	5人	5.1
	6人以上10人未満	11.4
	10人以上	5.5
q15_1	友人関係について：今の自分の友人関係に満足している	
	あてはまる	40.4
	少しあてはまる	28.9
	どちらともいえない	11.5
	あまりあてはまらない	14.9
	あてはまらない	4.3
q15_2	友人関係について：今の友人関係は、自分が望んでいるものと違うと思う	
	あてはまる	8.5
	少しあてはまる	20.3
	どちらともいえない	19.1
	あまりあてはまらない	28.0
	あてはまらない	24.2
q15_3	友人関係について：今の友人付き合いが本当はつらい時がある	
	あてはまる	5.5
	少しあてはまる	14.4
	どちらともいえない	16.1
	あまりあてはまらない	27.1
	あてはまらない	36.9
q16	ふだんSNSを利用しているか	
	利用している	90.2
	利用していない	9.8
q17	ふだん利用しているSNS（複数選択可）	
	Twitter	70.8
	LINE	89.8

	Instagram	51.7
	Facebook	5.9
	その他	0.4
q18	Twitterでもっともよく使うアカウントでの、「個人アカウント」のフォロー数	
	Twitterは利用していない	11.0
	50人未満	28.0
	50人以上100人未満	8.1
	100人以上150人未満	10.6
	150人以上200人未満	3.0
	200人以上250人未満	7.2
	250人以上300人未満	3.0
	300人以上350人未満	1.3
	350人以上400人未満	2.5
	400人以上450人未満	1.7
	450人以上500人未満	1.7
	500人以上	5.5
	非該当	9.7
	NA	6.8
q19	SNSがきっかけで知り合い、実際に会ったことのある友人の数	
	0人	61.7
	1人	7.2
	2人	4.7
	3人	1.7
	4人	0.4
	5人	0.4
	6人以上	14.0
	非該当	9.8
q20	1日あたりの友人とのSNSでのメッセージのやり取りの時間	
	まったくしていない	4.3
	5分未満	12.3
	5~15分未満	23.0
	15~30分未満	21.7
	30分~1時間未満	17.0
	1時間~2時間未満	6.8
	2時間以上	5.1
	非該当	9.8
q21	SNSでのメッセージのやり取りでもっとも多い内容	
	事務連絡	19.7
	遊びや飲み会の約束	18.4

	愚痴や悩みごとの相談	6.4
	近況報告	35.5
	その他	6.0
	非該当	14.1
q22	今年4月の仕送り額	
	なし	31.3
	1万円未満	5.2
	1万円以上3万円未満	21.0
	3万円以上5万円未満	19.7
	5万円以上7万円未満	16.3
	7万円以上9万円未満	5.2
	9万円以上	1.3
q23	今年4月に学費はどこから出していたか（複数選択可）	
	家庭	91.1
	アルバイト	12.7
	奨学金	21.2
	その他	0.9
q24	今年5月の生活費額	
	なし	7.2
	1万円未満	6.4
	1万円以上2万円未満	8.9
	2万円以上3万円未満	21.6
	3万円以上4万円未満	28.4
	4万円以上5万円未満	15.3
	5万円以上6万円未満	6.8
	6万円以上7万円未満	0.9
	7万円以上	1.7
	NA	3.0
q25	今年5月の生活費以外の出費額	
	なし	9.9
	5千円未満	18.0
	5千円以上 1 万円未満	27.5
	1万円以上2万円未満	26.6
	2万円以上3万円未満	9.9
	3万円以上	8.2
q26	コロナ禍以前とくらべた交際費額の変化	
	大きくなった	13.1
	少し大きくなった	9.3
	変わっていない	27.5

	少し小さくなった	15.7
	小さくなった	32.2
	NA	2.1
q27	授業料免除制度の利用	
	利用している	5.6
	利用していない	88.0
	わからない	6.4
q28	奨学金制度の利用	
	利用している	30.5
	利用していない	68.2
	わからない	1.3
q29	今年4月の奨学金受給額	
	なし	66.5
	3万円未満	3.4
	3万円以上5万円未満	13.1
	5万円以上8万円未満	8.9
	8万円以上	5.1
	NA	3.0
q30	今年1月から5月の間の月の平均アルバイト収入額	
	アルバイトをしていない	29.9
	1万円未満	8.1
	1万円以上3万円未満	29.5
	3万円以上5万円未満	22.2
	5万円以上7万円未満	7.7
	7万円以上9万円未満	1.7
	9万円以上	0.9
q31	今年1月から5月の間の週平均アルバイト時間	
	5時間未満	21.7
	5時間～10時間未満	25.5
	10時間～15時間未満	14.5
	15時間～20時間未満	5.5
	20時間～25時間未満	12.8
	25時間以上	1.7
	非該当	29.8
q32	アルバイトを始めた理由	
	お小遣いのため	33.8
	社会勉強・自分の将来の役に立てるため	20.5
	学費・生活費のため	12.0
	保護者や友人に言われたため	1.3

	その他	2.6
	非該当	29.9
q33	自分のアルバイトは自発性が必要なものか	
	あてはまる	28.9
	少しあてはまる	21.3
	どちらともいえない	3.4
	あまりあてはまらない	10.2
	あてはまらない	6.4
	非該当	29.8
q34	今年1月から5月の間のアルバイト収入額の振れ幅	
	大きかった	17.4
	どちらかといえば大きかった	14.8
	どちらかといえば小さかった	17.0
	小さかった	19.1
	非該当	29.7
	NA	2.1
q35	アルバイト収入平均額を実際の収入額が5,000円以上、	
	上回った月の回数	2.1
	下回った月の回数	2.3
q36_1	気ままで風変わりな人と一緒にいると不愉快になる	
	はい	15.1
	どちらでもない	29.7
	いいえ	55.2
q36_2	常々目新しい方法よりも熟達した方法で物事を行うのが好きである	
	はい	50.9
	どちらでもない	38.4
	いいえ	10.8
q36_3	問題を解決するときは、たとえ馬鹿げたことであってもあらゆる可能性を考えようとする	
	はい	58.2
	どちらでもない	28.9
	いいえ	12.9
q36_4	何をするときもいつも確実なものを好む	
	はい	56.0
	どちらでもない	29.7
	いいえ	14.2
q36_5	議論は早く終わらせたいと思う方である	
	はい	46.6
	どちらでもない	26.7
	いいえ	24.6

	NA	2.1
q37_1	LGBTには含まれないセクシャルマイノリティの人たちがいる	
	はい	93.2
	いいえ	4.2
	NA	2.5
q37_2	バイセクシャルとは同性を好きになる人たちの総称である	
	はい	18.2
	いいえ	79.2
	NA	2.5
q37_3	日本では一定の条件のもと戸籍上の性別を変更することができる	
	はい	73.7
	いいえ	23.7
	NA	2.5
q37_4	衆議院議員に占める女性の割合は20%を下回る	
	はい	89.0
	いいえ	8.1
	NA	3.0
q37_5	アファーマティブアクションとは、社会的弱者の権利を保障するために積極的に格差を是正していくことである	
	はい	79.2
	いいえ	15.7
	NA	5.1
q37_6	MeToo運動とは、性被害やセクハラ被害を告発し、人権意識の啓発を行う社会運動である	
	はい	84.3
	いいえ	11.9
	NA	3.8
q38_1	同性愛者に恋愛感情を持たれるのは嫌だ	
	そう思う	8.1
	どちらかと言えばそう思う	19.5
	どちらともいえない	23.3
	どちらかと言えばそう思わない	19.9
	そう思わない	25.4
	NA	3.8
q38_2	企業は利潤が第一なので、セクシャルマイノリティの雇用に必ずしも積極的になる必要はない	
	そう思う	9.3
	どちらかと言えばそう思う	17.0
	どちらともいえない	17.0
	どちらかと言えばそう思わない	28.4

	そう思わない	24.6
	NA	3.8
q38_3	男女共同参画社会は実現してきている	
	そう思う	2.5
	どちらかと言えばそう思う	18.6
	どちらともいえない	17.8
	どちらかと言えばそう思わない	27.5
	そう思わない	29.7
	NA	3.8
q38_4	選挙においてクォータ制（女性議員を優先して当選させる枠のこと）を実現すべきである	
	そう思う	6.8
	どちらかと言えばそう思う	11.9
	どちらともいえない	22.0
	どちらかと言えばそう思わない	27.5
	そう思わない	28.0
	NA	3.8
q38_5	男は外で働き、女は家庭を守るべきだ	
	そう思う	1.3
	どちらかと言えばそう思う	3.4
	どちらともいえない	5.9
	どちらかと言えばそう思わない	13.6
	そう思わない	72.0
	NA	3.8
q39	身の回りにセクシャルマイノリティがいるか	
	はい	22.5
	いいえ	73.7
	NA	3.8
q40_1	自分は人並みに日本の重要な社会問題や政治現象について十分に理解している	
	あてはまる	9.3
	少しあてはまる	26.3
	どちらともいえない	23.7
	あまりあてはまらない	28.4
	あてはまらない	9.3
	NA	3.0
q40_2	人と政治や社会問題に関する話をするとき、自分なりの判断や主観を持ってないときがある	
	あてはまる	20.3
	少しあてはまる	30.9
	どちらともいえない	15.3
	あまりあてはまらない	21.6

	あてはまらない	8.5
	NA	3.4
q40_3	自分は政治や社会の諸問題の解決に向けて直接参加しても良いほど、資格と能力を十分に有している	
	あてはまる	3.0
	少しあてはまる	9.8
	どちらともいえない	21.2
	あまりあてはまらない	34.3
	あてはまらない	28.4
	NA	3.4
q41_1	現政権は、自らの利害関係によって国家を運営しているように見える	
	そう思う	20.3
	どちらかと言えばそう思う	33.9
	どちらともいえない	27.1
	どちらかと言えばそう思わない	12.7
	そう思わない	2.1
	NA	3.8
q41_2	現政権の指導者たちがメディアを通じて国民に言っていることは、だいたい真実だと受け入れてよい	
	そう思う	1.3
	どちらかと言えばそう思う	12.7
	どちらともいえない	23.3
	どちらかと言えばそう思わない	36.9
	そう思わない	22.0
	NA	3.8
q41_3	現政権をリードしているだいたいの人々は、日本が直面している問題を解決できるほど資質を備えている	
	そう思う	1.3
	どちらかと言えばそう思う	11.9
	どちらともいえない	32.2
	どちらかと言えばそう思わない	30.1
	そう思わない	21.2
	NA	3.4
q42	社会の諸問題に関する発信やアカウントに対して、フォローや「いいね」をすることがあるか	
	よくある	2.5
	たまにある	19.1
	あまりない	20.8
	まったくない	54.7

	NA	3.0
q43	最近6ヶ月間に調べるか、「いいね」やフォローしたもの（複数選択可）	
	セクシャルマイノリティ	17.4
	外国人差別	12.3
	特定の政治家や政党	8.5
	あてはまるものはない	65.3
q44	社会の諸問題について自らSNSで投稿をするなど、他人に情報を発信することがあるか	
	よくある	0.9
	たまにある	5.5
	あまりない	17.0
	まったくない	72.9
	NA	3.8
q45	最近6ヶ月間に関連する投稿や発信をしたことがあるもの（複数選択可）	
	セクシャルマイノリティ	6.4
	外国人差別	3.0
	特定の政治家や政党	3.4
	あてはまるものはない	85.6
q46	大学進学する直前に住んでいた地域	
	宮城県	17.5
	～100KM圏内	8.5
	100KM～300KM圏内	35.3
	300KM～600KM圏内	29.8
	600KM圏外	6.8
	その他（海外など）	2.1
q47	「出身地」だと考える都市	
	札幌市	1.3
	仙台市	12.7
	さいたま市	4.2
	東京23区	5.1
	千葉市	0.4
	横浜市	3.0
	川崎市	0.4
	相模原市	0.4
	新潟市	2.5
	静岡市	0.0
	浜松市	1.3
	名古屋市	1.3
	京都市	0.0
	大阪市	0.4

	堺市	0.0
	神戸市	0.4
	岡山市	0.4
	広島市	0.4
	北九州市	0.0
	福岡市	0.8
	熊本市	0.0
	その他の市町村	62.3
	日本以外	2.1
q48	卒業後の就職先として居住を希望する地域	
	北海道	0.8
	青森県	0.4
	岩手県	1.7
	宮城県	9.8
	秋田県	1.3
	山形県	2.5
	福島県	2.1
	茨城県	0.4
	栃木県	0.4
	群馬県	1.7
	埼玉県	2.5
	千葉県	1.3
	東京都	19.1
	神奈川県	3.0
	新潟県	0.4
	富山県	0.4
	石川県	0.4
	福井県	0.0
	山梨県	0.8
	長野県	0.0
	岐阜県	0.4
	静岡県	1.7
	愛知県	0.0
	三重県	0.0
	滋賀県	0.0
	京都府	0.0
	大阪府	0.8
	兵庫県	0.4
	奈良県	0.0

	和歌山県	0.0
	鳥取県	0.0
	島根県	0.0
	岡山県	0.0
	広島県	0.0
	山口県	0.0
	徳島県	0.0
	香川県	0.0
	愛媛県	0.0
	高知県	0.0
	福岡県	0.0
	佐賀県	0.0
	長崎県	0.0
	熊本県	0.0
	大分県	0.0
	宮崎県	0.0
	鹿児島県	0.0
	沖縄県	0.0
	海外	3.0
	未定	43.6
	すでに決まっている	0.0
q49	就職先として興味のある職業があるか	
	はい	59.4
	いいえ	39.7
	すでに決まっている	1.3
q50	就職の際に1番目に重視するもの	
	個人の生活と仕事の両立	35.2
	福利厚生	5.5
	労働時間	2.5
	就業規則	0.4
	企業のブランド力	1.7
	社会貢献	5.1
	人のためになること	5.9
	楽しく生きること	23.7
	たくさんお金を稼ぐこと	9.8
	プライドを持って仕事をする	4.7
	その他	3.8
	NA	1.7
q51	就職の際に2番目に重視するもの	

	個人の生活と仕事の両立	21.2
	福利厚生	9.3
	労働時間	8.9
	就業規則	2.1
	企業のブランド力	0.9
	社会貢献	7.2
	人のためになること	8.9
	楽しく生きること	16.1
	たくさんお金を稼ぐこと	15.3
	プライドを持って仕事をする	7.2
	その他	1.7
	NA	1.3
q52	卒業後の就職においてより重視するもの	
	就職は希望通りの業種・会社だが、居住地は希望通りの市町村だが、	81.8
	居住地は希望通りの市町村だが、就職は希望していた業種・会社	15.7
	NA	2.5
q53	在宅ワークが可能な場合の居住希望	
	都市部	42.8
	地方	42.0
	海外	5.1
	わからない	8.1
	NA	2.1
q54	所属する団体（複数選択可）	
	学友会	39.0
	サークル	42.8
	アルバイト	53.0
	ボランティア活動	8.9
	あてはまるものはない	11.9
	その他	4.7
q55	1週間に課外活動にかける時間	
	5時間未満	41.1
	5時間以上10時間未満	22.5
	10時間以上20時間未満	22.5
	20時間以上30時間未満	7.2
	30時間以上	3.0
	NA	3.8
q56	現在の生活に満足しているか	
	満足している	16.5
	まあまあ満足している	42.0

	どちらともいえない	14.0
	少し不満である	19.1
	大いに不満である	5.9
	NA	2.5
q57_1	満足度：学業	
	満足している	12.7
	まあまあ満足している	45.8
	どちらともいえない	16.5
	少し不満である	18.6
	大いに不満である	4.2
	NA	2.1
q57_2	満足度：趣味への取り組み	
	満足している	17.8
	まあまあ満足している	44.5
	どちらともいえない	13.1
	少し不満である	15.7
	大いに不満である	6.8
	NA	2.1
q57_3	満足度：人間関係	
	満足している	12.3
	まあまあ満足している	42.8
	どちらともいえない	16.1
	少し不満である	20.8
	大いに不満である	5.5
	NA	2.5
q57_4	満足度：将来設計	
	満足している	4.7
	まあまあ満足している	18.6
	どちらともいえない	27.1
	少し不満である	33.9
	大いに不満である	13.6
	NA	2.1
q58_1	憂鬱な気分になる	
	あてはまる	24.2
	少しあてはまる	42.4
	どちらともいえない	7.2
	あまりあてはまらない	12.3
	あてはまらない	11.0
	NA	3.0

q58_2	興味や喜びを感じにくい	
	あてはまる	7.6
	少しあてはまる	23.3
	どちらともいえない	10.6
	あまりあてはまらない	33.5
	あてはまらない	22.5
	NA	2.5
q58_3	食欲が異常に増えた、または異常に減った	
	あてはまる	5.5
	少しあてはまる	18.6
	どちらともいえない	14.4
	あまりあてはまらない	20.8
	あてはまらない	37.3
	NA	3.4
q58_4	睡眠の異常（寝付きが悪い、頻繁に目が覚める、眠りすぎる）	
	あてはまる	15.3
	少しあてはまる	24.6
	どちらともいえない	10.6
	あまりあてはまらない	20.3
	あてはまらない	26.7
	NA	2.5
q58_5	そわそわする、または体が重い	
	あてはまる	9.3
	少しあてはまる	22.0
	どちらともいえない	12.3
	あまりあてはまらない	25.4
	あてはまらない	27.1
	NA	3.8
q58_6	疲れやすい	
	あてはまる	16.5
	少しあてはまる	37.7
	どちらともいえない	9.3
	あまりあてはまらない	20.3
	あてはまらない	13.1
	NA	3.0
q58_7	自分を責める	
	あてはまる	14.4
	少しあてはまる	26.7
	どちらともいえない	17.4

	あまりあてはまらない	14.8
	あてはまらない	23.7
	NA	3.0
q58_8	思考力・集中力の低下	
	あてはまる	19.5
	少しあてはまる	36.0
	どちらともいえない	13.6
	あまりあてはまらない	17.4
	あてはまらない	11.0
	NA	2.5
q59_1	もし他の人が自分を受け入れてくれそうになくても気にしないようにしている	
	あてはまる	13.6
	少しあてはまる	30.5
	どちらともいえない	14.4
	あまりあてはまらない	25.0
	あてはまらない	13.6
	NA	3.0
q59_2	他の人に避けられたり拒まれたりしないように努めている	
	あてはまる	25.0
	少しあてはまる	47.5
	どちらともいえない	9.8
	あまりあてはまらない	10.6
	あてはまらない	4.2
	NA	3.0
q59_3	他の人が気にかけてくれるかどうか、めったに気にしない	
	あてはまる	5.1
	少しあてはまる	13.1
	どちらともいえない	14.4
	あまりあてはまらない	43.2
	あてはまらない	21.2
	NA	3.0
q59_4	困ったときに頼れる人がいると常に感じていたい	
	あてはまる	19.1
	少しあてはまる	33.5
	どちらともいえない	15.7
	あまりあてはまらない	20.3
	あてはまらない	8.5
	NA	3.0
q59_5	人との繋がりを強く求めている	

	あてはまる	17.8
	少しあてはまる	28.0
	どちらともいえない	21.6
	あまりあてはまらない	19.5
	あてはまらない	9.8
	NA	3.4
q59_6	他の人の計画に自分が含まれていないと、とても気になる	
	あてはまる	8.9
	少しあてはまる	30.1
	どちらともいえない	16.5
	あまりあてはまらない	22.9
	あてはまらない	18.2
	NA	3.4
q60	現在の居住形態	
	実家	21.2
	実家以外のアパートやマンションなど(一人暮らし)	64.4
	実家以外のアパートやマンションなど(複数人で生活)	5.1
	寮(ユニバーシティハウスを含む)	7.2
	その他	0.4
	NA	1.7
q61	同居人を除く他人との対面コミュニケーションを十分に取れているか	
	1点 (不十分)	17.8
	2点	28.0
	3点	19.5
	4点	19.5
	5点 (十分)	13.6
	NA	1.7